空飛ぶ悪夢で会いましょう

大岡俊彦

序

人はなぜ、夢の中で空を飛べるのでしょう？
かつて飛べたからじゃないか。
ぼくはそう考えています。

「明晰夢（めいせきむ）」という言葉を、みなさんは聞いたことはないですか？
「ただはっきりとした夢」のことではありません。夢の中で「これは夢だ」と気づくと、夢の中を自由にコントロールできるようになる――そう聞いたことはありませんか？
明晰夢の中では五感が明晰になります。だからそう呼ぶのです。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚は研ぎ澄まされ、普段の何十倍にも増幅されます。気持ち良さは何十倍。こわいのも何十倍。あまりにも五感が拡大され、第六感に到達する人もいるくらい。「神に会った」という預言者たちは、実は明晰夢を見ていたのかも？
ぼくたちは〈空飛ぶサークル〉といいます。明晰夢へ意図的に入る方法をマスターし、その夢の中で空を一緒に飛ぼうよ、というサークルです。とても爽快です。快感です。重力から解き放たれましょう。地上全体を庭にし、全てを眺めましょう。

仕事が辛い？　将来の目標が見えない？　思った通りの人生を歩めていない？　それは、夢の中で空飛ぶ体験をして「人生は自由に飛べる」と思い出していないからです。あなたはもともと自由なんです。ただ、空を飛ぶ記憶を忘れているだけ。

さあ。明晰夢で飛びましょう。
ぼくら〈空飛ぶサークル〉に興味のある方は、以下にメールを。

〈空飛ぶサークル〉主宰　轡（くつわ）　了（りょう）

復元された閲覧履歴とＩＰを照合する。
「間違いない」
半年前に彼女はこれを見たと、高橋（たかはし）は確信した。

第一章　空を飛ぶ男

1

高橋は説明するのを諦めた。
どうせ理解されないからだ。
その代わり、欲情することにした。この無理解の牢獄をやり過ごす、うまい手を思いついたと思った。
手を伸ばせば届く長い髪。グレーのタイトスカートに隠された長い脚。白いブラウスの中で自己主張する胸。上司に叱責されているこの場面で、欲情するのは変態だ、普通ならばそう思う。だが相手が立花涼子（たちばなりょうこ）だと言えば、誰もが納得するだろう。
「あのね？　聞いてる？」
彼女が喋る度に揺れる髪。そこから漂う香りが、高橋の鼻腔を甘露のようにくすぐった。俺が欲情しているなど、彼女は知りもしないだろう。そう思えば思うほど、「だれにも知られていない」という快感が、脳に充満してきた。灰色のオフィス、灰色の人工島天王洲（てんのうず）アイル。灰色の服の中の肉体に、桃色を感じている俺。
「あ……。う……」
高橋は、鼻息のような声でしか反論できなかった。先ほどから高橋は、現実ではこの声しか出していない。
――いつものことだ。

高橋は人前でうまく話せない。目の前の人間は、俺が何を考えているか分らず、不気味だと思い、無理解と距離だけが広がってゆくのだ。いつものことだ。コミュ障高橋巧(たくみ)。どうせ理解されないのなら、この嵐が止むまで待つ。それは高橋の、生き方の癖のようなものであった。

目の前の上司立花涼子は、営業から上がって来た評判の美人だ。学生時代モデルをやっていたらしい。長くて細い手足、小顔で八頭身のスタイルを見れば納得もいく。スーツの着こなしやメイクばかりか、所作や姿勢ごとすらりとしていた。どうせ人生もすらりとしているのだろう。表通りを歩いてきた匂いがする。それは、じめじめした場所で生きてきた人間にしか分らない、日なたの匂いだ。

そんな人間が何故俺の仕事の査定をしているのか、意味が分からない。開発の仕事を理解していない人間が、何故査定をするのか。この会社は狂っているとすら高橋は思う。

高橋はエンジニアである。機械エンジンではなく、触るのはＩＴの心臓部(エンジン)、つまりプログラムだ。高橋は人間と殆ど喋らない。話し相手はコード――プログラムの実体である。彼の言語や会話は、intやvoidやbooleanや、threading.threadや返り値やエラーコードで埋め尽くされている。コンピュータのコードというのはただの論理である分、摩擦や材料や三次元空間の制約を受けない為、機械歯車よりずっと複雑な噛み合い方をする。物理エンジンを設計するハードエンジニアよりも、ソフトエンジニアは次元が上がってしまった歯車を噛み合わせなければならない。

高橋は現実では不気味な鼻息を漏らすだけだが、何も考えていないわけではない。むしろ人一倍考えているからこそ、ｎ次元の歯車を組み立て、分解できる。ただそれを、日本語で伝達することが出来ないだけだ。

「黙ってちゃ分らないじゃない？　お得意様から言われたの。前のバージョンとdiff取っても三行しか変わってなくて、百万円はないでしょうって。三行で百万貰えるなら、向こうの席の石川君は億万プレイヤーになってしまう」

――それは石川君が無能なだけだろ。

高橋は思っても口に出せない。日本語が不自由なのではない。コミュニケーションが不自由なのだ。黙ったままの高橋に、涼子はもう一度尋ねた。

「だから、この一か月かけて三行しかコード書いてないんでしょう？」

――そもそもですね。

高橋の言葉は、彼の脳内で弾けた。

――あの複雑怪奇な迷宮を全て探検した上で、たったの三工程で直したんだぞ？　この美しさに何故気づかない？　俺はその珠玉の三ワードに至るまでに、何十人もが上書きし続けたシステムを、一か月で読み解いたんだ。チケット発行システムと各会社の認証システムと、通信エラーのどこに不具合があるか分らない。どこかの海底から出土した歯車群

をどすんと渡されて、「直してくれ」って、そんな馬鹿なって話だ。スパゲッティどころじゃない。世界中の麺類持ってきてもこれより絡まんわ。いや、量じゃない。階層だ。レイヤーは最深で百を超えた。分岐を考えれば状態遷移数は天文学的。どこがどこを参照しているか、３ＤＣＡＤでぐるぐる回してみないと分らん位。こんな絡まり尽くした漁師の網みたいなものが、なんで今まで動いていたのか分らんわ。一体何社の何人が、このモンスターを造り上げたんだ？　フォーマットもバラバラ、やり方もバラバラ、バラバラとバラバラを繋ぐ配管だらけ、ニューヨークの地下水道網かよ。大体、他人の論理ほど面倒なものはない。他人ほど面倒なものはない。優先順位が違う、前提が違う、筋道が違う、好みも人生観もツールも違う。俺とあんたが、分かり合えないことと同じだ。それを全部紐解いて、しかもたった三オペレーションで機能不全を回復させた。どんな将棋名人より俺を褒めるべきだろうが！

頭の中で浮かんだこれらは、現実空間に吐き出されることはなく、「あ……。う……」という鼻息にしか変換されなかった。

何から彼女に説明すればいいか、分らなかったからである。

#includeからだろうか？　コンパイラとは何かからか。ゼロとイチで何故ＰＣは動くかからか？

「……事情も分らないんじゃあ私も味方になれない。凄腕エンジニアだって聞いてたから、期待してたのに」

だから高橋は欲情する。無理解という断崖に、一方的に仄闇い梯子を渡すことで、生の実感を得たいのだと自己分析した。

何故これまでこの美人上司に欲情したことがなかったのか、高橋には不思議でしょうがなかった。高橋は大きく息を吸い、彼女の髪の匂いや香水に混じった体臭まで、細かく記憶する。

彼女に復讐することに決めた。復讐といっても、物理的行為やネットストーキングに及ぶわけではない。もっと合法的なやり方を高橋は持っていた。

復讐するのは、夢の中でだ。

高橋巧は明晰夢実践者である。

いつそれを覚えたのか、記憶は定かではない。だが異様に現実感がある夢を見て、起きたらすぐ忘れる筈の夢を、何日も鮮やかに覚えている経験をしてからは、意図的にそれを起こせるように訓練してきた。「これは夢だ」、夢の中でそう自覚すると、現実より現実感のある夢を、自分の思うままコントロールできると分ってきた。夢は自分の主観で、だから作り替えることができる。現実を超えた超現実を、高橋はいつの間にか自在に創り出せるようになっていた。それに「明晰夢」という名称がついていて、その実践者がどこかにいて、やり方を教えあっていることは、大人になって知ったことだ。つまり高橋は、誰の力も借りることなく、既に明晰夢マスターであった。高橋は明晰夢の中で空を飛び、世界を好きに改変していた。それはコンピュータの世界を、意のままにコントロールすることに、似ていたかも知れない。

もし夢を自由に改変できるとしたら？　現実以上に現実感があり、五感が現実以上に鋭敏になるとしたら、何をする？

殆どの人はセックスをする。

夢の中に「理想の女」を出現させ、現実以上に快感の強いセックスをする。「理想のシチュエーション」「理想のプレイ」を出現させられるのだ。――誰と。どこで。理想の始まり。理想の展開。理想のフィニッシュ。色、形、手触り、匂い。

高橋はアイドルと何人もやった。モデルや女優ともだ。グループアイドルとは乱交した。ステージ上でファン達に見せつけた。気に入った女は何度も呼び出した。セーラー服、水着、ボンテージ、レースクイーン。好きな服を着せることも脱がすことも、好きな体位も出来る。夢精がもっとも気持ちいいのは、脳のリミッターが外れているからだという。その感度でやりまくった。初恋の女も、クラスの女子全員も、夢の中で好きなようにした。

知っている女と全員やったあとは、街で知らない美女を探し続けた。街ですれ違うイイ女がいれば、徹底的に記憶する。すれ違うだけでは曖昧で、だから尾行した。カフェにでも入ってくれれば最高だ。なるべく近くに席を取り、舐め回すように記憶する。まあ夢の中で舐め回すのだがな。毛穴まで見えるように、服の皺一本まで再現できるように記憶した。表情はどう変わるのか。手や足はどう動くのか。電話で喋ったり、友達といれば最高だ。声のトーンが細部まで再現できる。彼氏といたら最上だ。お前の知らないこの女のものすごい姿を、今夜俺だけが味わうのだと無表情で大笑いした。

そしてこれは合法である。なにせ高橋の夢の中だ。誰にも不可侵の、脳内の、主観の出来事だ。俺が俺の為に俺だけの夢を愉しんで、何が悪い？

月光が高橋の部屋に差し込む。薄明りに照らされているのは、散らかった機材たちだ。複数の規格のコネクタは分岐し、散逸し、ＵＳＢやＨＤＭＩは絡まり、データ構造と似たような物理迷宮と化している。その中で高橋は宴を催す。儀式だ。コンビニで「好きなものを全部買う」贅沢をし、ストロング缶を空にして気分を上げた。眠気がやって来た。部屋を調光し、明かりと闇の中間にする。そして薄汚れた布団を股に挟み横になる。これは明晰夢へ入るための、高橋なりの決まった行動（ルーチン）である。

夢は、レム睡眠の時に起こる。浅い睡眠と深い睡眠は九十分を周期として切り替わる。浅い時は眼球の反射運動が起こる（Rapid Eye Movement）ことが知られ、この頭文字を取ってREMだ。夢はこの時にしか見ない。意図的にレム睡眠を起こすやり方は、「寝つきの悪い姿勢で寝て、金縛りを人工的に起こす」が知られている。金縛り現象は霊なるものの出現ではなく、「脳が覚醒しているにも関わらず、肉体が睡眠に入ってしまった」現象というのが現代の説だ。肉体が利かないことで脳が恐怖し、ありもしない幻覚を作ることで辻褄合わせをするのだと。明晰夢は、この状態を意図的に起こして入り易くする。

浅い肉体の睡眠、覚醒している脳。ここは夢の中だと自覚できる半覚醒状態は、こうしてログインすることが可能になる。

金縛りが来たら、わざと寝返りを大きく打つ。ローリング法といって、うまくいくと肉体を抜け殻に、するりと魂だけ出られたような感覚になる。眠っている肉体を、空中から見る感覚になる。これを「幽体離脱」と呼ぶ一派がある。一九六〇年のアメリカで、元録音技師ロバート・モンローは、この体外離脱体験（アウト・オブ・ボディ・エクスペリエンス）（OBE）を人為的に起こす実験をして

いた。体外離脱が霊的なものかどうかは不明だが、深い瞑想状態で現れるθ波（6Hz前後）が出ると、そのような状態を再現できることが分ってきた。モンローは、左右から微妙に異なる周波数の音を出す（バイノーラル録音）と、左脳と右脳がその差分の周波数に同調するというヘミシンク現象を発見した。θ波分、6Hzずらして再生すれば、人工的にθ波を脳に出させることが可能になったのだ。高橋は、この体外離脱現象こそ明晰夢であると考えている。自由に飛び回れる感覚。感覚が何倍にも増幅されること。そして夢を改変できる意識状態。明晰夢とはすなわち、意識喪失の深い谷に落ち込む前の、踊り場の瞑想であると。

高橋は、ネットで仕入れた6Hzのヘミシンク音楽をヘッドホンから流す。サーという雨のようなホワイトノイズが、次第に大きく、ざりざりしてくると、合図である。音が唸り、波打ち、金属を叩いたような重い音になってゆく。そうしたら、大きく寝返りを打てばいい。魂の脱皮だ。

ごろり。

……むくり。

眠る前と変わらない、モノに溢れた六畳間があった。高橋は炬燵に置いた煙草を取り、火をつけた。紫煙は広がらない。煙草に、吸い込まれてゆく。

「よし。ここは夢だ」

明晰夢実践者は、ここが夢の中であると自覚する為の、個人的符牒（サイン）を持っていることが多い。ポピュラーなものに「手の平を見る」がある。夢の中では細かいことが再現できないことが多く、手相や指紋はその代表的なものだ。同様にカレンダーや新聞には、文字が書かれていないことが多いという。あるいは、鏡に映り込みがないなどのディテール不足で判断することもある。夢は所詮脳内補完だ。細かい所は省略される。

高橋のサインは、煙草に吸い込まれる煙だ。つまりここは、俺の思うようになる。

「イイーヤッホウウウウウッ！！！」

高橋は奇声を上げた。

「王の帰還だ！　主がここに帰ってきた！　おかえりなさい！　ただいま！」

高橋が今日現実で口に出した言葉の数より、この叫びの方が既に多かった。

「ハアアアアアアア！」

大声を張り上げ、高橋は掌を構えた。

白い天井が空に吸い込まれるように飛んだ。吊るされた緑色の電灯は、コードを尾のようにはためかせ飛んで行く。四角で切り取られた青空。青の光が部屋に満ち、影も光も青くなる。

突然床が抜けたらどうなるか。

一瞬浮いたような心地を得、次に体は支えを失って落ちるだろう。

激突するべき地面がなかったら。

バンジージャンプのように、最初はゆっくりと、そして徐々に加速して落ちるだろう。

高橋はその逆だ。自分を上から押さえつけている天井が突如なくなれば、最初はふわりと、次は加速して、上に落ちてゆく。自由落下ならば途中で体勢を崩して体は回転をはじめ、天と地が分らぬまま重力の谷底へ呑まれてゆくだろうが、高橋はそうではない。体を制御し、己の意思で空へ落ちてゆく。この青い空は俺のもの。俺の自由落下ならぬ、自由

飛行の舞台である。
そうだ。俺は空の王。
この頬を切り裂く風も、伸ばした腕が感じる雲も、耳の蝸牛で渦巻く大気も、逆立つ髪も、回転するときに感じる体軸の感覚も、俺が空を飛ぶことを実感させてくれる。明晰夢は五感を増幅する。快感は何倍にも増幅され、直接俺の脳と同期する。この感覚こそ、自由の感覚である。
夢の中で空を飛ぶには、何種類かのやり方がある。走りながら手を広げ、羽の代わりに空気を切るのがポピュラーだ。羽ばたくより飛行機の羽のように固定するといいそうだ。手を広げて胸を空気の上に投げ出すようにして飛行を開始する者もいる。飛行機より船に近いやり方なのだろう。夢は自分の経験と密接に関係する。それぞれが「飛べる」と思いこむポーズで離陸する。
足下には、高橋のくだらないアパートとくだらない近所の街が見えた。会社と往復するだけのしょうもない道、商店街。高橋はどんどん上がった。雲の上で体を反転し、背中から落ちる。空が、雲が、抱きしめられる距離から遠ざかる。体を反転すれば東京が見える。もう自分の部屋がどこにあるか分らず、そんなことはどうでも良い。
高橋は両手を挙げた。
「おっぱい廊下よ！」
広げた両手に合わせ、街が改変されてゆく。家から家が生えた。屋根が割れ、家からビルが生えた。その中から大理石の壁が現れ、高橋の前に美術館のような廊下を作り出す。赤いカーペットが床を割って現れ、燭台が次々に灯り、左右の壁に無限のおっぱいが現れた。高橋は奇声を上げて走る。たわわなおっぱい、品ある白いおっぱい、重量感のある下を向いたおっぱい、わずかに膨らみ、ピンクの点のような乳首のおっぱい、外向き、内向き、弾け感、色つや。その千差万別のおっぱいは、これまで高橋が夢の中で交わった、全てのおっぱいであった。
広げた両手におっぱいが次々と触れる。おっぱいは「あああん」と順番に嬌声を上げ、ぶるんぶるんと異なる震え方をした。今まで征服してきた女たちの、高い声も低い声も混ざった、世にも美しい交響楽だ。高橋はその指揮者となり、叫ぶ。
「立花アアア涼子オオオオオオオ！」
廊下から砲弾のように飛び出た。向かうは会社のある天王洲アイル。どぶの匂いがいつまでも取れない、人工運河の中の人工島。ウォーターフロントとは名ばかりの廃墟島が、いつの間にか青空から灰色に変わった空に浮いている。東京の埋め立て地は、何故かいつも寒々しい。人工だから寒いのだとしたら、人の本質は冷たいのだろうか？
その中の十二階が目的地だ。灰色の空から、無数の女の脚が降りてきた。網タイツ、白のセクシー下着、生足にパンプスなど、高橋の好みばかりである。それらはビルと同じ大きさで、高橋はその林を突き抜ける隼となった。
黒いスーツの涼子は、自席で手紙を書いていた。ＰＣ主流の仕事の中で、手書きのメッセージは効果的で、美しい彼女の字は、営業ツールとして使い勝手があったからである。そこに王の雄叫びが響き、王を中心に窓が円形に割れた。書類が風に散り、スプリンクラーが雨を降らせた。
王は片手を無造作に振る。涼子は、身体ごとビルの外に投げ出された。

「そもそもさ、アンタ何も分っちゃいない癖に、なにを俺に言う資格があるんだよ？　道も分からない癖にタクシーの運転手に文句つけるのと同じだろ！　味音痴がシェフを呼べってのと同じだ！　俺の仕事の美しさを、何故理解しない！」

夢の中の高橋は饒舌だ。現実と真反対である。いくらでも高橋はものを言える。思うことを夢では妨げられない。それが高橋の明晰夢で、主観である。昼間思ったすべてのこと、「――」で囲まれた全ての言葉を、高橋は彼女にぶつけた。

「ごめんなさい。……私、あまりあなたのことをよく知らなくて」

夢の中の涼子は、しおらしい女だった。これは高橋によって改変された立花か。あるいは本当にきちんと話せば本当はこうなのだろうか。それはどうでもよい。今高橋が欲しいのは、彼女の心ではなく、肉体だ。

「知ってたら対応が変わるとでも言うのかよ！　じゃあ教えてやる！　俺は空の王だ！」

高橋は空中で彼女の体を抱いた。天王洲の街並みがぐらりと動く。そう、この髪の匂い、この体臭。間違いなく立花涼子のそれで、高橋は獣になる。いや、ここは激しくやるより、たっぷり虐めて楽しもう。

「あっ」

彼女は幽かに声を上げた。高橋が彼女の栗色の髪を掻き分け、左耳を撫ぜたからだ。長い髪の女は、普段から耳を外に晒していないので触られると弱い。男の包茎と同じだ。つまり、必要以上に、やさしく触ってやると良い。

「……ぞくぞくする」

右耳も触る。上下に触れるか触れないかで両耳を同時に撫でると、彼女の男並みに巾のある両肩から力が抜ける。

「えっ。何……何これ……」

高橋は空中で回転する。彼女の体も回転する。涼子は既に天と地が分らなくなっている。これが空の王が与える快楽だ。

高橋は両耳を塞ぎ、その中を犯した。それだけで彼女は失神しそうになった。紅い唇の中に高橋は指を突っ込んだ。涼子は体中をびくびくとさせ、舌を絡めてきた。その湿度と温度は、既に彼女の股間と同じである。

「会社でいつもお前はこんなことを考えていたんだろ？」

「そう……です」

唇を吸い、舌を絡めた。垂直落下する。

「あ……やばい……」

「何？」

彼女が全身を波打たせた。

「イクならイクと報告しろ」

「ごめんなさい……」

ブラウスを両手で引き千切った。真珠色のボタンが飛び、黒いレースのブラが露わになった。おっぱい廊下のコレクションにない、新しい形と色と手触りだ。高橋はその乳房を鷲掴みにする。彼女の体に、何度も電気が走った。

「それ！」

高橋は彼女の身体をオフィスビルの空間に投げ出し、世界を改変する。ビルからビルが

生えてきた。下から、横から。様々な角度から伸びたビルは、彼女の体を次々に貫く。街による愛撫。体の芯を何度も貫かれる快感。

「我慢出来ない！　お願い！　欲しい！　欲しいの！」

涼子は叫んだ。高橋の中心は、彼女の中心に狙いを定めた。そこはすでに洪水を地上にまき散らす、雨の女王だ。

「熱い！　熱い！　して！　して！」

「さあ空中セックスだ！」

俺は世界を自由に改変する。俺は世界の中心で、王だ。

だが――。

高橋は突如、気配を感じて振り返った。

「誰だ？」

高橋と涼子のように、空中に浮いている女がこちらを見ていた。高橋が空中に生やしたビルには、天地がさかさまや真横になったオフィスワーカーたちが働いていて、しかしそれは所詮高橋の脳が世界の辻褄を合わせた、補完風景に過ぎない。だがその女は違う。高橋が創造した人間ではない。

「誰だ！」

白いワンピースが風に靡く。

短い黒髪が少女のようだ。長い首のせいか、小顔に見える。その中心のふたつの目に、高橋は恐怖を覚えた。

ターコイズブルーの瞳。

無限に透き通る色で、自分の心の底まで見透かされているようだった。そんな女を造った覚えはない。誰だ。街ですれ違ったいい女か？　ネットで見たバーチャル肉体（モデル）？　誰だ？　何故、青緑の瞳をしている？　何故俺を見て笑う？　覗いているのか？　俺を？

「お前……まさか、『他人』か？」

高橋は考えてしまった。

考えることは大脳新皮質を働かせることだ。理性が働き始め、感覚の世界は崩壊する。踊り場の瞑想は崩れ、レム睡眠が覚醒に転じた。

手足を動かそうにも、水中にいるときのように動かない。その女の瞳の色と同じ、ターコイズブルーの水の中にいるようだった。呼吸が泡になる。ごぼりごぼりという音が、サーという音に戻ってゆく。ヘッドホンから聞こえる、６Ｈｚの揺れるノイズに。

高橋は、朝の光で目を覚ました。

勃起が、諦めれ切れないように天を衝いていた。

2

ターコイズブルーの瞳。

高橋は必死に思い出そうとする。夢は記憶の再構成という説がある。人は木目やネジの細かいディテールまで覚えきれないから、忘れる必要がある。すなわち夢の中の木目は、

どこかで見た木目である。女の顔もだろう。俺はあの女を、どこかで見た。……筈だ。
夢の中の記憶はすぐに曖昧になってゆく。高橋はネットで色んな顔を検索するが、余計に混ざり、どんどん思い出せなくなってゆく。
道すがら、駅、コンビニ、すれ違うポスター。どこにもあの黒髪の美少女はいない。アイドル、モデル、芸能人、これまで夢の中で抱いた女。どこにもあの女はいない。
ターコイズブルーの双つの瞳。それが高橋をじっと見ていた。もう、あの色しか思い出せなくなった。

その青を思いながら、会社のエレベーターに乗り込んだ。扉が閉まる刹那、走りこむ人がいたので扉を開けた。「すみません」と小さな声。目が合い、彼女ははっと瞳を見開いた。
立花涼子だった。普段なら軽く会釈してすぐに目を逸らすような関係だ。だが彼女は、眼鏡の奥から異様なまでに目を見開いてこちらを見ていた。興味のあるものには瞳孔が開くという。無意識にだ。俺はそのように見られている？　昨夜の夢が高橋には思い出され、余計気まずい。俺はあなたをオカズにしようとした、キモイ男です、見ないで下さい。高橋は下を向く。地獄のような時間が十二階まで続いた。
彼女は上着を脱いだ。
「空調が緩いわね」
高橋は首を傾げ、聞いたような聞いていないような曖昧な返事をする。
ちん。ようやく無言地獄から解放された。彼女は先にエレベーターを降りた。だがその背中を見て、高橋は足を止めた。
ブラウスから透けた、黒いブラの柄。黒い薔薇の柄。

――夢で見た柄と、同じではないか？

高橋は女のことなら異常な記憶力を発揮する。どんな女のディテールでも夢の中で再構築する為だ。
考えこみ、いや馬鹿なと思う。
偶然だろう。きっとあれは流行りの柄で、確率の高い一致をしただけだ。
夢の中で引きちぎった黒薔薇と、寸分違わず同じ柄が目の前を歩いてゆく。

午後、立花から呼び出しがあった。昨日のコーディングの件を、再びきちんと説明するよう求められた。どうせ俺はコミュ障のエンジニアだ。こうなったらアンタの知らない言葉でも何でも使って、聞いていようがいまいが最後まで喋ってやる。ヲタク特有の早口でな。高橋はそう覚悟し、説明を始めた。
誰もいない会議室で、二人きりの状況。夢の中なら、冷たい灰色の机に押し倒し、「昨日の続きをやろうぜ」と耳元で囁くだろう。このブラの薔薇は見たぜ、下はどうかな、などと迫るだろう。ホラ外に声が聞こえるぞと口を塞ぎ、何度も犯すだろう。時を同じくして、立花は明るい茶色の髪をかき上げ、昨夜高橋が触った耳を露わにした。昨日の夢の中の符牒では、性器を露出したようなものである。しかも高橋が昨日彼女にしたように、下

から上に、ゆっくりと触っている。無意識か。意識的か。いや、意識的な筈はないだろ。何考えている俺。
「何か？」
突然黙った高橋に、立花は尋ねた。
「いえ、あの……」
「続きをして？」
「あ……はい……」
説明の続きをしながら、彼女は欲情しているのではないかと妄想が生まれてきた。馬鹿な。でも今「続きをして」と言ったよな？　「昨晩の続き」を彼女は欲しているのではないか？　彼女の頬が上気して、少し汗ばんでいるようにも思えた。髪は額に貼りつき、ブラウスに埋もれたふたつの果実が、苦しそうにしている。
彼女は視線に気づき、慌てて時計を見た。
「もうこんな時間。行かなくちゃ。大体分りました。先方には、私から説明しておきます」
突然の態度の変容に、高橋は拍子抜けした。本当に分かったのか？　分る訳ないだろ。じゃあ何故そんなことを言う？
「昨日、変な夢見たのね」
立花の告白に、高橋は度肝を抜かれた。
「でも途中で終わっちゃったのよ。どうして夢はいいところで終わるのかしらね？」
「……はあ」
何を言ってるんだ。「普通の夢」の話だろ。俺は都合が良すぎる。もっと現実に根差せ。だから仕事の査定も低いままなんだ。俺は夢の王だが、現実では王ではないんだ。
「続きは、またここで」
――コーディングの件のことだよな？

確かめたい。
今夜も高橋は明晰夢に入ることにする。向かう先は「例の会議室」。
扉を派手に開け、王は宣言した。
「『続き』をしに来たぞ！」
窓の外を見ていた涼子は、弾かれたように振り返る。瞳は濡れ、歓喜の色をしていた。
「やっぱり来てくれたのね！　早く！　続きを！」
床にぽたりぽたりと染みが出来ていた。股間から流れているのを確認して、高橋は興奮する。高橋は妄想したように、彼女を灰色の机の上に押し倒す。新しい柄の、幾何学模様のブラだ。
「咥えろよ」
高橋は股間を美しい顔に押し付け、奉仕を要求した。雌猫は、喜んで喉の奥まで咥えこみ、丁寧に汚れを舐め取った。
「音を立てろ。フロア全体に聞こえるようにな。ドアは開いたままだぜ」
「え、いや」
「嫌じゃねえだろ。誘ってきたのはそっちだ」
ぞくぞくする。あの立花涼子を、こういう形で組み敷くことになるとは。だがこれは俺

の創り出した、想像上（イマジナリー）の立花涼子の筈だ。しかし高橋は、彼女が本人ではないかと疑いはじめている。彼女はここで待っていた。これは俺が作り出した涼子か？　それとも先に来た彼女本人か？　区別がつかない。だが夢と現実を混同するほど、俺は狂っていない。

「符牒を決める」

「？」

「次会ったとき、これが本当にあったことだと確かめたい」

「分ったから、早く頂戴！」

彼女は自分の股間に高橋の股間を導いている。

「そうだな。欲しいときは、『例の会議室で』と言え」

もし本当に現実でそうだとしたら？　高橋ははち切れそうになった。だが再び、高橋は首筋に視線を感じ、慌てて振り返る。

開いたままの扉に、再び「あの女」が立っていた。

白いワンピース。黒髪のショートカット、ターコイズブルーの瞳。

「なんなんだよ、お前！」

白いワンピースも黒髪も、ここはオフィスビルだというのに風に靡いている。風ではなく、それはまるで水の中で揺らめいているようだった。

「そんな女、どうでもいいじゃない！　早く挿れて！　お願い！」

ここで夢は途切れた。なんということだ。夢のコントロールを、どうして俺は失っているんだ。

『お前は誰だ？』

そうノートに記す。想像の中で、ターコイズの瞳を黒や茶色に置き換えてみる。誰かと誰かを合成しているのだろうか。高橋は夢日記を付けていた。明晰夢に有効だと聞いて、付ける癖としたのだ。しばらくノートを使っていなかったのは、大体覚えていたからだ。しかし今回は違う。何かおかしなことが起きている。

『他人』

そうノートに記す。他人が夢の中にやって来た。俺は立花涼子の夢に侵入した。夢が、溶け合っている？

「……馬鹿な」

それこそ夢を見ている場合じゃない。現実に戻れ。あの女の服、髪、瞳。全てを記録し、高橋はそれが誰かを探す決意をした。

翌日。

出社して、またエレベーターで立花に会わないか期待した。そうだ、符牒を確認できる筈だ。いきなりそんなことを言って、違ったらどうしよう。そもそもコミュ障の自分が、堂々と彼女に話し掛けられる筈がない。

だがフロアに待っていたのは、警察だった。

「？」

デスクの井上が言った。

「部員全員に事情聴取をお願いしたいんですって。といっても、この部の人間関係を把握したいからだそうで」
「……？」
「……聞いてないんですか？　立花部長のこと」
「何を」
「今朝方、マンションから飛び降りたって」
「……は？」

3

目撃者の情報によれば、立花涼子は自宅マンションの十四階から「空中へ飛んだ」そうである。ただ不可解なのは、全裸だったことと、両手を広げ、まるで空に飛び立つように身を投げたことだ。
夜明けの光を受け、栗色の髪がさかさまになる。その美しい裸体が、高橋の脳裡に抱き心地すら伴って再生された。
「それでねえ、事故ではなく事件性を疑っているんですよ」
担当の戸田（とだ）と名乗った刑事が言った。
浅黒い肌で、ぎょろりとした目で高橋の顔を覗き込む。この手の男は苦手で、高橋は目を逸らした。
「ああいかんいかん。癖でね。すいません。つい目の前の人間を疑っちまう。今、会社関係を洗っているのはですね、薬物汚染を疑ってまして」
「薬物……？」
「笑って全裸で飛ぶなんて正気じゃない。覚醒剤か何かの類ではないかと。彼女の家からはそれらしきモノは出なかった。解剖結果も白（シロ）。精神病などの通院歴もなし。ストレスで突発的に、というには狂い過ぎている。何かご存知かと、身近だった皆さんに、一人ひとり聞いて回っているという訳です」
刑事の話は殆ど耳に入らなかった。
彼女の最後の顔は笑っていたのか、それとも苦痛や恐怖の貌だったのか。せめて悦びに満ちた、夢見心地の顔であって欲しい。
「その……一体彼女は……何故……」
高橋は必死で言葉を絞り出した。コミュ障にしては言葉を出したほうだ。
「さあ。我々もさっぱりで、だからお話を、というわけで。ご同僚の話によると、彼女は仕事では真面目だが、週末派手な格好でクラブなどに出入りしていたとか」
「……初耳……です」
彼女が男漁りをするなど、想像の外だった。完璧を絵に描いたような人柄だと、高橋が勝手に思っていたのか？　それは高橋の願望に過ぎず、真の姿は夢の中のように淫乱だったのか？　それともそれは、高橋が勝手に作り上げた願望か？　俺は彼女のことを何も知らない。夢と現実が、混濁したような感覚に陥る。
「ご気分が優れませんか？」
若い方の刑事がハンカチを手渡してくれた。汗をかき、蒼い顔をしていたらしい。

「今、彼女の死を聞いて……」
「そうですか。そいつは悪いことをした」
戸田刑事が、鬼瓦のような顔つきで再び高橋の目を覗き込む。目を見られるのは苦手だ。現実でも、夢の中でも。
「最後にひとつだけ聞きたいことが」
「……なんでしょう」
高橋はここから逃げ出したい気分で一杯だ。なにせこの小さな会議室は、「例の会議室」なのだ。彼女を押し倒した冷たいテーブルに、無粋にも手をつかないでくれ。
「〈空飛ぶサークル〉という名に、心当たりは？」
聞き慣れぬその言葉に、高橋は首を振った。
「薬でもキメて、飛んでる、の意味かと最初は思ったのだが」
「……それは何です？」
「さあ。彼女の手帳に、そのメモがあっただけだ。私らも意味が分からんから、何か知ってるかと」
再び高橋は首を振り、こうして事情聴取は終わった。

「待って」
同僚の藤田が、立花のPCを警察に渡す為、ケーブルを外していたところだった。
「バックアップは？」
「取った」
「隠しファイルは？」
「オールコピーしたよ」
「じゃあ、カーネルのブランチは？」
「？　彼女にそんな権限ないだろ」
「俺が教えた。クラウドより秘密を置きやすいからな。彼女の癖を知らないのか？」
いつもより饒舌だ。口から出まかせだった。
「俺がやっておく」
彼女のデータをコピーする。調べる為だ。彼女が何をしていたのかを。
俺は何をやっているんだろう。だが高橋は確信に似た感触を感じている。〈空飛ぶサークル〉。マンションから空を飛ぶポーズ。――彼女は夢の中で、空を飛んでいたのではないか？　そして彼女も、明晰夢実践者だったとしたら？

今あるファイルを検索するだけでなく、消去済みのファイルも復元してゆく。一回前、二回前、n回前のアプリの復元履歴も追う。前のバージョンは消えたわけではなく、ヘッダを変えただけだ。クラスタ中のヘッダさえ追えれば復元できる。クラウドも洗い、そこ経由で彼女の個人スマホへも侵入した。S（空飛ぶ）とか、T（飛ぶ）とか、F（フライ）とかC（サークル）とか、M（明晰夢）とか、L（Lucid dream＝明晰夢の英訳）とか、略称でもいいからメモがないか探る。ファイル名や、内容にその言葉が出てこないか探る。画像や音声データの解析。拡張子にヒントがあるかもしれない。今は存在しないファイルを復元する。今は存在しない彼女のファイルを。

同時に高橋はスクリプトを組み、〈空飛ぶサークル〉に関する情報をネットから自動収集する。夢の中で空を飛んだり、セックスしている奴らの感想やツイートを探せないか？隠語で書かれているかも知れない。そのワードを特定したい。

デスクの井上は、立花の荷物を段ボールに詰めている。

「ゴミ箱！」

彼女は手書きのメモを、よく美しい字で残していた。既にビルの清掃業者が収集車に出したという。

高橋は走った。収集車の行先を調べる。区の焼却炉を突きとめ、焼却炉に放り込まれる寸前のゴミ袋を「業務上の漏れが」と現金を渡して止め、その場で開いた。

「あった！」

彼女のゴミ箱から回収されたと思われる、手書きのメモ。

「夢。T君と」

二重線で消され、くしゃくしゃに丸められていた。T。高橋のT。

メモの山を漁る。俺は一体何をしているというのだ。何を知りたい。何を確かめたい。

その時高橋のスマホに、走らせていた自動検索がデータを転送してきた。彼女のスマホ内メモ、今日の深夜二時。高橋と涼子が「会って」いた時間。

「例の会議室で」

天地が逆さまになったような感覚に、高橋は耐えた。

〈空飛ぶサークル〉の検索スクリプトは、数多くのノイズを拾って使い物にならなかった。大学のグライダーサークルや、空飛ぶ車などが多数ヒットする。検索除けにこの名前を選んだのだとしたら中々の知能だと思う。深夜まで高橋は〈空飛ぶサークル〉を探した。魚拓の魚拓に痕跡を見つけたが、その先はリンク切れ。そこへの流入と流出を調べるが、その先もリンク切れ。誰かが意図的に「追跡を避ける」ように仕組んでいるのではないかとすら思う。足跡は残さない、何者かがいるのか？　だが見てろ、ネットの空間を泳ぐのは、夢の中で空飛ぶくらい得意だぜ。

三日後、高橋は膨大なジャンクからテキストデータの復元に成功した。

人はなぜ、夢の中で空を飛べるのでしょう？

かつて飛べたからじゃないか。

ぼくはそう考えています。

……

〈空飛ぶサークル〉主宰　轡了

復元された閲覧履歴とＩＰを照合する。

「間違いない」

半年前に彼女はこれを見たと、高橋は確信した。

4

ネットをつぶさに観察している者なら、その時奇妙な噂が広まりつつあることに気づいたかも知れない。

「夢の中に美しい男が現れ、手招きをする」。

同じ夢を見た女性が、同じ時期に集中した。それは満月の夜に限られるという符合が、広まる要因となった。「それは同じ男か？」は、誰もが気になった。曰く、目も眩むイケメン。曰く、彫りの深いギリシャ彫刻のような、イケメンというより美形。曰く、白い肌は女よりきめが細かい。綺麗系よりむしろ可愛い系。心が奪われて動けない。長く波のような彼の髪に触れた、むしろ髪を触られた。それは一種の都市伝説のように、菌糸状のミームとして広がった。芸能人でいうと誰に似ていたか、似た画像はないか。ハリウッド俳優、モデル、有名無名。夢に現れる男を写真に撮ることは出来ない。絵師が想像図を描き始め、ああでもないこうでもないとディテールが足され、引かれ、上書きされた。複数の絵師と複数の証言。「満月の夢の男」は、複数のバージョンの似顔絵があった。

「This Man」という謎の男の画像がある。眉が太く、やや禿げ上がった濃い丸顔の男。二〇〇六年、ニューヨークの精神科医のもとに、「夢の中に見知らぬ男が現れる」と女性患者がやって来た。しばらくすると同様の女性患者がやって来て、何人も同じ症状を持つ者が増えたという。不思議に思った医師が似顔絵を描かせると、共通の男であったことが分る。名前も不明なので「This Man」と名付けられ、「この男を夢に見た人は名乗り出て下さい」と新聞広告で募った所、一か月のうちに二十四名もの目撃証言が寄せられたという。この男が何者だったのか、女性たちがその後どうなったのかは明らかになっていない。

今回の件は、「This Man」なる中年男でなく、長髪の美青年であることが特徴だった。手を握られた、抱き締められた、抱かれたまま空中を飛んだ、と体験談はエスカレートし、夢の中でセックスした、などの証言まで現れた。彼は何故手招きをするのか？　何処へ連れてゆこうとするのか？

そしてついに、プロの女性画家の夢の中に「彼」が現れた。彼女は絵を描き、瞬く間に広まった。「この男」と数々の女が言う。彫りが深く、憂いを秘めながらも少年のようにきらきらする瞳。長く揺らめく美しい髪、整った鼻筋。月光が、天から振り注ぐ祝福のように彼を包む。鳥の羽が舞い、天使がそこにいたかのような背景が描き加えられていた。

だがこの画像は、爆発的流行（バズ）とまではいかなかった。発言者のことごとくが、ネットへの発信を断ったからである。

〈空飛ぶサークル〉なる集まり、組織に関する調査は難航を極めた。主催者なる人物、轡了の名で検索しても、中国語、漢文しかヒットしない（第一奇書金瓶梅、皇極聲音、新平妖傳など、高橋には縁のない世界の言葉だ）。

明晰夢、「空を飛ぶ夢」の方面からも、夢占い方面に引っかかるのみだ。ロバート・モンローやフォーカス25（モンローは幽体離脱の研究の結果、世界には階層があることを発見した。その階層をフォーカスといい、最高位フォーカスでは宇宙意識と一つになるとされている。オリオン座の宇宙意識バシャールと交信（チャネリング）した、と発表したダリル・アンカも同じ証言をしている）などの検索では本の感想止まりで、実践者の情報まで届かない。

唯一拾えた件の文章（テクスト）は、かつて〈空飛ぶサークル〉のあったページそのものではなく、個人のホームページに引用されたものの破片だ。既に終了したサーバのコピーへ侵入し、区切りコードからメモリ構造を復元し、文字化けコードを継ぎ接ぎし、ようやくジャンクが読めるものになった。無論、その文章自体で検索しても出て来ない。これだけ人々が言葉をネットに毎日垂れ流していて、そのひとつも引っかからない。英語やドイツ語、フランス語、中国語など主要言語に翻訳しても結果は同じだった。

――おかしい。

高橋は思う。誰かが〈空飛ぶサークル〉に関する情報を、何かのプログラムで自動的に消しているのではないか？　ここまで「ない」ということはない。しかも「消した」と悟られないように、自然に古びてなくなったかのように偽装しているような感じがする。高橋がサルベージできた情報は、htmlが変な形だった為、偶然検索botから逃れたのではないかと仮説を立てる。

エンジニアとしての腕が鳴る。プロトコル形式を調べ、隠蔽している者を特定してやる。破片はまだ海底に沈んでいる。高橋はそのマリアナに、深く潜るのみだ。

涼子の死から三週間が経った。

彼女の席には見知らぬ男が座り、業務は静かに進んでいる。まるで何かの群れのようだ。彼女がいた穴は別の個体が埋め、全体として生き物のような進行は続く。人の死というのはこういうことなのだろうか。高橋はまだ理解できない。

これまで分って来たことは、都度名前の異なる、似たような「明晰夢の集いへの誘い」があることだった。「アーカーシュ・メイン・ウド（ヒンディー語で「空を飛ぶ」）、「空中三回転半」「エア・ウェイヴ」など、違う名前と姿で現れてはアカウントを削除し、また別の所に現れていた。「轡了」の名前があったのは古い形式の〈空飛ぶサークル〉の時だけだ。サーバもＩＰもバラバラ。身元も一定しない。本拠地や本名のない謎の組織。ツイッターのアカウントを見つけたと思ったら凍結で、掲示板の書き込みを見つけたと思ったら４０４。まるで「ＣＩＣＡＤＡ３３０１」だ（二〇一二年にネット上に突如現れた暗号。未だに謎を解いた者は現れていない）。これは俺への挑戦状か？　高橋は、知り得た連絡先に片っ端から連絡を入れてみた。「立花涼子を知っているか？」と。向こうがその気なら、こちらもサーバやアドレスを変え、身元の分からぬ状態にして突撃する。殆どは既に存在しない連絡先だった。だが一つだけ、デーモンに拒否されない生きたアドレスが存在した。

「連絡を取りたい。明晰夢を知っているか？」

三日後、メッセージが返って来た。

「どこまで知っている？」と。

「毎晩好きな女とセックスしている。立花涼子と夢の中でセックスしそびれた」と返した。

「東十条（ひがしじゅうじょう）の喫茶店『ジャングル』の奥から三番目の席に座れ」と返ってきた。

立花涼子は自殺だったのか？　高橋は、彼女は何らかの理由で「殺された」のではないかと考えていた。

満月まであと三日。そのことに、高橋はまだ気づいていない。

5

開発から取り残された、高度成長期の遺跡のような住宅街。木造とモルタルとトタンの続く一角に、純喫茶「ジャングル」はあった。庇のビニールは破れ、褪せ、木の柱は中身が水に溶けだしたようにすかすかで、その全部を蔦が覆っていた。まるで自然に還ろうとでもしているようだ。手を触れたら崩れてしまうのではないかと高橋はびくびくしながら、古いステンドガラスの扉に手をかけた。

調子の外れたカウベルが鳴る。何十年も前のソファーの匂いと、コーヒーと紙の匂いが混ざる。

最早この店の一部のようになってしまったマスターが、スポーツ新聞から目を上げてじろりと見た。高橋はこうした人と目を合わせるのすら苦手だ。客は誰もなく、窓際の、「奥から三番目の席」に座った。紅い別珍のソファーのスプリングが軋んだ。

マスターの白髪と皺は、廃墟に捨てられた朽ちた人形のようである。ここの空気のように淀んだ動きで、水とメニューを持ってきた。

「雨が降るかと思って、水色の傘を持ってきたのですが」

外の天気は晴れているのに、高橋はおかしなことを言った。

「……」

「あ。……蛇の目だったんですけど、電車に忘れてしまって」

水色の傘など持ってもいない。マスターはカウンターの奥へゆっくりと引き返す。

高橋は慌ててメニューを見て、「今日のブレンド」を注文した。

焼けた金属のコーヒーメーカーに香気が足され、黒い飲み物とオレンジ色の鍵がテーブルに置かれた。

「お代はサービスです。駅北口のコインロッカー」

鍵には番号が振ってある。「水色」「蛇」を入れた会話をせよとメールに指示があった。「21で返す」と、謎の言葉も。

鍵のロッカー番号は21。高橋はオレンジのプラスチックを握りしめ、あまり旨くもない液体を飲み干す。マスターは奥の定位置に戻り、過去の時間を生き始めた。

ロッカーから出てきたのは、紙のメモだった。手書きで指示がある。筆跡を隠すような、定規で書いた文字だ。「彼ら」はこうまでして、接触を拒否しつつ誘っている。

監視カメラを確認する。カメラの死角を、21番が選んでいるかのようだ。「有楽町のガード下、工事中のフェンス、鉄の扉」と指示がある。ここで引き返すべきか、と高橋は迷った。

だが翌日、高橋は有楽町のガード下にいた。これを逃したら〈空飛ぶサークル〉のことは永遠に分らないかも知れないと思ったのだ。ガード下は工事中で、通行人の振りをしていれば問題ない。尾行はいるか？　ここにいる呑んだくれが、自分を監視する役目なのではないか？

ガード下店舗街は、電車が鉄の上を走る音が騒々しい。闇市のような坑道を潜ってゆくと、「パラダイスプロムナード」の看板の先に工事中のフェンスを見つけた。煉瓦の柱に鉄扉。上階のダストシュート回収用とみられる。見上げると青いビロードカーテンが閉まっ

た中二階があり、坂上ダンスホールと埃のたまった表記があった。
鉄扉はぎぎぎと軋みながら開き、再び定規文字があった。文字に加え、地図もだ。「金曜、二十一時」とある。
この位置関係は見たことがある。六本木交差点がそうではないか？　高橋は思わずスマホで確認しようとしたが、電波を発すれば逆探知されると思い、留まった。危うくトラップにひっかかる所だ。こちらのＩＤを晒す訳にはいかない。物理的尾行の可能性も考え、酔っ払いの多い新橋方面の人混みに飛び込んだ。

六本木交差点から二筋目を曲がった雑居ビル。三階にはマッサージ店、五階より上は消費者金融と、最近急激に増えた薬屋のチェーン店。嫌な音を立てながらゆっくりしか動かないエレベータの扉が、四階で開いた。
黒の世界が広がっていた。
床も廊下も天井も全て黒に塗られていて、高橋は一瞬距離感を見失う。音すらも吸収されるのではと思った。奥に黒服が立っていなかったら、どうやって足を踏み出せばいいかも分らなかっただろう。
「衛本（えもと）さんの指示で来たのですが」
メッセージの送り主の名を告げた。
「西尾（ニシオ）です」
勿論偽名だ。
「〈空飛ぶサークル〉は、ここで？」
三つの言葉が鍵となり、黒服が門を開いた。
中も黒が広がっている。天井、壁、床、調度品も全て黒。黒い革張りのソファーが並べられているのは分るから、どこかに間接照明でもあるのだろう。先客が四名。秘密会員クラブにでも自分は来たのだろうかと錯覚する。後ろで静かに扉が閉じられると、突然ここに来てはいけない気がした。
だがソファーに座る先客の四名が、高橋の目を釘付けにした。女には高橋の目はコンマ数秒速い。その全員が、とびきりの美女であったのだ。高橋はこれまで、数々の美女を抱いてきた（夢の中で）。四名が四名ともそれに劣らぬ美人であることに、高橋は前のめりになりながら戸惑う。モデル？　芸能人？　こういう人たちは普段どこにいるんだろう？　細い指は先天的に美人の証拠だそうだ。身につけた服も光り物も一流品に見える。細い煙草の匂いと、それぞれに異なる香水の匂いが混じり合う。夢の中ではとびきりの御馳走だが、今は暗闇の中で盗み見るのみだ。こんな所に、俺のような下層民が混ざって良いのか？
コミュニケーション上手なら、「やあ、君たちも空飛ぶ夢を見にきたのかい？」と笑顔で話しかけ、五分後にはライン交換でもしてるのだろうか。夢の中なら出来る。だがここはリアルだ。高橋は出来るだけ小さくなり、黒い床を見つめることしか出来ない。上も下も横も黒い空間で、既にここは夢の中かも知れないと錯覚しそうだった。
高橋は胸ポケットから煙草を出し、火をつけてすぐ消した。煙は「吸われて」いない。ここは現実だ。高橋の勝手で、この黒いフロアや、女たちをコントロール出来るわけではない。華やかに彼女たちは笑っている。一方このゴミ虫みたいに小さくなる男。居たたまれなさに耐え切れず、高橋は席を立った。その瞬間、正面に眩しいスポットライトが点き、

光の中に男が現れた。
鍛え上げられた筋肉。身長は一八〇、いや一九〇はあろうか。黒いタンクトップからはみ出した浅黒い筋肉は、強いスポットライトが彫刻したかのようだ。
「みなさん」
ぶ厚い手と両腕を開き、男は白い歯で笑った。
「〈空飛ぶサークル〉へようこそ。主宰轡了の代理人、衛本笑と申します」
スキンヘッドが強い光に眩しい。格闘家かボディビルダーか、胸板から胴体ごと分厚かった。「轡了」の名に、四人の美女は反応したように見えた。衛本は丸太のような腕で、立ったままの高橋を座るように促す。
「西尾さんですね？　お待ちしておりました。御紹介しましょう。この中で最も、明晰夢の才能のある方です」
四人の美女たちの八つの目が、高橋にさっと集まった。夢の中ならば勃起が始まるタイミングでも、現実では逃げたくなる衝動を増すだけだ。
「明晰夢は繋がっています。それを知りたくて来たんでしょう？」
「！」
高橋が最も知りたかったこと。それを衛本は初手で答えた。高橋はソファに腰を埋める。話を聞かざるを得ない。
衛本は表情を崩さず、白い歯で頷いた。
「〈空飛ぶサークル〉を作った轡了は、十年前そのことに気づきました。人の夢は、明晰夢を介して繋がりあうことが出来ると。夢とは何でしょう？　無意識の世界？　記憶の再構成の幻覚？　明晰夢を実践するこの五名の方々は、どのようにお考えですか？」
この四人も明晰夢を？　高橋は緊張で喉が渇く。
「十年にわたって、轡は明晰夢の探求を続けました。夢に果てはあるのか。どこまで他人の夢と繋がれるのか。そして修行の結果、遂に人の夢の中に現れることが出来るようになったのです。明晰夢は、繋げることが出来ます。とくに現実で一度会った人とは波長を合わせやすい。だから私たちは今夜集まった。澤田さん、白石さん、四方田さん、塚原さん。あなた方は轡に夢の中で招待されましたね？　今夜、満月の夜に会いましょうと」
四人の美女の表情は、恍惚とし始めた。月の中に現れる男、轡了。彼女たちは彼を思い出しているのだ。
「夢を見る時、人は蛹になる――これは轡の言葉です。虫は幼虫から成虫になるとき、一端蛹になりますよね？　蛹の中がどうなっているか御存知ですか？　なんと皮一枚を隔てて、中はどろどろの液体なんですよ。幼虫が蛹になるとき、一度液体に戻るんです。成虫はその液体の中から誕生する。我々の睡眠はそのようなものだと轡は言います。眠る時、自我は脳の中で一度ドロドロの液体に戻るのだと。勿論本当に液体になるわけじゃない。しかし自我は融解し、無意識の靄に還元されるわけです。翌朝目覚めたら、蝶。その繰り返しが睡眠と覚醒である、そう轡は言います。夢の中では液体だから、我々は混ざり合うことが出来ると」
美女の顔は紅潮している。思い出しただけで興奮しているのか。轡とは何者だ？　彼女らの夢に「侵入」し、メッセージでも送ったのだろうか？　その者を現実でも呼び出せるほどに？　いや。自分にも、そのような女がいた。ターコイズブルーの瞳の女。あの顔を

思い出そうとする高橋の思考を、衛本の大きな声が中断した。
「今夜、轡は現れる」
衛本は両手を広げ、芝居がかって天を仰いだ。
「人はそもそも孤独に夢を見るだけでした。しかし今やそうではないのです。選ばれた者が共有できる体験となったのです。轡こそ我々の救世主、世界を救うメシア、夢の中に現れるキリスト！　いや、それは大仰だ、新興宗教になっちゃう。そうじゃない。もっとカジュアルだ。そう、我々はバイクのツーリング仲間のような感じですかね。なにせ『サークル』です。夢の中で集まって、一緒に飛びましょう」
衛本が右手をパチンと鳴らすと、彼の背後の黒い壁が音もなく開いた。五台の日焼けサロンのマシンのような、棺桶のようなものが現れた。黒く塗られ、黒い液体が満たしてあり、ブラックライトで照らされていた。
「体に完全に負担をかけない睡眠ポッドです。人体と同じ比重の液体（リキッド）で満たされ、中では無重力状態で眠れます。もちろん人体と同じ温度で、いい香り（アロマ）がしますよ？　裸で入っても構いませんが、恥ずかしい方は水着をお貸しします。終わったら液体（リキッド）を流す為のシャワー室もございます」
さらに衛本が右手を鳴らすと、隣の壁からハンガーラックと棚が出現する。
「お召し物はこちらへ。トリップしやすいよう、各種ドラッグも取り揃えてございます。感度が上がるのはピンク。覚醒レベルが上がるのは紫。ハイは黒を舐めて下さい」
美女たちがためらいなく錠剤に手を出すのを見て、高橋は場違いを感じた。ここは薬物乱交パーティーか？　とんでもない所へ来てしまったと思う。ゆっくりと、低く流れてきたクラブミュージックを聞き、高橋は帰ろうと思った。だがその音楽の中に含まれた規則的なノイズが彼の足を止める。左右から微妙に異なる周波数のノイズ。それらがうなりを生じ、空間が揺れているように錯覚する。
「ヘミシンク音」
「ご名答。さすが経験者は違いますな」
衛本は笑顔の上に笑顔を重ねた。
「６Ｈｚより……少し高いな」
「お分かりで？　流石です。我がサークルでは、夢の中で覚醒度が上がる７・２Ｈｚを使います」
高橋はポッドに手をかけた。「轡に会おう」と決めた。どんな男なのか、何を企んでいるのか知りたくなった。何かあれば飛び起きて、来た扉を開けて走って逃げればいい。
「待ち合わせ場所を決めましょう。夢の中での待ち合わせ場所を」
液晶遮光型の窓が透明になり、外の景色を見せた。壁四方ではなかったのか。浮かび上がったのは、黒いビル群と満月。その中央に、オレンジにライトアップされた赤白の尖塔。
「東京タワーなら、誰もがイメージしやすいですよね？」
「待ち合わせって？」
美女の一人が聞いた。首を傾げたせいか、甘い髪の匂いがこちらまで来た。ヘミシンクのクラブミュージックのせいか、既に全員の心が繋がっているかのように感じる。
「明晰夢の中に入れたら、東京タワーまで来て下さい。どなたの夢の中にも大抵東京タワーはあると思いますので。イメージすればその場所に行けます。集まることに成功したら、

皆で空を飛びましょう。セッションの後半に、主宰の轡が参ります。彼は、もっと自由に飛べる方法をレクチャーしてくれますので」

轡に何のメリットがあるのか、この男衛本に何のメリットがあるのかを考える。この美女たちとすることだろうか？　明晰夢の中でメロメロにして、なおかつ現実でもやろうということか？　たしかに想像の女よりはリアルな女の方が――いや、だとしたら俺がその酒池肉林の中に呼ばれた理由は？　乱交パーティーに呼ぶ理由は？

「たぶん西尾（ニシオ）さんが一番飛びますよ。ねえ？」

再び美女が憧れのまなざしを向けてくる。それは夢の中にしてくれ。高橋はポッドに逃げ込む形となった。

6

ポッドの蓋を開け、暖かくぬるぬるした液体の中から、高橋は起き上がる。煙草に火をつけた。周りを見渡す。眠る前に見た光景と同じだ。煙は煙草に吸い込まれてゆき、安心を連れてきた。

「よし、ここは夢だ」

勝手に服を着ていて、液体のぬるぬるもなかった。夢というのは、まことに都合のいいものだ。存在しないものはないことに出来る。他の四つのポッドを覗くともぬけの殻で、自分だけ遅れたのかも知れない。高橋は壁に手をかざした。黒い壁は吹き飛び、東京タワーが見えた。先ほど見た夜のライトアップとは異なり、青空に伸びる姿であった。そこへ落ちるような感覚をつくると、体が勝手にすっ飛んでゆく。

「ヤアヤアヤア。最後に現れたのが、大本命の西尾（ニシオ）さんだ」

東京タワーの足元には、既に衛本と四人の美女が待っていた。皆普通に服を着ていて、これから淫乱大乱交が始まるようには見えない。

「ひとつ聞きたいことが」

「なんでしょう」

「ここは誰の夢だ？　なぜ今昼間なんだ？　俺たちがさっき見た東京タワーではないのか？……いや、ふたつの質問をしてしまった」

高橋は現実と違い、夢の中では自信溢れる饒舌家である。衛本は禿げ頭をつるんと撫でて笑う。

「いや、構いません。とてもいい質問なので、順にお答えします。まず二つ目から。『夜の夢』を見る人は滅多にいません。何故でしょうね。我々の記憶の構造と関係あるのかも知れません。我々にとって『時』とはデフォルトで昼間のことで、夜や黄昏時は、特別なこと（タグ付け）かも知れないですね。映画やドラマの脚本では、『夜』や『夕』『朝』と特別に指定のないものは、全部『昼』だそうですよ」

「無意識に世界の認識をすると昼間だと」

「おそらく。『東京タワーのイメージ』だけだと夜の方もいるかも知れませんがね。これと関係して第一の質問。『ここは誰の夢か？』――これは我々も分っていません。ここは皆の集合的無意識か、誰か招待者（ホスト）の夢の中か、あるいは、それぞれが個別の夢の中にいて、

重なり合う共通部分だけ見えているのか。『私が見ているようにあなたが見えているとは限らない』かも知れません」
「クオリア」
「お詳しい」
四人の美女はこの問答の光景を、口をぽかんと開けて見ていた。右から三番目が高橋の好みだ。染めた金髪が勝気に見えた。澤田さん、といったか。
「では、そろそろ飛ぶ話に戻りましょう。自在に飛べる方は？」
高橋しか手を挙げず、またも高橋は美女の羨望を集めた。現実（むこう）では苦手だが、夢（こちら）ではもっとやってくれとぞくぞくする。衛本は説明（チュートリアル）を続けた。
「夢の中で飛ぶとき、多くの人々は高さ制限があると聞きます。大体が『電柱の高さより上は飛べない』んですよ。近所の街を幽体離脱して飛んだ、なんて話を聞きますが、それは精々二、三階の高さのことが多いのです。詳しく聞くと、おおむね電柱の高さ。これが多くの人の高さ限界です。私は、これは人が猿だったときの、登っていた樹の高さの記憶ではないか、と考えています」
そう言いながら衛本はゆっくりと上昇し、電柱の高さで止まった。重力の制約など何もない。まるで世界の一部であるかのように空に上がった。
「この高さくらいです。ここまでは皆さん来れますか？」
美女たちも念じる。スカートが靡き、長い髪も無重力のようになる。下着は見えない。それも夢の中の辻褄合わせかも知れないと高橋は思う。
かつて猿だった時に登っていた樹の高さ——そこまで美女たちはゆっくりと浮き上がった。上から衛本が見ている。高橋は鼻息を漏らし、瞬間移動のように急上昇、急停止する。風が起こり、同じ高さの樹々がざわめいた。
「拍手！」
衛本が言い、美女たちが従った。悪い気持はしない。そういえば人生でこんなに拍手されたことはない。優越感に浸り、高橋は心が高揚してきた。
「さあ！　ここからが壁ですよ！　ここまでは『猿だった記憶』。ここから上に飛べるのは、『鳥だった記憶』が必要なんです！」
「鳥？」
金髪の澤田が尋ねる。
「これは轡の受け売りですが、恐竜が進化したら鳥になったというじゃないですか。人はそれ以前に恐竜と種としては分れたわけですが、その共通の祖先が鳥のように飛んでいたのではないか、と轡は考えているんです。夢の中で飛ぶことは、それを思い出しているときなんだと」
「成程。そうでもない限り、『夢は記憶の整理』だという理屈では説明がつかない。人は飛んだ事がないのに、飛ぶ夢を見ることが出来る」
「御名答です、西尾（ニシオ）さん！」
高橋はその場から滑空し、くるくると体を捩じり、地面スレスレに背中をタッチして、再び皆の高さに戻ってきた。
「素晴らしい！　鳥人だ！　皆さん、西尾（ニシオ）さんのように飛びましょう！　ほら、怖くない！　実は東京タワーに呼んだのは理由があるんですよ！　この赤い鉄骨の梁は、下半分を十等

分しているんです。第一展望台までは百五十メートルなので、一層十五メートル。いくつの赤い鉄骨を越えたか、覚えておけばいいんですよ。やってみましょう！」
高橋は頭の上に落下する感覚をつくる。ぎゅんと飛んでしまっては面白くない。じらそう。そう思い、ごくごくゆっくりと上昇することにした。
「ほほう！　何と素晴らしい！」
またも衛本は絶賛する。
「安定している！　ふつう一気に飛んでしまうんです。一気に飛ぶ人は墜落も早い。しかし西尾（ニシオ）さんはゆっくりと飛べる！　これは相当飛んできたでしょう！」
「一万時間」
「パイロットですか！　夢の中で冗談まで言える余裕とは！」
美女たちが高橋の冗談でころころと笑っている。現実では決してあり得ない光景だ。
「あっ！」
澤田さんが姿勢を崩した。思わず高橋は彼女の手を取った。
「ありがとう」
彼女は微笑んだ。まつ毛が長く、そよ風が吹くようだ。目を合わせて有難うと言われたことなんて高橋にはない。それだけで好きになってしまう。彼女の手から温もりが伝わってくる。いつもの高橋なら裸に引ん剥く所だが、彼女は夢の中とはいえ「他人」だ。まだ紳士であろうと高橋は思った。
「あああ！」
横風が吹いたからだろうか、バランスを崩した美女が一人、落ちて行った。四方田さんと言ったか。手を掴み損ねた。樹の中に姿を見失う。きっと現実の世界で起きてしまっただろう。
「上を見るんだ。下を見たら怖くなる」
高橋はゆっくりと飛び、美女たちのフォローに回った。彼女たちはまだ危なっかしい、生まれたばかりの仔鹿のようだ。体の重心が安定しない。しかし澤田さんは段々安定しだして、笑う余裕が生まれた。高橋も笑った。残り二人の美女も、次第に体の中心がどこか分かってきたようだ。
第一展望台だ。窓から展望台の中が見え、設置された双眼鏡や街の模型が見えた。床がガラス張りになっていて、そのガラスの上に乗る肝試しの場所も見えた。高橋は現実ではそこに怖くて一歩も踏み出せなかったが、今ならいくらでも出来る。なにせここは俺の領域、俺の庭、明晰夢なのだ。
「おめでとうございます！」
衛本は白い歯をさらに白く剥き、笑った。
「あなたたちは見事『試練』をクリアしました。我らが〈空飛ぶサークル〉主宰、轡が参ります！」
ざわりと風が鳴る。高い場所特有の、渦巻く風の音が耳元に聞こえた。
美女たちは目の色が変わり、黒い部屋の時のような濡れた瞳になった。そうか、みな轡に会いに来たのか。澤田さんの金髪も、轡の為に染めたのかと思った。
突如空が掻き曇り、螺子巻く黒雲となった。夢の中の天気は殆どが晴れている。昼間と同じく、それが人の記憶のデフォルトなのだろう、雨や嵐の夢は滅多にない。夢の中の天

候を動かすことは高橋ですら難しい。ビルや街を改変できても、そこまでの想念力（イメージ）はない。これが轡なる者の仕業だとしたら、相当の想像力だ。湿った感じ、濡れた感じ、寒気が痛く刺さる感じ、冷たさと引き換えに体の芯から熱が出ていく感じ、鳥肌の立つ感じ。おそらくそれは視覚や聴覚ではなく、「触覚で感じる感覚」なのだろう。空を飛ぶ感覚と違い、雨や風の感覚を夢の中で感じることは稀だ。高橋は、皮膚が粟立つ感覚を味わった。

雷が鳴り、辺りは真っ暗になった。

光が差した。

雲が割れ、幾条もの光が降りて来た。「天使の梯子（エンジェルス・ラダー）」と名付けられた現象だ。雲間から太陽の光が筋に差す時、それを天使が天にかけた梯子に喩えたものだ。

その金の梯子から、長髪の男がゆっくりと降りてきた。

讃美歌が流れ、和音の調べが神の調和を表現する。実際に音は聞こえないが、これもクオリアだろうか。十二枚の白く大きな羽が波打つ。天使の姿にも見えた。

「ようこそ〈空飛ぶサークル〉へ。僕が轡了！」

ギリシャ風美青年。一言でいえばそのような顔立ちであった。鼻梁が通り、エキゾチックな彫りの深い顔立ち。日本人離れした骨格で、ギリシャ人とのハーフと言われても納得するかもしれない。それでいて少年のような黒い瞳がはにかむ。波打つ長髪は風を孕み、エーゲ海の暖かい風に見えた。開いた腕の中に、美女たちが全裸で飛び込んでいきそうだ。

「みんなで空を飛ぶ集まりへようこそ。僕の趣味は飛ぶこと。たとえばこれくらいにね！」

空気に人型の真空を残して、轡了は弾丸のように天へ飛んだ。

きらりと上空に光った点は、気象衛星ひまわりだ。轡了は一瞬のうちに衛星軌道まで飛び、丸い窓にタッチして帰ってきた。

「ひまわりに手形をつけられるのは、僕くらいかもね！」

轡了は少年のように笑い、その仕草に女たちは胸をきゅんと締め付けられる。股間もきゅんとしたんだろ、と下卑た想像をした高橋に、轡了は話しかけた。

「見た所、君もできそうじゃん！」

「やったことはないが……」

「じゃあ見せてよ！　まず、どれだけ飛べるのか！」

「……ふん」

俺を試すつもりか。ならば見せてやる。美女たちの気を引こうとして、気が大きくなっていたのかも知れない。

高橋は上へ落ちた。体を反転し、前にも落下した。体をぐるりと一周させ、複雑な機動を見せる。まるで戦闘機のアクロバットだ。いや、本物の戦闘機では、こんな重力や慣性や空気抵抗を無視した機動（マニューバー）は取れないだろう。手を上げると、ビルからビルが生えてきた。それらを組み合わせ、コンクリートの立体コースを造り出した。それに沿って、右に旋回、左に旋回、螺旋にスピンして雲を突き抜け急停止。観客に向けて高橋はお辞儀をしてみせた。

「凄い凄い凄い！」

いつの間にか轡了が側に飛んでいて、子供のように拍手している。

「一緒に飛ぼうよ！　『セッション』だ！」

今来たコースを二人で逆走した。二人の体は入れ替わり、宙を切る。不思議な感覚だ。

これまで高橋は単独(ソロ)で飛んできた。これはタンデム飛行というのだろうか、高橋の飛ぶ方向を理解し、轡が合わせてくれているように思う。轡の方向に高橋が合わせると、轡は屈託なく笑った。

「凄いよ君！　衛本、大変な才能を発掘したね！」

「有難う御座います」

まるで少年と執事のような光景だった。重戦車のような衛本が、華奢な少年にかしづいていた。

そうだ。彼に質問をしなければ。高橋はその為にここまで来たのだ。

「ここは、誰の夢だ？　衛本さんは集合的無意識と言ったが」

「うん。本当のことは僕も分らない。ただ僕らの無意識が『この夢』に反映しているんだ。そして、『権利のある者』がコントロールできる」

「権利？　何の権利？」

「力のある者」

轡は最初見せた六対の白い翼を、再び広げて見せた。

「これだって僕の『力』で出現させたものじゃない？　君は街を作り変えた。凄いよ。権利を持ってる」

「権利」

「ぼくはずっとぼくに匹敵する人を探してきた。きみとなら、ともだちになれそうだ」

突如轡は、高橋の目の前に立った。高橋のパーソナル距離の内に、いとも簡単に入ってきた。

「君の『背中』には何がある？」

その言葉に、高橋は思わず振り返ってしまった。

そこは東京タワーと美女たちではなく、闇が広がっていた。夢の中の光景が突然変わることはよくある。悪夢が代表的だろう。闇の中に目があった。目は増え、無数になった。無数の目が闇で開いた。高橋の全身から汗が噴き出し、心拍は乱れた。

「なんだよ……俺を見るんじゃねえよ……」

目の虹彩は広がり、血管は浮き出る。その全ての半球に、醜い自分が映りこんでいる。

「なんだよこれ……オイ！」

言葉を出すほどに目はどんどん増えてゆく。右にも左にも上にも下にも。高橋は叫んだ。上と下が分からない。手足が動かない。縮む！　体が縮む！

「なるほど」

轡は微笑んだ。

「君の背中にあるのは、『他人の目』」

ここで高橋の夢は途切れた。

低いクラブミュージックが、左右のウーハーから漏れ聞こえている。ここは黒い部屋の黒いポッドの、黒い液体の中だった。

見られた。

何を？

心の一番弱い所。弱点。トラウマ。

高橋の震えは止まらなかった。熱いシャワーを体に叩きつけても、芯から冷えたままだった。さっき液体の中で、たぶん小便を漏らした。

黒い扉を開け、嫌な音のエレベーターに乗って高橋は逃げた。

7

うまく眠れなかった。

うまく眠るとは、どういうことだろう？　自分がどうやって入眠するのか、その仕組みが分らなくなった。焦れば焦るほど、眠り方が分らない。眠らなくても、横になって目を瞑るだけで回復するというからやってみた。だが目の前に轡の笑顔、衛本の白い歯、美女たちの目が現れる。あの「セッション」は何だったのだろう。〈空飛ぶサークル〉は、あれから飛んだのか？　セックスしたのか？　立花涼子も、あの美女と同じように飛んだのだろうか？

衛本との連絡アカウントを削除し、向こうから連絡できないようにした。逆探知できないようにネズミ返し（ウォール）も仕掛けた。リアルでも帰りの道をくらまし、まっすぐ帰らないようにした。立花涼子のように「殺される」ということはあるまい。――殺される？　高橋は、殺されかかったのだろうか？　涼子は「背中を見られ」、そして殺されたのか？

東十条の喫茶店は更地になっていた。

あの赤い別珍の椅子に座ったのはほんの数日前なのに、夢の中の出来事にしか思えなかった。あの古びたマスターは、喫茶店に付属していた地縛霊ではないか。いや、売れない役者を〈空飛ぶサークル〉が雇い、そのように見せていたのかも知れない。

有楽町のガード下の工事は進み、高度成長期の残滓のような鉄扉は、煉瓦の柱ごと消えていた。

六本木雑居ビルの四階は、風俗店に模様替えされていた。黒い壁と床と天井はピンクに塗り替えられ、安手の桃源郷であった。黒服のドアマンは茶髪にピアスの兄ちゃんに変っていて、この男も役者で、自分を欺いているのではないかと思う。

何もかもが曖昧だ。現実と記憶と夢であったことが、境目を失ってゆく。夢の記憶はどんどん曖昧になり、現実と溶け合うような正体のなさだ。

互いに互いと接触することは、物理世界で出来なくなった。だが夢の中ではどうか？

不眠症のまま出社する。立花部の机には、相変わらず見知らぬ男が座って電話を取っている。彼女が存在したことすら、皆忘れたのではないかと思った。最初から存在しなかったのではないかとすら思う。「立花涼子を知っていますか？」と聞いたら、「誰ですかそれは？」と笑顔で応えられるかも知れない。ヘミシンク音を聞き、あるいは風呂に入り、アルコールを浴び、エロ動画で抜いても、眠り方が分からない。高橋は例の会議室で自慰を試みた。「あの女」なら、何か知っているだろうか。ターコイズブルーの瞳。彼女も俺の夢に入ってきた「他人」。

また夜が終わり、勝手に太陽が昇って来た。朦朧とした意識でスマホを見た高橋は、文

字に意識を殴られた。

『東京タワー爆破テロ』

自分は既に眠っていて、夢の中にいるのかとも思った。煙草に火をつけ、煙が垂直に昇っていくのを確認する。残念ながら、ここは、いまは、現実だ。

ニュースを点ける。キャスターが緊張した早口で喋っていた。

朝焼けの中に、スローモーションのように、東京タワーがくの字に折れながら倒れてゆく。低い光。鉄骨が太陽をよぎる度に、太陽が点滅するように見える。轟音。誰かの悲鳴。犬が鳴いている。

ＰＣを開く。報道ヘリの空撮映像、誰かが撮った動画。炎が見えた。ガス管か、電線が切れて引火したか。消防車。野次馬。鯨が一頭死ぬと海底に生態系がひとつ出来る、という話を思い出した。赤と白の縞々が、倒れた生き物の横腹のように歪んでいる。あの赤い層は展望台までを十等分していて、百五十メートルだから、ひとつ十五メートル……。白と黒の煙の中を、複数のヘリの回転翼が切り裂く。煙を吸い込み、吐き出す。揚力が目に見えるようだ。

「監視カメラの映像が、センターに記録されていました。爆発物がこの女によって持ち込まれたと思われます」

ハーフコートの女がトランクの上に座り、次の瞬間には白い光の中にいた。

金髪。拡大された彼女の顔を見て、高橋は声を上げずにはいられなかった。

「澤田さん」

四人の美女たち。東京タワーの空でバランスを崩し手を取った、高橋好みの美女。本名など分からない。どうせ偽名だろう。なぜ彼女が？　何故このような行動に？

どのニュースを見ても、角度が違う東京タワーの巨骸を見るだけだった。監視カメラの映像は同じで、高橋はその度同じ「澤田さん」の顔を見る。

これから死ぬというのに、彼女の顔は笑っているように見えた。ジハドと笑い、テロリスト達は自爆するという。彼女の神は轡か。そうだ、立花涼子は、笑って飛び降りた。

高橋は眠らなくてはならない。

ヘッドホンを被り、ヘミシンク音をかけ、布団を太腿で挟む。寝返りを何度も打ち、考えを捨て、感覚の世界に入らなくてはならない。

あの女は誰だ。ターコイズの瞳。あの女が全てを知っているのではないか？　あの女は誰だ。何故俺の夢の中に入った。お前は誰だ。お前は誰だ。ヘミシンクの６Ｈｚが脳を掻き回し、金属音のような爆音に変っていく。ああ。帰ってきた。もうすぐ夢――

暗い階段を高橋は走っていた。

コンクリートでもあり、木でもあるようだった。急すぎたり、梯子に変わったりした。幼い頃に住んでいた社宅の階段に変わった。えんじ色の滑り止めで、大理石模様の白で。階段は分岐し、さっき走った階段が天井に見えている気がする。重力はどうなってんだ。いや、夢に重力の法則なんてある筈がない。

階段の上方から、水が滝のように溢れてきた。洪水が起こった時地下鉄にいたら、このような恐怖を感じるかも知れない。現実の津波はどす黒く、色々なものが混じることを先の震災で学んだが、夢の中のそれは青く美しい真水だった。青、水色、いや、青緑――ターコイズブルー。

見上げた先に、ずっと探していたあの女が立っている。彼女が瞬きをする度に、水の色と同じ色の鮮やかな瞳が、きらきらと光を放った。

「おい！」

高橋は手をかざし、水を割った。階段を、街を改変するように二つに割り、水ごと真っ二つにした。二人は空いた空間に呑み込まれる。

二人は上昇する工場用エレベーターに乗っていた。手すりはなく、赤い鉄が剥きだしで、黄色と黒の斜め線が低い音と共に振動している。銀の鉄骨をよぎり、内臓のように張り巡らされた銀のパイプを抜け、そのエレベーターは、横へスライドしたり斜めに動いたりした。

「おい！」

高橋は叫び、彼女の両肩を掴んだ。

「お前は誰だ！　俺の夢の中に侵入した『他人』だな！」

彼女は何も言わず、ゆるやかな風に黒い短髪を靡かせている。瞳と同じ色の大量の水が、二人を包み始めた。水の中で手足を動かすようになると、目が覚めてしまう。高橋は両肩を激しく掴む両手を、真横に開いた。

水が開く。彼女が両手を閉じると水の壁が閉じ、二人を覆う。高橋が開く。

「お前は誰だ！　お前は俺がつくった像（イメージ）じゃない！　俺の思い通りにならない、他人だろ！」

彼女は微笑んだ。

「だいぶ、明晰夢のマスターのようね？」

「聞きたいことが山程ある！」

「私は、監視していたの」

「……何を？」

「明晰夢の能力者が現れるのを」

「はあ？」

「そして、警告するつもりだった。轡了には関わらないようにと」

「なんだと？」

「でも手遅れだった。私が思うより、あなたには行動力があった」

「もっと早く言えよ！　あいつに……あいつに……」

背中がぞくりとし、あの恐怖が蘇り、高橋は反射的に後ろを振り返った。そこには何もなく、彼女の出した水が揺蕩っているだけだ。

「彼に、『背中を見られた』のね？」

突如高橋は、体が動かなくなる。飛び方を忘れた鳥にだ。水に手が囚われる。足が囚われる。くそう。くそう。ここは俺の世界だ。俺の世界なんだぞ。

「私たちは、あなたよりも明晰夢のことをよく知っている」

夢とは何か。人が生まれて死ぬまでの間、現実とは別に存在し、ずっと付き合わなけれ

ばならないもうひとつの世界の、謎はひとつも解けていない。何故私たちは夢を見るのか。
夢とは一体何か。

「起きたらメモして。高円寺りんどう。そこに私たちはいる」
「お前は……リアルにいるのか？　いるんだな？」
「私の名は二階堂千波（にかいどうちなみ）。ターコイズブルーの女を探して」

第二章　夢の中で二度死ね

1

天高く日が昇るまで、高橋は眠りこけた。

シャワーを浴びる。これまであったことを整理する。

東京タワー崩落の続報を見て、あれは夢ではなかったのだと認識を新たにする。火事はすでに消し止められ、野次馬は増えていた。東京タワーが失われた世界線は想像しにくい。寝ている間に、自分一人が違う世界にでも来てしまったかのように思えた。寝てる間に、大学の卒業式は終わっていた。寝てる間に、紅白歌合戦が終わって年が明けていた。寝てる間に、大事な瞬間に立ち会えていないのではないかと、高橋はいつも思う。

だが夢日記の走り書きが、現実であることを主張する。

――高円寺りんどう。二階堂千波。

会社に連絡を入れ有給を取った。駅は厳戒態勢で、身体検査と荷物検査の長い列が並ぶ。「東京タワー崩落事件につきまして　荷物制限と身体検査のお願い」と手書きの掲示板が出ている。東京タワーの「崩落」？　テロだろ。むしろ「爆破事件」と言えよ。あれだけの大事件が起きても、何故日常は日常のように進行したがる？　東京が爆心地になり、更地になった朝も、皆電車に乗って会社に行こうとするのではないか？　それに日常性バイアスと名がついていることを高橋は知っている。この日常が変わってしまうことこそを、人は恐れる。だから変わらないことをして安心したがるのだと。つまりこの駅に溢れる人々

は、恐れている。

高円寺は、新宿からつまはじきにされた者の住む町――高橋はそう理解している。売れないミュージシャンたちが楽器を売りに来て、売れないミュージシャンたちが買ってゆく。希望だけを売るライブハウス、一時の記憶喪失を生産するだけのバー。

音楽の他に、演劇があることを高橋は知らなかった。「りんどう」とは、演劇用の貸しスペースらしい。ライブハウスになるか芝居小屋になるかは、催し(コンテンツ)もの次第で変ると。パステルピンクの小さな貼り紙に紺色文字の印刷があった。「自閉症児による仮面演劇療法の実演（見学無料）」――これのことだろうか？　主催は、「しらかば会（自閉症児を応援する心理学者と臨床心理士のグループ）」と書かれている。客に見せる演劇ではなく、演劇を通した心の治療であるらしい。学術的、な？　走り書きのメモと見比べる。「高円寺りんどう」がふたつなければ。

長机の受付には、蒼白い肌の、ひょろ長い青年がパイプ椅子に座っていた。入口の青白い照明で、余計幽霊のように見えたのかも知れない。髪は目が隠れるほど長く、俯いて視線を合わせなかった。人の目を見て話せない高橋には心地よい。受付にもう一種類ビラがあり、詳しい情報が書いてある。「講師陣――仙波治郎、波田頼道、谷田みち子、二階堂千波」。思わず声を出す。現実だ。これは現実なのだ。「二階堂千波」の文字だけが、青白く光っているように見えた。

「見学……です」

目を合わせずに言うと、受付の青年は記帳するように促し、扉を開けてくれた。

暗闇の中は、異様な空間だった。

子供たち――小学生から中学生くらいの――が、真っ白な仮面をつけている。演劇というにはあまりにもお粗末な、長机とパイプ椅子が並べられているだけ。一灯のスポットライトが、それを照らすのみ。衣装も普段着で、練習場のような空間だった。ただ四つの白い仮面だけが、黒の中に浮き上がる。無表情の白い仮面の黒い孔の奥から、八つの目が覗いている。「仮面演劇」という言葉を、高橋は初めて聞いたと思った。

奥の隅に、車椅子の指導者らしき人がいることに気づく。全身黒い服で黒い車椅子だから、闇に紛れていたのだ。鍔の広い黒の帽子を被ったその先生は、入ってきた高橋に気づき軽く会釈をした。

「お母さん！」

食卓の「娘」が、「母」に呼びかけた。「家族」を演じていることが、なんとなく分って来る。

娘　私、夏休みに遊びに行きたいんだけど！

母　遊んじゃいけないわ

娘　どうして？

母　あなた病気でしょう？　家で大人しくしてなさい

娘　どうしてよ？　私は水着が欲しいの！　海で泳ぎたいの！　友達とも遊びたい！

母　お父さんなんとか言って下さい

父　母さんを困らせるな。次郎もそう思うだろう
弟　そうだよ。そんなの姉ちゃんの我儘だよ
父　そうだ。我儘だ。傲慢だ。

病気の娘が家族に我儘を言っている場面だろうか。突如、劇は意外な方向へ進んだ。

母　我儘言ってんじゃねえよ！

母親役の子供が切れ始めたのだ。

娘　何で我儘言っちゃいけないのよ！
母　あんたは病気なんだよ！　大人しく薬飲んで寝てればいいんだよ！　お医者さんに『もういい』って言われるまでじっとしてるんだよ！
娘　何でよ！　何で海に行っちゃいけないの！　何で水着を買っちゃいけないの！
父　（母に）お前が全部悪いんだ！　お前がこんな子を産んだから！

父親も切れ始め、弟までもが姉を批判しはじめた。

弟　姉ちゃんのせいで、俺学校でいじめられてんだよ！　姉ちゃんなんかいなきゃ良かった！
母　なんでお前が！
父　なんでお前が！
娘　私は自由になりたいだけなのに！

「娘」は心の底から叫ぶ。その感情の頂点で、車椅子の指導者はパンと柏手を打ち、演劇は終了となった。特に落ちがあるわけではない、これは一場面の練習なのだと高橋は理解する。白い仮面の家族は、ゆっくりと元の子供たちに戻ってゆく。

「一端休憩を入れます。次は役を入れ替えで。どの役をやるのか、分ってる人？」

四人の白い仮面は、手を挙げて答えた。

「じゃあ十五分後再開」

子供たちは仮面を取る。さっきまで激しい感情だったのに、仮面の下の「本当の顔」は突然無表情に戻ったようだった。いや、仮面が激情で、そっちのほうが本性かも知れない。肉体の顔がほんとうの本性とは限らない。それが高橋に理解できたのは、高橋自身がそうだったからだ。

指導者は、車椅子を漕いでやって来た。

黒い帽子の下から素顔が見え、高橋は思わず目を逸らした。火傷の痕、とでも言うべきものが顔中に広がっている。顔だけでなく、黒い長い袖から出た手、黒いズボンとスニーカーの間に見える脚にも。全身火傷の重傷を負ったのだろうか。だが怪物のような外見に目を逸らしたことを高橋は恥じ、再び目を上げる。

「受付で記帳してくれました？」

うなづいた高橋は、そのしわがれ声が女性であることに驚いた。さっきまで男だと思っていたからだ。怪物（モンスター）は男――そういう偏見があるのかも知れない。彼女が喋る度に、傷だらけの顔が歪んだ。肌がきちんと伸び縮み出来ないのだ。火傷そのものは完治しているのだろうが、皮膚が引き攣るようだ。その皺がまるで老婆のようだった。だが目元を見る限りまだ若い人のようだ。どういう人生を生きてきたのか、想像も出来なかった。彼女は続けた。

「彼らは自閉症です。普段、他人の前で言葉を発することすら困難です。でも不思議なことに、演劇だと言葉を発することが出来るんですよ。『台本を演じる』という行動になるからでしょうか。それを利用した演劇療法というものがあって、全く自分とは違う他人になる為、仮面を被って分り易くしたのが仮面演劇です」

長机の上に置かれた、四枚の白い仮面を彼女は見た。

「彼らに人気の役が誰か、分ります？」

自由になりたいと叫ぶ姉役だろうと高橋は思う。閉じ込められた精神の牢獄から脱出したいのは、彼らの本音だろうからだ。

彼女は首を振った。

「一番人気は、娘を追い込む母親役なんですよ。意外でしょう？　でも意外でもなんでもないんです」

高橋の戸惑う顔を見て、彼女は種明かしをしてくれた。

「だって彼らは普段から、あんな追い込みをされてるから。それを嬉々として演じるんです。突きつけられた刃を、どこかに返したいのだと思います」

「……」

「ほんとうにそういう言葉を言われたかどうか、あるいは母親にそう言われたかどうかは関係ない。周囲の人たちに心の中で思われていると、彼らが思っている言葉。それを空中に成仏させることで、心のもやもやを吐き出すんです。ベースのセリフはあるんですが、驚くことに、彼らの罵声の殆どはアドリブなんです」

アドリブ。決められた言葉じゃないって？

「仮面というのは不思議なもので、その人の本性が出ることがあるんですよ。普段の肉体の顔こそが仮面で、その裏に隠した本性が、『役割』という言い訳を与えられると出てくるんです。普段自分を抑圧している人ほど、仮面を被ると抑圧が解放されることがあります」

「つまり……」

高橋はようやく言葉を発した。

「車に乗ったら人格が変わる奴は、そっちが本当の自分」

彼女はうなづく。

「人は現実の肉体という仮の姿をしているけど、本性は無意識の中に隠れている。それを解放するのです。明晰夢も同じ」

突然、間合いに入られたと高橋は感じた。剣の立ち合いなら、すでに斬られていただろう。

「夢の中では、抑えられない衝動、願望、無意識、本当の自分が出る。轡了は、それを利用していると思う」

なぜ気付かなかったのだろう。彼女は小さな銀のネックレスをしていた。人と目を合わせるのが苦手な高橋は、それよりも目をずっと下げていた。
ネックレスには、トルコ石（ターコイズ）が嵌めてあった。
「夢の中の姿と違って、がっかりしたでしょう？　私が二階堂千波です」
引き攣れた、爛れた皮膚が笑顔で歪んだ。黒服で全身を隠す車椅子の怪物。しかし夢の中では風に靡くワンピース、ターコイズの瞳の少女。
「夢の中ほど喋らないのね？　高橋君」

2

「そう……そうだと分ったら……」
高橋の中に、急に「夢の中の自分」が還ってきた。これまで思っていたことが、洪水のように溢れ出た。
「そうだと分ったら、聞きたいことは山程あるんだ！　轡了ってのは何者だ？　〈空飛ぶサークル〉って何なんだ！　明晰夢って一体何だ？　お前はどうやって俺の夢の中に侵入した？　そうだ、『監視してた』って言ったな？　涼子とのアレを見てたんだろう？　彼女は死んだ。何故だ？　何故『空へ飛ぶようにして』死んだんだ！　おそらく彼女は轡に会ったんだ。六本木のセッションで出会った女、澤田さんが東京タワー自爆テロの犯人。一体どういうことだ！　『背中を見られた』ら、どうなるんだ？　俺も死ぬのか？　彼女たちのように！　轡はまた夢の中にやって来るのか？　知ってるんだろ？　何もかも！」
一気に話した。呼吸が荒くなり、高橋は一体何を聞きたいのか、自分でも分らなくなってきた。
千波の肉体の瞳は、薄い茶色だった。その二つでじっと高橋を見ている。皮膚がめちゃくちゃでも、魔女のようで怪物のようでも、瞳だけは澄んで美しい。
「……時間はたっぷりある。子供たちの休憩時間は延長します。何があったか、聞かせて」
「……」
「明晰夢を習得した人は、ほぼ百パーセントセックスをする。欲こそが人間の駆動力だから、そこを特に恥じることはないわ。それよりも何が起こったかを知りたい。東京タワーの一件も」
高橋は覚悟を決め、これまで起こったことを詳らかにした。立花涼子を夢の中で犯そうとしたこと。マンションから笑って飛んだ姿。六本木であったこと。東京タワー上空。
「……俺は、涼子は轡に殺されたと思っている」
高橋は最後に付け加えた。
「何故、そう思うの？」
「おそらく轡は、涼子の『背中を見た』んだ。そして、恐怖か、あるいは快楽で、彼女を操ったんじゃないかと考えている」
「人を洗脳するのは簡単よ」
千波は茶色の瞳を瞬かせて答えた。
「快楽、恐怖を与えるのは多分正解。飴と鞭ね。どちらも明晰夢で与えることが出来る」
「……」

「覚えてるかしら。三年前の、新宿無差別通り魔事件。キャバクラ嬢が包丁を振り回して十人を次々に惨殺。あるいは二年前の池袋。群衆に車で突っ込んで多数の死傷者を出した主婦。あるいは一ヵ月前、赤羽駅でホームから男を突き落としたＯＬ」
記憶の端に、うっすらとある。高橋はうなづいた。
「逮捕された彼女たちの言い分には共通点があった。『まるで悪魔でも憑いていたかのように』事件のことを覚えていないこと。その後の彼女たちを知ってる？　三人とも獄中自殺」
「……それは、笑って死んだのか？」
「だと私は考えている。彼女たちを夢の中で催眠状態にして、操ったのではないかと。飴と鞭で。仮面はそのままに、本性を書き換えて」
「三人の件は、東京タワーの予行演習」
千波はうなづく。
「美人は使い勝手がある。たとえば警備員は男でしょ？　袖の下で警備の中に入れてもらうの。たとえば……性的な何かと引き換えに」
高橋の胸はうずく。考えたくないが、美女を操るのなら、自分でもそう利用するだろう。
「〈空飛ぶサークル〉。美女を集め、爆弾を仕掛ける組織だと？」
「ええ」
千波は、高橋を見た。
「私たちは〈空飛ぶサークル〉のテロを、明晰夢で止めようとしているの」
「……どうやって？」
千波は車椅子をぎい、と引き、右手で高橋との間に架空の線を引いた。
「ここから先は、仲間にしか話さない。夢とは無意識の世界。だから枷をかけられないし、無防備ゆえに危険。でも、私はあなたに仲間になって欲しいと思ってる」
千波は、舞台に残された白い仮面に目をやった。
「仮面を被りなさい」
「？」
「私は、それを見せる為にここに呼び出したの。仮面を被れば『背中を見られない』。仮に轡に侵入されても、恐怖を防御出来る」
「……」
千波はさらに車椅子を引き、高橋と距離を置いた。
「これであなたは帰っていいわ。ありがとう。直接お話が出来て良かった。白い仮面は余ってるから、ひとつ持って帰って良くてよ」
段ボールに新品の白い仮面が入っている。手に取るとプラスチックの安物で、こんなものので本性と仮面を入れ替えられるのかと思う。いや、これはあくまで「記号」だ。本性と仮面の関係に気づく為のきっかけの道具だ。
「仲間になれと言ったじゃないか」
「私は扉を閉めない主義なの。ここから出ればあなたは元の世界に帰れる。轡の侵入に仮面という対抗手段を持ち、自分の夢の城で生きる生活に戻れる」
高橋は後ろを見た。扉は少し開いていて、受付の青い照明が漏れて仮面に当っている。冷たい、外からの風を高橋は感じた。それは高円寺へ繋がり、六畳のアパート、天王洲の

灰色のオフィスへ繋がる空気である。
「出なければ？　仲間に入れるのか？」
千波はうなづいた。
「私たちは明晰夢のことを、あなたより詳しく知っている。〈空飛ぶサークル〉の明晰夢を利用した凶行を止められるのは、明晰夢を使いこなす者たちだけ」
「……俺にそれが出来ると？」
「私はずっと、力を持つ人を探していた。あなたの力を貸して欲しい」
高橋の前に、ふたつの道がある。ひとつは現実に戻り、面白くもなんともない灰色の世界で、夢の王でありつづけること。もうひとつは、自分の力を使える世界にゆくこと。
「どうして眠っている間に見る『夢』と、目標とか希望の『夢』が同じ言葉なのか、考えたことがある？」
「……いや。ビジョンのようなものだからか？」
「『もうひとつの世界』だからだと私は思っている。無意識や本性は、現実とは別のもうひとつの世界。将来は、まだ来ていないもうひとつの世界。誰もが現実でうまく行かないとき、『もうひとつの世界』が私たちを救うことがある。あなたは、『もうひとつの世界』の住人」
高橋は、一度は手に取った白い仮面を箱に戻した。千波が示した、二人の間の架空の線（イマジナリ・ライン）を越える。
茶色の双つの瞳は、笑ったように思う。
「俺は、これ以上美女が世界から失われるのは勿体ないと思うだけだ」
高橋なりに、精一杯の冗談を言ったつもりだ。

3

「仲間に会わせる」と、高橋は車に乗せられた。
運転しているのは受付にいた、前髪で顔が隠れるほど伸ばしたひょろ長い青年。彼も自閉症で、しかも明晰夢実践者だと千波は言った。つまり、「仲間」の一人であると。
彼は一言も発しない。千波の車椅子を押すのも、普段は彼の役目のようである。千波が身障者用の固定装置に身を沈めたまま言った。
「彼の名は静尾統（しずおおさむ）。私の元担当患者で最初の仲間。自閉症児だった。でも夢の中に、とても豊かな世界を持っていることが分ったの」
「豊かな世界？」
先程の仮面の子供たちが思い出された。仮面と、本性。普段の姿と本当の姿は違うこと。
「彼は写真記憶を持つの。自閉症というのは脳の中の世界が豊か過ぎて、脳の処理が追いついていない状態っぽいのよね。立ち止まらないと処理できなくて、現実ではフリーズしているように見える状態。今度彼の描いた絵を見せてあげる。彼は私たちより多くのものを見て、蓄えているのよ」
この青年にそんな深い池がある。そうは見えなかった。
「不思議だと思わない？　自閉症という世間のイメージと違って、彼は堂々と車を運転してる」

「あ、そういえば。……そんなこと出来るのか？」
自閉症という言葉のイメージで、高橋は部屋にずっと引きこもって動かない人、ずっと壁を見ている人、などの先入観があった。それを正直に言い、ずっと引きこもっているだけなら、俺だって自閉症じゃないかと言うと千波は笑った。
「世間の人は心の病の正しい姿を知らない。ドラマやニュースのイメージだけで見てる。心の病は『思い方次第でなんとでもなる気分症』ではなく、立派な脳の機能障害。問題は、脳または心が複雑すぎて、それをどうやったら『正常』の範囲に戻せるのか分らないこと。薬が効くこともあるし、行動療法が効くこともある。そもそも『正常』の定義も人によるし」
高橋はバックミラー越しに静尾を見た。目を合わさないが、この話は聞いているのだろう。千波は続ける。
「『普通』に生きている人もいるのよ？　就職して働く人もいる。人と会うような営業ではなくて、研究職や一人で出来る仕事が多いけど」
「俺も、似たようなものかも知れない」
エンジニアという職業は、そのようなものだと説明すると、千波は頷く。
「何かが足りない人は、何かが突出することがある。アインシュタインは、自閉症のまま一度も学校に行かずチューリッヒ大学に入ってそのまま相対性理論をつくった。あなたたち二人は似てると思ったのよ。内に秘める埋蔵量が。きっと素敵な仲間になれる」
「仲間に？　どうやって？」
「簡単よ。味方になるには、味方の味方をすればいいの」
このキノコ頭の男と？　いや、外見と中身は違うのだった。この男の本当の姿はまだ分らない。コミュ障の高橋は、あまりにも簡単なその考え方に拍子抜けした。
「私の全身火傷は、実の父につけられたの」
突然の千波の告白に、高橋はぎょっとした。
「いずれ『どうしてそんな姿に？』って説明しなきゃならないし、今言っとくわね。私は子供の頃から父親に虐待されてたの。とくに水責めをよく受けていた。ある日目隠しをされて『今から煮えたぎった釜の中にお前を放り込む』って脅されて、足にお湯を掛けられたの。煮えたぎる釜の中のように熱かった。有名な拷問で、足を見えない状態にしておいて、『お前のアキレス腱を切った。血が一滴一滴落ちて、いつか血が失くなって死ぬ』と言って、足にぽたぽた水滴が垂れるようにすると、血が流れてもいないのにそう思い込んで、本当に死ぬんですって。脳の中の認識世界が、現実より影響力が強い例ね。子供の私も同じ。そこは釜の中での極刑だと信じた。そうして私は身を縮こめて、全身がこうなったってわけ。ただの水風呂に放り込まれただけだったのに」
「……」
「体を縮こめ過ぎて、両足まで動かなくなってしまって、第一級障碍者。それで施設に預けられて、でも父親の虐待から逃れられてラッキーだった。代償に、普通の青春を得られなかったけど」
彼女は笑うが、高橋はリアクションに困る。
「何が足りない人は、何かを補う為にいると思う」
彼女は目を合わさずに言った。高橋は目を合わせるとうまく喋れなくなることを、この

短時間で理解したようだ。
車が停止した。
「ここが私たちの拠点」

4

なんだか暗い商店街だった。シャッターの閉まった店が多く、古ぼけた店たちがぎりぎり息をしている通りであった。
対テロ組織の拠点にしては、あまりにも平凡な住宅街の中。立川駅を過ぎたあたりの、古風な文具店の前に一行はいた。煤けた柱は傾き、瓦屋根はたわんでいる。看板の墨書は禿げ、「小山(こやま)文具店」の文字がかろうじて読めた。「小学生飛び出し注意」の人形看板が、雨ざらしの刑を受けている。森の中の秘密基地や滝の裏でないこと位は分るが、ただの昭和の文具店がそれとは。
番台に座った文具店の店主が、声をかけた。
「いらっしゃい。小山文具店へようこそ」
高橋は遠近感が狂ったのかと思った。顔の見た目は五十か六十のしょぼいおじさんだが、小さい。子供のように小さいのだ。手足が短く、分厚い眼鏡と禿げ頭に、似合わないくらいに小さい。
「小人症というのさ。小人プロレスとか昔あったろ。立てばホラ、この通りだ」
店主は番台から降り立った。たしかに子供のような身長で、一同は彼を見下ろすことになる。
「そこの『小学生飛び出し注意』は、俺の為に立ててあるのさ」
店主は笑って、遥か下から握手の手を差し出した。
「小山大(ひろし)。小さいのに大だ。二つ名は『光の巨人』」
高橋は握手をする。子供と握手しているみたいだ。
「二つ名？」
「アレ？　聞いてないのかい、『水の魔女』から？」
「水の魔女」
高橋は千波を振り返る。車椅子の黒ずくめ。夢の中の姿はターコイズの瞳で、水を操る少女。
「ああ……成程」
千波が恥ずかしそうに俯く。
「だからそういうのは止めようって言ったのに」
「なんでだよ！　分り易いじゃんか！　世界を救うヒーローみたいでさ！」
非難めいた千波に、小山は禿げ頭をやかんのように真っ赤にし、ぴょんぴょん下から飛び跳ねた。
「静尾君の二つ名はサイレント・ドクター。『サイレント』は普段の姿から。『ドクター』は……まあ、夢の中の姿を見たほうが早いな」
静尾(ドクター)は千波(魔女)の車椅子を押している。「サイレント・ドクター」や「光の巨人」が彼らの

中にいるのだろうと高橋は想像するが、うまくいかなかった。
「で、お前さん」
店主は遠近両用眼鏡の奥から、高橋を覗き込んだ。
「さっきから俺に目を合わせねえってことは、サイレント・ドクターと近い才能の持ち主ってことか」
千波がフォローする。
「ええ。彼の名前は高橋巧。〈空飛ぶサークル〉に単身潜入した度胸の持ち主よ」
「なんと！　そいつは凄えや！　こりゃあ今夜が楽しみだな！」
「今夜？」
「現実の姿で自己紹介してもショボいだろう？　だから夢の中でちゃんとやろうぜ！」
「……たしかに」
今の姿は本当の姿じゃない。高橋だってそう言いたい。千波が続ける。
「一度訪れた場所なら、夢の中でも行けるでしょう？　私たちの集合場所は、夢の中では毎回ここなのよ。ここなら何の変哲もない、只の文具店だから」
「何の変哲もなくて悪かったな！」
禿げ頭を撫でて、小山は小学生のように走り出し、店内へ入った。
「お茶でも淹れよう。折角来てくれたんだから」
高橋は木造の店内へ入った。中は薄暗く、戦前から時が止まったかのようだ。古い糸綴じのノート、筆、硯、算盤。彫刻刀にナイフ。野球のゴムボールにプラスチックのバット。今時の小学生、こんなものを使うのだろうか？　少子化の昨今、これで儲かるのだろうかといらぬ心配をする。
「その文筆堂の『タイガーノート』、もう工場閉めちゃったんだけど、スーパー貴重品だぜ。もう作っていない紙と、職人もいない最高の糸綴じ、表紙の鼠色は特殊Bコート。ロストテクノロジーの結晶だ」
お茶の香気が、時が止まった空間に風を連れてきた。

「私たちが明晰夢について知っていることを」
千波は、タイガーノートの切れ端をもらい万年筆で記し始めた。美しい字を書くと高橋は思った。皮膚が引き攣れている「魔女の手」を、まだ正視するほど慣れていない。
「『ルールN』と呼ばれています」

ルールN

1　明晰夢では五感が増幅され、現実以上に感覚が鋭くなる
2　明晰夢では、世界を思うように変えられる
3　明晰夢同士は繋がっている（現実の世界で接触すると、繋がりやすい）
4　共通の明晰夢で支配的になるのは、おそらく「力」の強い方
5　仮面を被れば、本性を晒さなくて済む
6　このルールはいくつあるか、分っていない

高橋はそれを眺めた。これまで経験してきたことが、短くまとまっていると思った。本性と仮面の関係を理解させる為に、千波は高円寺で法則を見せたのだろう。
「いくつあるか分っていないので、『ルールN』と呼ばれているの」
「『現実の世界で接触すると繋がりやすい』ってどういうことだ？　確か、衛本も似たようなことを言っていた」
「明晰夢同士は、偶然繋がることもあるけど、『会ったことがある人』は繋がりやすい性質があるみたい。たとえば、あなたと立花さんの夢のように」
「……俺と千波さんは？」
「最初は偶然繋がった。『力』を持っている人を見つけたと小躍りしたものよ。その時に周囲に天王洲の風景が見えたので、張り込みしたの」
「張った？　俺を？」
「車椅子の黒づくめの女が駅や電車にいたとしても、とくに記憶に残らないでしょ」
自分が女を尾けることの、逆をされていたというのか。
「一度行った場所に夢の中で行き易いのも同じ原理だと思う。『袖擦り合うも多生の縁』ってことかしらね」
「じゃ、触ったのか」
「満員電車ならそれも自然なので」
「痴漢の言い訳かよ」
「ふふふ」
こうして笑う所を見ると、夢の中の美少女の姿が想像できた。たしかに、その中にあの人がいることが、今掴めたような気がした。
「で？」
高橋は一番聞かなければならないことを聞く。
「どうやってテロを止める？」
「闘うことでさ」
小山が茶を啜る。
「闘う？」

高橋は、久しぶりに安心して夢の中に入った。
あの白い仮面を具現化し、被れば、轡が夢の中にやってきても防げる。夢の中に仲間がいれば気付き、撃退出来るかも知れない。「誰かと夢の中で会う約束をする」という奇妙さが、逆に高橋に安心感を与えた。
千波の言った通り、一度訪れた場所に夢の中で行くのは容易だった。自宅から立川に電車で行く必要はなく、飛ぶだけで良かった。新宿より西は行ったこともなかったから、適当な街で補完されている気もするが、とにかく高橋は小山文具店の上空へ辿り着いた。上から見た風景は見ていない筈だが、これも脳内補完だろうか。
二階の物干台が、突如ばきばきと割れた。中から巨大化する文具店主が顕れた。あの番台のようなところに座っていたままの姿勢で、屋根を越える大きさになった。
「よっこいしょ！」

膝を立てて立ち上がる。どしんと大きな音がして、店頭の「子供飛び出し注意」の看板が吹き飛んだ。怪獣の立ち上がりを彷彿とするが、禿げ茶瓶の頭、銀縁の眼鏡、辛子色のベストにグレーのズボンと、ただの小人店主が大きくなっただけだ。

「これで小山じゃなくて大山だろ？　ワハハ」

小山はばつんと服を破り捨てる。と、全身が光り輝いた。腕も脚も頭部も胴体も、全てが光り輝く巨人となった。

「夢の中での『闘い方』を教えるぞ。儂はこうだ」

光の巨人は掌を腰だめに構えた。掌の中心に光る球が顕れ、たちまち伸びて槍になった。高電圧がチャージされるような甲高い音が鳴り響く。空気がオゾンに分解されたような匂い。

「魔槍ゲイボルグ。なんちゃって」

ケルト神話の英雄、クー・フーリンの槍の名を借りて、光の巨人は投げ槍競技のように空に投げた。

富士山が見える。槍は山体を二つに割った。中腹に刺さった光る槍は、亀裂を富士山に走らせ、二等分した。光から遅れて爆音が聞こえる。白い雪は莫大な熱で蒸発してゆくようだ。

「それぞれが、それぞれの得意技を持つのさ。私の場合はこの槍だね。何故か巨人化した方が調子が良くてね」

光の巨人は、小山とは似ても似つかぬ顔で笑った。

「おや、サイレント・ドクターのお出ましだ！　おうい！　彼に得意技を見せてやってくれ給え！」

駅前から文具店に至る通学路には、多数の通行人がいる。もっともこれは脳が夢の中で勝手に補完した「風景」のひとつで、本当の人間ではないことは高橋も承知している。

その中にキノコ頭の男、静尾が現れた。長い白衣を着ている。医者（ドクター）の格好だ。そして叫んだ。現実の押し黙った姿とは似ても似つかぬ口調で。

「オッサン！　富士山爆裂とは、アイツら以上のテロリストじゃねえか！　高橋チャン！　今から俺の『本当の姿』を見せてやるからよ！　目ェかっぽじって記憶しな！」

「高橋……チャン？」

そんなノリの男ではなかった。いや、高橋だって夢の中では同じか。夢の中での饒舌王は、現実ではコミュ障のぼっちだ。千波が「似ている」と言ったことを改めて理解する。

目までかかる長い髪をかきあげ、静尾は懐から白銀のメスを二本出した。

「手術（オペ）開始イイイイイイイイ！」

手術用メス二刀流。その切っ先を乱反射させながら、ドクターは群衆に突っ込んだ。そのメスが触れた人々は、次々に膝を折り、崩れた。腹を抑えたが抗しきれず、どろりと赤い内臓が漏れ出した。

高橋はこの惨事を上空から見ていた為、通りに次々と赤い華が咲いていくように見えた。十人、あるいは二十人。全ての通行人の内臓が摘出された。静尾はそれを丁寧に摘み上げ、整理してアスファルトに並べた。湯気が出ている。それは料理の材料や機械の部品を幾何学的に並べた、記録写真のようですらある。

「どうだい！　今日の手術（オペ）も最高だったぜ！　この血管も神経も、迷路のような模様まで

俺の写真記憶に全部刻まれるのさ！」
「『サイレント』が現実の姿、『ドクター』が夢の中での姿……」
高橋は絶句した。
「俺は現実を処理しきれない。だから現実では黙っているだけで精一杯なんだ。だが夢の中では別だ！　ほんとうの俺に戻れる！」
光の巨人が笑った。
「そして真打、我らがリーダー」
振り返ると、白いワンピースの、ターコイズの瞳の美少女が浮いていた。
短い黒髪が風に靡いている。
「私のこの姿は、火傷さえ負わなければあり得た未来の姿」
現実の彼女の爛れた皮膚と違い、透き通るような滑らかな肌をしていた。血色が良く、人形でない生きた肌。
「瞳の色は違うだろ」
「いいツッコミね高橋君。これは趣味ね」
「趣味かよ」
彼女ははにかんだ。こんなに楽しそうに笑う顔だったのか。
「趣味というより、聖痕（スティグマ）かも」
「？」
「夢の中の得意技ってのはね、弱点やトラウマと一体なのよね」
「どういうこと？」
「私は水責めをされたトラウマがある。だから得意技は、水を操ること」
千波は手の平をくるりと回転させ、球の表面を撫でるようにした。
たちまち中心に水が現れ、二人を包み込む水の球となった。
「夢の中だから水の中でも呼吸できるわよ？　夢という無意識の中では、水は心の状態の象徴。暖かくて澄んだ色なら安心している。暗く濁っているなら心が荒れている。今日の私は落ち着いた色ね。で、この水の中から外を見ると、ターコイズブルーのフィルターを通したように見えるでしょう？」
腕の動きに合わせて、水は二人から去り小山文具店へ落下した。みるみるうちに嵩を増し、洪水となり、文具店の周りの住宅を呑み込んだ。
「オイオイ俺の家沈めてんじゃねえよ」
光の巨人が抗議する。
「俺様のコレクション流すなよ！」
湯気を上げる赤い華の中からドクターが叫ぶ。
千波は笑って洪水がその通りを避けるようにコントロールする。そこを残して、辺りはたちまち海となった。地中海のような、鮮やかな色の海だ。
「夢の世界は繋がっている。今この瞬間も、夢の中で洪水に巻き込まれて飛び起きた人が、どこかにいるかも知れないわね」
二人は地上に降りた。洪水の跡も整列した内臓もなかった。光の巨人は文房具店主に戻り、白衣の陽気なドクターが派手な音楽をかけた。
「これでざっとした自己紹介はいいかしらね。あなたの番よ」

高橋はうなづき、飛んだ。両手を上げ、街を改変する。小山文具店は十階建てになり、駅前の商店街はサイバーシティーからスラム街まで、自在に変容した。
「スゲエな！」
「ほほう」
ドクターも巨人も感心する。
「仮面を被って」
魔女の指示に高橋は白い仮面を出現させ、被った。
「別にそのビジュアルじゃなくてもいいんだけど？」
「いや。やっぱり一回触ったからやり易いや。これで」
白い仮面の男は、立川の街を飛び回った。
「それで防御が出来る。再び背中を見られることはない」
「成程！」
空中で急停止した高橋は、魔女に尋ねた。
「で、闘うってどうやるんだ？」
「『ルールN』には非公式の続きがあるの。夢の中で死ぬとどうなる？　普通は飛び起きるでしょう？　それは脳が衝撃（ストレス）をシャットダウンして、自我を守る仕組みになっていると思うのよね。でも夢からログアウトする前に、もう一度死の衝撃を与えたら？」
「つまりこういうことさ！」
ドクターは、二本のメスを舐めた。
「夢の中で二度死ぬと、本当（マジ）に死ぬ」
「……試したのか？」
「実はまだでね。誰もその経験はない」
光の巨人が槍を担ぐ。
「でも私たちはその覚悟で集まったの」
「……」
「高橋君。あなたの『力』は何？　それは何と表裏一体？」
「……」
「何か突出している部分は、何かが足りないから」

ここで高橋の夢は途切れた。
足りない所？　一杯ありすぎる。足りないから、俺は夢の中で自由に飛び回っていたのだ。
高橋は「ルールN」をノートに記した。
『夢の中で二度死ぬと、死ぬ』も書き加える。
自分は、立花涼子の仇を討ちたいのだと、その後に続けた。

5

「あっ！　高橋君（タカハシ）やな！」
立川駅に向う電車の中で、赤い派手なジャンパーの男が高橋に話しかけてきた。

「話に聞いてたイメージとちゃうなあ！　びゅんびゅん飛び回るタイプらしいのに、なんで目逸らすんや！　あ、分った！　サイレント・ドクターと同じタイプやな自分！」
陽気な大阪弁でべらべら喋りながら、その男は右手を出して握手を求めた。
「錨錠。二つ名はマシンガン・ジョーや！　あ、オレ、このマシンガントークが武器で、夢の中でもマシンガンぶっ放すんやで！」
錨なる男は、勝手に高橋の手を奪い、大げさに振った。
「この駅でこの時間に降りる奴なんかおれへんからな。噂の新人、高橋君やないかと思ったんや！」
「違ったらどうするつもりだったんだよ」
やっと声を出した高橋に、錨は肩をはたいて答える。
「その為の二つ名やんか！」
彼の喋りは、商店街を抜け小山文具店に着くまで止まらなかった。
「あ、オレテレビのADやってるんで、こんな喋りですねん！　前説で観客のみなさんを笑かして暖めんのが得意や！　本番前にお客さん入れるやろ、『うわあ今日は別嬪さんばっかりや！　別嬪さん別嬪さん別嬪さん』って数えて、カメラマンのオッサンにも『別嬪さん』とか無茶ぶりしたら、大体笑うやん？　それでみんなの緊張がほぐれて、本番でも爆笑しやすくなるんやで！」
立て板に水で錨は喋る。高橋は発話のタイミングが分らない。
「あとオレ、短時間睡眠者やねん。イラチって知ってるか？　大阪人は皆そうやな。日本一歩くのが早くて早飯の民族やからな。すぐ結論出さな気が済まんのや。オレは三時間睡眠でパッと起きんねん。ナポレオンも明石家さんまも特異体質のショートスリーパーらしいで！　徹夜も楽勝やから、業界で重宝されとるんや。あ、うるそうてごめんな！　ADHD（注意欠陥障害、多動症とも）やからオレ。ADでADHD。はは！　短時間睡眠とADHDは関係あるらしいで？　せや、このマシンガントークで全然自分喋ってへんな！　まあ夢の中では静かやし勘弁してや！　代わりにドクターがノリノリやけど！」
「……どっちにしても、うるさい奴がいるってことじゃねえか」
「はは！　ナーイスツッコミや高橋君！」
錨は両手の人差指を立てておどけた。

小山文具店のガラス戸をガラリと開ける。千波、車椅子の傍に座る静尾、文具店店主小山が、差し入れのフルーツ羊羹を摘まんでいた。「今日は全メンバーが揃う」と聞いている。錨によれば、仲間は全部で五十三人という。
差し入れの主は、巨漢というには言葉が足りない程の、巨体を揺さり揺さりとする女だった。大口をガハハと開けて笑う毎に、スライムのように体が揺れた。
「オッス苺！」
「錨くんオッス！　隣は……新人の高橋君ね？」
「ピンポーン！　電車で一緒やってん！」
錨はシュッと隣の座布団に滑り込みざま、羊羹をぱくりと食べた。
「あ。こんな所に豚足が。美味しそう……って私の手かー！」
その女は、自分の丸々と太った手を食べようとしてガハハと笑った。

「細沼苺（ほそぬま）。そのへんの事務員やってます。二つ名は美食家（グルメ）。なんでも食べちゃうのよ？」
ガハハと大口が笑う。「賑やかだねえ」と小山は目を細める。
高橋は軽く会釈して、小山が勧める座布団に座った。苺がお茶を淹れてくれる。錨が二つ目の羊羹を食べながら苺に尋ねた。
「今日は『苺』なんけ？」
「そうよ。だから集まれたのよう。桜桃（チェリー）だったら大人ばかりで泣いちゃうし、檸檬（レモン）だったら新人君に嫌味ばかり言っちゃうし……」
千波が解説する。
「彼女はいわゆる多重人格者なの。正式には解離性人格障害ね。苺の中に、桜桃（チェリー）、桃（ピーチ）、葡萄（グレープ）、蜜柑（オレンジ）、檸檬（レモン）、梨（ペアー）、林檎（アップル）……全部で四十八人の人格が生きてるの」
ガハハと苺は笑う。
「四十八人分羊羹食べるわけじゃないから許してよね！　そういえば、棚にかりんとうあったわよね！」
「目ざといなあ苺は……」
小山はため息をつきながら、秘蔵の黒糖かりんとうを出してきた。
高橋は計算する。四十八人の苺、錨、小山、静尾、千波。自分を入れて五十三か。
「五十三人も、この文具店に入る訳ないと思ってたが……」
高橋の問いに苺は答える。
「錨、アンタ私を四十八人に数えたんでしょ！」
「体重は四十八人分やんか」
と突っ込む錨に、苺は「どすこい」と張り手で返す。
小山はかりんとうを小りすのように食べながら話した。
「多重人格にＡＤＨＤ。自閉症に火傷で車椅子。そしてこの小人症。障碍者ばかりだから、儂が『大戦隊障碍者ファイブ』と名付けたのだ」
「高橋君（タカハシ）を入れて『障碍者シックス』やな！」と錨が言えば、
「ちょっと錨くん。障碍者とは、高橋君に失礼よう」と苺がフォローする。
高橋は反論はしない。社会生活不適合者を含めるならばそうだ。だが高橋は先入観を覆されたと思った。障碍者が暗い生活と誰が決めた。彼らはとても明るく生きているように見えた。高橋よりもだ。
「これで全員直接会ったから、夢の中でも繋がれるわね。良かった」
千波は胸を撫で下ろす。
「全員。たったこれだけの人数で、巨大テロ組織に立ち向かうと？」
高橋は障碍者たちを眺めた。地球を救うヒーローにしては、あまりにもお粗末ではないか。
「人数が勝負やないんやで？」
錨は言った。
「夢の中でどれだけ『力』が使えるかや」

「イントロデューシング……マシンガン・ジョー！」

白衣のドクターがファンファーレを流し、お辞儀して促す。マシンガンを構えるは、赤いジャンパーの錨。派手な音を立てて機械銃が唸る。算盤の珠が飛び散り、ノートが粉々になり、サクラクレパスが七色の粉になる。
「あああ貴重なる文筆堂のタイガーノートがあああ」
と小山は嘆く。
「別に」「リアル文具店を」「粉々に」「したわけちゃうから」「ええやん」「ええやん」
「ここは」「夢の世界なんやから」「ちなみに」「これは」「言葉の弾丸や」「高橋君（タカハシ）」
と、マシンガンが炸裂した所から言葉が弾けた。ターコイズの瞳の千波が解説する。
「錨くんの恐れるものは『沈黙』。だから彼はマシンガントークをする。それが夢の中でも武器になる。本当の彼は、物静かな哲学者なの」
「……」
錨はマシンガンを掃射した。「・」の数だけ文房具が砕けた。
と、突然錨の体が消えた。彼は消え際に調子よく手を振る。
「ちっ。早漏野郎（ショートスリーパー）が」
ドクターがメスをちらつかせて毒づく。
「苺は？」
「まだみたいね」
「じゃあ、『主観世界（インナー・ワールド）』の旅にでも出ようか」
「旅？」
「テーマは弱点と長所だな。ヒアウィーゴー！」
サイレント・ドクターはダンサーのように派手なターンを決め、人差指をパチンと鳴らした。
夢の中の世界は、ドクターの力によって大きく改変されてゆく。小山文具店は元に戻り、昼間集まったようにちゃぶ台にフルーツ羹もかりんとうも再現された。
「ん？」
目がチカチカする。なぜだ。高橋は目をしばたたかせる。世界のディテールが、異常に細かいのだ。
「これは……」
「これが、俺の見てる世界」
文具店の畳の目。ちゃぶ台の木目。フルーツ羊羹の中の苺の種まで。文房具の一つ一つの形と色、古びた印字ロゴ、積もった埃の一つ一つの形。銅版画のような、詳細で綿密な世界であった。
「……酔う。VR酔いとか3D酔いに似ている」
「ハハハ！　有難う！　いい感想だ！　4Kとか8Kとか目じゃないぜ！　百万Kとでも言うかね？　俺には世界はこのように見えている！」
足を一歩踏み出すにも、針の穴単位で足の指の位置を決定しなければならない。手を出すにも、空気のひとつひとつの粒子を掻き分けなければならなかった。
「俺は現実で言葉を発することが出来ない。そういう病気なんだ。でも現実で言葉を発しないからといって、心の中で発していない訳じゃない。普通の人と同じように考え、悲しみ、喜び、悩んでいるんだ。だから他人の『心の中』と会話したくて、俺は肉体を切り刻

むようになった。体の中に言葉がある筈だと思ってね！」
小山が文具店から表に出てきた。
「儂の世界は、分りやすいかな」
小山文具店の周囲の住宅街が、にょきにょきと伸び始めた。ガードレール、標識、街路樹、家、文具店の棚、番台。すべてが同じ比率で大きくなった。道のブロックは倍の大きさになり、全ての建物は遠ざかってゆく。全てが大きな世界。高橋は見回す。
「もしかしてこれ……小人の世界」
「その通り。ここは、『届かない世界』さ」
小山はウィンクし、掌に光の槍を握った。雷が落ちる前のような、静電気が集まる感覚が起きる。
「儂はいつも手の届かない世界に住んでいる。それが儂の弱点さ。だから儂の武器は、どこまでも無限に届く槍」
英雄の槍（ゲイボルグ）が伸びる。文具店の棚の一番上をぶち抜き、二階屋根をぶち抜き、雲をぶち抜き、太陽を突き抜いた。
千波が空中に浮き、洪水を発生させて世界を変える。
「私の世界はあまり面白くないけど……」
広がるのは砂漠だった。隆起した砂丘に静かに風が吹き、人っ子一人いなかった。
「車椅子の体で、本ばかり読んでたから。本の中の世界の方が私にとって、ほんとうの世界に見えたの。私の現実はこの砂漠」
砂丘の向うに海が見えた。暖かい波はうねり、呼吸をするように胎動していた。
「水は嫌いだけど、海は好きよ？　だから遠くできらきらしてるの」
その砂漠の向こうからドスドスと足音を立てて、巨体が走ってきた。
「ごめんごめん。ちこくちこくうー！」
いつの間にか世界は小山文具店に戻っていて、苺は大口をばくんと開けた。
「美食家（グルメ）参上！」
とりあえずガードレールを食べた。文具店の傾いた柱を食べ、古い木の看板も食べた。シャッターの店、商店街の幟、停めてある車、通行人。なんでもかんでもばくばく食べた。
「グレービーソースかわさび醤油が欲しい！　せめて塩コショウ！　あっこんな所に豚足が、って私の手かー！」
美食家（グルメ）がぶるぶると震えると、二人の苺へ分裂した。二人の苺は四人に増え、八人、十六人、三十二人に増えた。苺の中から苺が出てきて、苺の頭の中から苺が「よっこいしょ」と出て来た。分裂した苺たちは、着ている服も、スタイルも、顔つきもメイクも違っていた。同一人物だといえばそうだし、別人といえばそうも見える。
幼い顔つきの少女が、高橋の手を引いて言った。
「わたし桜桃（チェリー）。遊ぼうよ！」
「セクシーに生きてる？」と、ハーフパンツから桃尻を見せた桃（ピーチ）が言い、
「全くはしたない。理性を持ちなさい。私はこの幼稚園のような人格学園を統括する理性、葡萄（グレープ）と申します」と落ち着きのある人格者が挨拶する。
「ひゃっほう！　走るぜ！」と同じところにいない蜜柑（オレンジ）もいれば、「こんな糞みたいな集団で何が出来るんだ！」と毒づく檸檬（レモン）もいる。

「……どうせみんな死ぬのよ」と悲観的な梨(ペアー)を、「マインドマップで頭を整理しよう！知性が世界を救うぞ！」と前向きな知性林檎(アップル)が慰める。ほとんど素っ裸の美女が高橋を誘惑する。

「坊や。現実ではお姉さんみたいな人とした事ある？」

「こら！　芒果(マンゴー)！」

苺が彼女をたしなめた。四十八人はばらばらに歩き始め、一斉に振り返って大口で笑った。一人ひとりが彼女でもあり、全員で彼女でもあった。

「私の世界はこんな感じ」

通行人の足が急に速くなった。空は早回しのように雲が飛び、太陽が沈み、また昇った。

「私は世界から遅れている。私は世界を味わうのに『足りない』と思っているのね。何もかも喰らい尽くしたいし、でも一人じゃ無理なので、二人で食べよう、三人で食べよう、……ってなって、四十八人に増えたっぽいのよねえ」

四十八人の影は重なり、一人に見える時もあれば、バラバラに見えることもあった。

「大体分ったろ、高橋チャン！」

ドクターは高橋に言った。

「俺達の武器は、何らかの心の傷、人に見せたくない部分、闇の裏返しで出来ている。だからお前は強力なファイターになるだろうさ」

「強力な……ファイター？」

「谷が深いやつは、山も高いさ」

「……」

高橋は戸惑う。俺の闇は深いのだろうか？　自分は世界一不幸で、世界一闇を抱えているか？　高々おっぱい廊下をコレクションするほどの、ただの現実逃避エンジニアに過ぎないのではないか？

夢は無意識の世界で、全ては無防備に伝わる。この戸惑いも、皆は感じたのか？

高橋は全員を見た。四十八人の美食家(グルメ)、サイレント・ドクター、光の巨人、水の魔女。そして、轡了。一人多い。

「え？」

皆の輪の中に首を突っ込む、無邪気な少年のような男が混じっていた。

「ねえねえ！　みんなで何やってんの？」

凶弾は、思ったより早く放たれた。

全身に寒気が走った。総ての毛が逆立ち、全身の血が沸騰する。身体が、勝手に警報を鳴らしているようだ。思わず皆飛び退いた。

「轡了！」

6

夢の中では時折風が吹く。それは誰かの記憶なのだろうか？　それとも誰かの意思なのだろうか？

轡の長くウェーブの利いた髪は、サラブレッドの鬣(たてがみ)のように靡いていた。時が進むのが遅く感じる。心拍数が上がる。瞳孔が開く。魔槍のチャージされる音、洪水の音、メスを

擦る金属音。四十八人が口を開いた。轡を囲む殺意は五十三。
「仮面を！」
千波が叫んだ。全員、一斉に白い仮面で防御する。
「俺の無意識に入ったのか！」
高橋が白い仮面の奥から叫ぶ。
轡は、渋谷で待ち合わせをしていた女子高生のように手を振った。
「久しぶりだね西尾（ニシオ）くん！　あれからどうしたかな、って思って、会いに来たんだよ！」
轡は三百六十度ゆっくりと見渡す。リーダー――千波を見て、嫌な顔をする。
「なんだ、お前が……いたの」
「……久しぶりね」
千波はターコイズの津波を轡に投げた。
轡はポケットに手を入れたまま、微笑むだけでその海を二つに割った。水しぶきで濡れる髪は、ぞくりとする色気を放つ。
「今のあなたの仮面（ペルソナ）は、そんな顔なのね」
千波は表情ひとつ変えずに聞く。
「お前が言ったんだろ？　仮面こそが本性。たまには変えてみたら？　千波」
「私の本質は、変わっていないので」
轡を攻撃する手段が自分にあるか、高橋は考える。街を改変して、ビルをぶつけられないかと企む。やつが視線を外したら、背後から行けるか。空に飛ばれたら？　追えばいい。
「ん？」
轡は高橋の気配に気づいたのか、高橋の目をじっと見た。
「西尾（ニシオ）は偽名なんだ。本名は……高橋巧っていうんだ！」
「無意識が漏れてる！　仮面を！」
高橋は千波の指示で、何枚も白い仮面を被る。無意識の中では無意識は伝わる。隠せ。真意を隠せ。二度と覗かせるな。
光の巨人が槍で刺した。だが轡はひらりと躱す。美食家（グルメ）が背後から襲い掛かるが、轡は宙に逃げた。
「今か！」
高橋は街を改変し、ビルからビルを生やした。
巨大高層ビルが轡を殴り、ゲームのように轡が吹っ飛ぶのかと思った。だが轡はビルに掌を突き出しただけで、直前でビルは止まり、後ろの質量はその勢いのまま直進した。つまり高橋の投げた高層ビルは、轡の目の前で平らな何かに圧縮された。鉄骨が砕け、コンクリがへしゃげる。
「面白いことするじゃん！」
ビルの粉塵を浴びながら、むしろ轡は楽しんでいるように見える。
「東京タワーや渋谷を壊したのは、あなたね？」
千波が轡に尋ねる。
「ぼくじゃないよ！　実行犯は澤田さん」
轡は掌を上げる。赤い鉄骨が地面から生えてきて東京タワーになり、ニュースで見た映像のようにゆっくりと倒れてゆく。

「何が本当の目的？」
「目的？　……じゃあ聞くけどさ」
　轡は時々ぞっとするほど冷たい笑みを浮かべる。美しすぎて心が切り裂かれるような笑みだった。
「君たちの人生の目的はなに？　君たちの人生は、何のためにあるの？」
「……は？」
「美人の闇って知ってる？」
　轡の顔は少年の顔に戻り笑った。くるくると顔が変わるように見える。
「彼女たちってね、昔から美人だから面倒くさい男にいつも絡まれてるんだよね。絡まれることが人生の前提になっている。だから実はいつも闇を抱えているんだ。その中でも信頼できる男と早くからくっつくんだけど、それは保護先を見つけることで防波堤を探しているだけなのさ。結局誰かに求められるばかりの人生しかなくて、本当の自分は何を求めているのか実は考えたこともないのさ。防波堤の外に出て何をするべきか、人生の目的がないことに気づいて愕然とする。彼女たちは誰かから定義ばかりされていて、自分で自分を定義できない。定義しようとしたら、『そんなことするのは勿体無い』と必ず誰かに止められ続けてきて、そのうち諦めてしまう。だからぼくは彼女たちに『自我』を与えたんだ。きみたちは神に会う為に生まれて来たんだって。今がその時なんだって。そしたら彼女たちは喜ぶのさ。人を喜ばせることはいいことだよね？　生まれてきた意味が分かるんだから、そりゃ喜んで死ぬよね」
　この男は何を言おうとしているんだ？　皆戸惑う。
「人は目的がないと闇に落ちる。ぼくは、人の心を奥底まで知りたい」
「……それがテロの目的？」
「いいや」
　轡は首を振る。その仕草は無邪気すぎた。
「お金儲け。土地を開発したい誰かを、ぼくの友達、衛本が見つけてくるの。ぼくらは街が壊れるのを見て楽しい。その土地を開発したい人は儲かる。投資家は先にその情報を得て大儲け。爆発する美女もたのしい。ウィンウィンでみんなたのしい。その遊びに高橋くんを誘いに来たのに、なんでお前がいるんだよ、千波」
　突如、空中からマシンガンの音が鳴った。
　上からジョーが降ってきたのだ。
「二度寝したんや！」
　天空から何百発もの銃弾が轡を貫き、その孔からことごとく赤い血が弾けた。それは小さな爆発を起こし、言葉となった。
「ぺらぺら」「しょうもないこと」「喋りやがって」
　轡は失望した目で高橋を見た。赤い血で染まった哀しい顔が、赤い涙を流しているように見えた。その恐ろしい顔を、高橋は一生忘れることが出来ないだろう。
「友達じゃなかったのか、高橋君」
　轡は血塗れの左手を、真下に向って下げた。
　突如、全員の足形だけ地面を残し、全員が宙に浮いた。雲の高さで海が見え、眼下に日本列島が見える。いや、浮いたのではない。全員の足形の地面だけ残して、それ以外の

世界を下方に押し下げたのだ。
「え？　え？」
全員が戸惑う。足を動かしたら落ちる。思わずその恐怖に縛られた。
轡は後ろに身を投げ、雲の中に消失した。

何が起こったのか？　夢から飛び起きた高橋は頭をフル回転させる。
轡は俺の夢に入った。皆の明晰夢、共通の明晰夢ではなく、俺の夢に入ったのだ。これで皆と会ったことになる。つまり皆は汚染されたのだ。静尾、小山、錨、苺、もう誰の夢にでも、轡は入れるのではないか？
布団の中で高橋のスマホが鳴った。錨からの直電だった。
「高橋（タカハーシ）！　ニュース見たか！」
短時間睡眠者（ショートスリーパー）は夢から覚めるのも早いのだろうか？　考える間もなく、ニュース映像を見て高橋の考えは停止した。
『渋谷駅大陥没、爆発物か』
ニュースキャスターが変な汗をかいて喋り続けていた。
「地下に張り巡らされた東急渋谷駅がまるごと陥没し、渋谷の巨大な穴となってしまいました。複数の目撃者が複数の爆発音を聞いており、警察は事故と事件の両面から捜査中です。東急渋谷駅は再開発に際し、メトロ線やＪＲとの連絡動線に設計ミスを指摘されていました。百万人の足が、復旧まで影響を受けると見られます。政府官房長官は、先日の東京タワー崩落事件との関連を鑑み、厳戒体勢宣言を出しテロ強化対策を取ることとしました。明日から以下の路線で荷物検査があります。東京メトロ全線、東急全線、京王井の頭線全線……」
地下道という地下道がひしゃげ、地下ホームの一部も見えた。地下のシンボルだったコンクリートの半球（ドーム）は、上からの重量物でぺしゃんこに割れ、辺り一帯がそれに引き込まれている形となっていた。コンクリで固められた渋谷川は氾濫し、その巨大穴へ注がれる汚泥となっていた。
高橋は目が覚めたばかりで、混乱している。立花涼子、東京タワー、そして渋谷が永久に失われた世界に、俺はいる。それは少し前まで、いて、あって当たり前で、永久に存在すると思われていたものだった。また寝て起きたら、違う世界で目覚めてしまったような感覚に陥る。

7

「だから轡に接触した奴なんか、メンバーに入れるべきやなかったんや！　オレ、反対したよな千波サン！」
錨はちゃぶ台を拳で叩いた。折角小山が淹れた旨い茶が、湯呑みから零れる。
「オウ、高橋君（タカハーシ）！　えらいことになってしもたやんけ！」
既に全員集まっている小山文具店に、高橋は遅れて入った。
千波は落ち着いて反論する。
「遅かれ早かれこうなることは覚悟してた」

「どういうことや？」
「轡と明晰夢で接触した高橋君は、いつでも繋げる状態にあった。その『縁』を辿って轡が来れば、おびき出せると思ってたので」
「高橋（タカハシ）を、利用したんか」
「言葉は悪いけどね。でも単に繋げるだけなら簡単に出来たけど」
「？」
「元々、私と彼の夢は繋がってたし」
「そういえば」
高橋が割り込む。
「あいつと千波さんは、旧い知り合いのようだったけど」
「昔、少しだけ付き合ってたので」
錨と小山が茶を吹いた。
「聞いてへんぞそんなん！」
「私が彼の夢に侵入しても、殺意がバレバレになるでしょう？　高橋くんなら、一瞬油断させられるかなと思ったの。でも殺意は伝わってしまった。次は轡も警戒するでしょうね」
「……じゃあ、千載一遇のチャンスを棒に振ったってことやんけ」
「……残念ながら」
小山は茶を拭きながら言った。
「正直なことを言うと、儂は怖かったよ。現実で人を殺したことなんかないし、夢で殺す『人』は架空の産物で、本当の人じゃないし。ゲームじゃないんだ、本当に殺すと思ったら……二の足を踏んでしまった」
黙ったままの静尾を見る。ドクターもそう思っているだろうか。
苺は差し入れのバター餡子饅頭を三個口に入れた。
「私も、怖かったわよ。そのへんの通行人を食べるのは訳ないけど、本当の人間の、懐の距離に入るのが怖かった」
「高橋（タカハシ）はビルぶつけたやんな？」
「てんで潰された。俺の方が『世界を改変する力』があると思ってた。自惚れだった」
苺にバター餡子饅頭を薦められた。しっとりとして口当たりが良く、脳の疲れに効く味だった。静尾は黙ってちゃぶ台を眺めている。
「けっ。何が世界を救うヒーローや！　ドリーム戦隊ビビリマンやんけ」
小山が茶を飲み、一息つく。
「フォーメーションを組むべきかな、と考えた」
「フォーメーション？」
「バラバラにやるより効率がいいだろ。たとえばドクターのメスは相手の懐に入らんと届かん。そこまで巨人の儂が届けるとかだ。得意技を組み合わせるんだ」
「それでもビビりは無理やろ」
「次は躊躇わない。『夢の中で思うことは実現する』。……いいわね？」
千波が改めて確認する。ようやく差し入れを一口食べ、「美味しい」と苺に言う。
苺はさらに饅頭を五個ほおばり、高橋を見た。
「高橋君は知らないから、ここで言っとくわね。愛する弟の話」

「弟？」
「私には双子の弟がいたのね。この百貫デブとは違ってシュッとした、それはそれはイケメンで。二卵性双子だし私と全然似てないの。名前は昴（すばる）。名前からしてイケメンでしょ？　目がクリックリしてて背も高くて、もう私は溺愛してたのよ。将来どんな女を泣かすか心配で心配で。……でも命ってあっけないのよ？　果物ナイフ一本で終わるの」
「？」
「三年前の、新宿歌舞伎町。もしもタイムマシンがあるなら私はそこに行きたい。アイツの振り回したナイフを私が受け止めるの。脂肪で心臓に届かんでしょうとも」
「……それって……」
苺はうなづく。
「〈空飛ぶサークル〉のキャバ嬢が狂った通り魔になった事件。『殺せるなら誰でも良かった』なんて言いやがって。だったらあの子じゃなくて私にしなよう」
苺はぽろぽろと涙を流した。千波がハンカチを渡す。
「絶対同じ目に合わせてやるって誓ったのね。でも昨日四十八人に分裂して、果物ナイフ持ってないことに気づいたのよね。……今度からナイフ持って眠る。夢の中でもナイフを握れるように」
「……」
高橋はビルをぶつけてぺしゃんこにされた記憶を反芻する。自分はどうすればいいか。ナイフを持って眠るべきか？
「一番の得意技の方がええで。苺はナイフで刺して、それで解体して食うたったらええんや」
錨が言う。
「そうするわよう」
小山が出涸らしのお茶を注ぐ。
「……千波さんは、轡と……その、長かったのかね」
千波は窓の外を少し眺めた。
「恋人だった時間は二か月くらい。出会ったのはそれより何年も前。私たちは同じ大学で、同じ師に明晰夢の手ほどきを受けたの。もともと〈空飛ぶサークル〉は、轡が大学で立ち上げた明晰夢の研究サークル。轡は言葉巧みに女子学生を誘い、明晰夢の中で空を飛ぶと称してそれ以上のことをしていた」
若い男なら誰でもそうするだろうと高橋は思ったが、誰を弁護しているのか分らなくなり、言うのをやめた。
「轡が最初に、『夢の中で死んでもログアウトしない』に成功した。じゃあ二回死んだらどうなる？　と、興味はエスカレートする。でも死ぬのはみんな怖いから、中々うまく行かないわよね。第一明晰夢の中でそんなことをするのは馬鹿げてる。夢というのは人に与えられた最後の幸福な空間であるべき。私は師に明晰夢を教わり、『理想の自分』に戻ることが出来た」
「……」
「でも好奇心を止めることは出来ない。〈空飛ぶサークル〉の男女は、『夢の中で二度死ぬゲーム』に興じる。チキンレースみたいなものね。そして二度死ねた成功者が現れた。

彼女は轡のベッドの中で、朝目覚めずに発見された」
「二度死ぬストレスに、脳が耐えられなかったと」
「おそらく。彼女は私の、大学で出来た初めての親友」
「……」
「変死扱いで警察が検死したけど、心不全で処理された。事件性はないとして轡は無罪放免。たしかに裁く法律はないし、彼女がやったことだけど……。この事件でサークルは自然消滅。轡は大学を中退して行方不明に。それから十年過ぎて、〈空飛ぶサークル〉は謎のテロ組織として帰ってきたわけ」
「どの時点で付き合おうとったんや」
黙って話を聞いていた錨が聞いた。
「彼女の死の少し前に」
皆黙っていた。それぞれに事情があるだろうことは想像していたが、これほどとは高橋は思っていなかった。轡を二度殺そうとすることは、彼らに二度殺されかねないことと同じだ。
目的を与えた、と轡は言っていた。自分の人生の目的があるのかと、高橋は自分に問う。そんなものはない。ただだらだらと生きてきて、出来るならこのまま大過なく進めれば良かった。ただ、灰色の人生と桃色の夢に逃避することの繰り返しが、自分の本当の人生とは思えなかっただけだ。澤田さんは人生の目的がなかった。だから東京タワーを壊したのか？　立花涼子は？　彼女に人生の目的があったのだろうか？　それで何故テロ実行犯ではなく、自ら飛んで命を絶ったのか？　彼女は口封じされたのではないか、とふと思う。轡が美女の心を操り、命すら投げ出せるような力を持つのなら、涼子を殺すことは可能だろう。
年長者の小山が口を開いた。
「我々のゴールを決めよう」
皆は小山を見た。
「〈空飛ぶサークル〉のテロリズムを止めること。これは良いだろう。じゃあ、何をもってか、ということになる。きゃつらは明晰夢を利用していて、明晰夢のことが分るのは、あとは我々しかおらん。警察や米軍に話して信じてもらえるとは思わん。仮に信じたとしても、明晰夢が自由に出来るのは、我々くらいのものだろう」
「私は十年かかって明晰夢の才能のある人を探してきた。それでこの確率だと思う」
「そのサークルにどういうメンバーがいるのか分らんが、首謀者を説得して『テロを止める』と約束させる手だってある。しかし昨日の夢の中の彼は、そのような男ではなかった。そして、夢の中で二度殺せるかな？」
「夢の中ではなく、現実の肉体の逮捕とか拘束の手段はあり得るか？」
高橋が聞く。苺の代わりの人格、知性の林檎（アップル）が答えた。
「あ。林檎（アップル）です。苺は泣き疲れて眠っています。拘束しても、寝たらいくらでも夢の中で自由になれるので、意味はないかと。夢の中でも拘束し続けられたら別ですが」
千波が口を開いた。
「轡了の肉体の殺害という手もある」
さらに過激な手段を、千波が言うとは思わなかった。

「夢の中で勝てないかも知れないんだったら、本体を探して果物ナイフで刺す手だってある」
小山は文具店の棚を見た。彫刻刀、カミソリ、鉛筆削り用のナイフがある。
「轡了がそこにいるなら、迷いなく刺しに行きたいね。この身長で届くかは分らん。脚なら刺せるかな」
「私の身体が夢の中ほど動けば」
車椅子の魔女が言う。
「私の巨体で押しつぶせればねえ」と楽観的な蜜柑（オレンジ）が言う。
「走って逃げられたら終わりじゃんデブ」と嫌味な檸檬（レモン）が切り返す。
錨は見渡して言う。
「現実問題格闘ができそうなのは、ワシと高橋（タカハーシ）くらいか。夢ん中とどっちが勝率高いんやろ。千波サン、あの顔は仮面（ペルソナ）や言うとったな。リアルな顔はあれとはちゃうのか」
千波は学生時代の写真があると見せた。古い紙焼きの写真を、直接スマホで撮ったものだ。夢の中のギリシャ青年とは似ても似つかぬ、平凡な日本人顔だった。しかし笑顔に人懐こさがあり、これが人たらし、女たらしの才能だったのだろうかと思う。
「整形していたらもう分らない。おそらくそうして身を隠してるでしょう。電車で隣に座ったのが轡だとしても、誰も気づかない。あるいは、恐るべきテロリストとして誰かが要塞に匿って、強力なボディーガードが囲っているかも知れない」
「千波さんが俺の夢の風景から天王洲アイルを割り出したように、何か出来ないか？」
「そこまでうっかりするほど無知じゃないと思う」
高橋は思い出す。六本木で会った背の高い男。東京タワー上空で、轡の執事のように仕えていた巨漢――
「衛本なら、探し出せるかも」
「どうやってや？」
高橋はノートPCを開き、いくつかのエディタを立ち上げる。VimもあればEmacsもあり、雑食的な高橋のエンジニア性格を表していた。いくつかのライブラリを開いて確認する。
「監視カメラをハッキングする。画像解析をかけ、AIに身長185センチ以上をピックアップさせる。彼はそれ位あった。スキンヘッドだから目立つし」
「普段カツラ被って紛れてたらどうすんねん」
「確かに。スキンヘッドはチェック項目から外そう」
「日本に何人185以上がいるの？」
「分らん。しかし見れば俺なら分る。衛本だと。あとは皆で気づかれぬよう接触すれば、彼の夢とは繋がれる」
「高橋（タカハーシ）君経由で衛本の夢に侵入できるんちゃうの？」
「それぐらい皆の力が強ければだが」
「むむ。確かに、オレは会うたこともない人の夢にスルッと入れるとは思えんな。で、どないする？　それが出来たとして？」
「轡本体の居所を吐かせるのはどうだろう」
「成程、拷問か。現実の顔形も聞き出したい所やな」
高橋は言いながら、「戦う」ことに現実味がなかった。ゲームなら殺すとか死ぬとか簡

単に言える。ネットでは今日も氏ねとか糞とか、殺意が砲弾のように飛び交っている。夢の中はゲーム世界のようでゲームではない。既に我々は、ナイフを突きつけ合った。
あの時轡にビルをぶつけたのは、恐怖が先行したからだ。「これ以上考えたくない」と思って取った行動であった。死は誰でも怖い。その死を、あの男は一回耐えた経験がある。
相変わらず小山文具店の扉は少し開いている。いつでも離脱して帰っていい。それが千波の方針だった。
冬もこの習慣なのだろうかと、高橋は関係ないことを考えていた。

8

夢の中では皆が集まり、〈空飛ぶサークル〉の侵入に備える警戒態勢を取る。これは毎晩やるべきだと錨が主張し、皆は同意した。同時に、小山の言う「フォーメーション」を模索する。
小山は光の巨人となり、槍を構えた。
「遠距離から攻撃出来るのは、儂の槍とジョーのマシンガンだな。サイレント・ドクターと美食家（グルメ）は接近しないと何も出来ん。それまで先制は我々がすればよい」
「先に懐に入られたらどうするすんだよ！」
とドクターは息巻く。
「その時はアドリブでなんかするしかないでしょうよ」
千波が冷静に言う。
高橋は世界を改変し、小山文具店の文房具を集めて「轡」をつくりあげた。
「へえ、上手いこと出来てんな！　眉毛がボールペン、目玉はピン球、手がバットで指が鉛筆……」
白衣のドクターが感心する。
「疑似ターゲットとしてはこんなもんだろ。飛ばすぞ」
宙に「轡」が飛ぶ。
光の槍が唸りを上げて伸びる。しかし「轡」は空中でひらりと躱す。ジョーの弾幕が火を吹く。左肩に命中、文具が飛び散る。
「こういうことが出来るかも」
千波は空中に水の球体を出現させ、轡を水の中に捕え、地面に叩きつけた。ドクターがメスで解体し、美食家（グルメ）が果物ナイフとフォークで美味しく頂く。
「うん。悪くない。バリエーションを色々やってみよう」
小山はもう一度「轡」を高橋に要求する。高橋はビルと民家を合成し、光の巨人と同じ背の高さの「轡」を作り上げた。
「巨大ロボかよ！」
「こういうパターンも悪くないだろ」
高橋は十本の指で、巨人を操り人形のように動かす。
「むん」
光の巨人はロボ巨人と四つに組む。その右脚から右膝、肩と伝い、ドクターは宙に躍り出てメスで首筋を両断。ごろりと落ちた瓦屋根の頭部を、ジョーのマシンガンが地面に落

ちる前に粉々にする。
「いいわね」
千波が褒めた。
「決まったフォーメーションというより、こうやってアドリブで動かないと読まれるな！」
ドクターが空中から叫ぶ。たしかにそうだ。無意識は繋がっている。皆の考えていることはなんとなく伝わってくるし、轡の意識とも繋がった気がした。
「しかし轡は、『魔境』を使えるわ」
千波は耳慣れぬ言葉を使った。
「魔境？」
「そのネーミング自体はどうかと思うんだけど、西洋の瞑想（メディテーション）では既にmakyoで既に定着した言葉。古くは禅病、最近だと瞑想中毒とも。中国気功では偏差といって戒める。走火入魔という精神病の前駆現象とね。釈迦が菩提樹の下で瞑想中、天狗や魔がうろうろしたのも魔境に入ったからだと言われてる」
「それは……悪夢みたいなもの？」
「そうね。人は、いつ悪夢を見るか分らない。轡は、人の『背中』を見てトラウマや恐怖心を知り、それを魔境として出現させるわけ。ただし、魔境を克服する方法は、既に釈迦が解決済み」
「え？」
「無視すること。それが正解。悪魔や天狗や地獄は、我々の脳の暗部が作り出した幻想に過ぎないから無視することだと。そうすると魔境に入らなくて済む」
「えらく現実主義的な手段だな」
「地獄や悪魔がほんとうに存在するかは分らない。ただし変性意識中に見るそれは、我々の無意識の主観の具現化の可能性が高いということ」
「金縛りが悪霊に見えることと似ていると」
「そうかも」
高橋は世界を改変した。
街が割れ、「ダンテの地獄門」が現れた。
黒い七十二の悪魔や骸骨の形でつくられた、巨大な地獄の入口だ。精巧な出来で、ドクターは感心した。
「イイネ！　『魔境』っぽい！」
「和風にしてみるか」
その門は開き、八大地獄が口を開く。等活（とうかつ）地獄、黒縄（こくじょう）地獄、衆合（しゅごう）地獄、叫喚（きょうかん）地獄、大叫喚地獄、焦熱（しょうねつ）地獄、大焦熱地獄、阿鼻（あび）地獄。幽鬼の如き青鬼が、死者に鞭打つ光景。
「俺の武器は、世界の改変力かも知れない」
高橋は得意げに語る。
「いわば、改変者（トランスフォーマー）」
「成程」
そう得意がりながら、高橋には違和感があった。
ほんとうにそうか？
これは借り物の地獄で、ほんとうの地獄ではないのではないか？　じゃあほんとうの地

獄、魔の棲む領域とはなんだ？　魔とはなんだ。ほんとうに辛い「俺の地獄」とはなんだ。
そこはグレイの、会社のフロアだった。
押し黙ったグレイのスーツたちが、グレイのＰＣを叩き続けている。そうだ。千波さんは長所は弱点の裏返しだと言った。
「俺はこの魔境から逃れる為に、こんな風に世界を改変させていたんだ。それが俺の弱点だ。俺は、その弱点を皆に晒さなければならない」
高橋は両手を挙げ、美術館の廊下と赤い絨毯を出現させた。両側に、次々と火が灯るように無限のおっぱいが現れる。
「ほほう」
「スゲエ！」
「……」
男子たちはその乳房たちのディテールに興を上げ、女子たちは眉をひそめる。
桃色の女体たちが現れ、地獄門に乗り替え、女体桃色門を作り上げる。
「俺は現実が辛くて、夢の中で性欲だけを爆発させていた男だ。それが俺の弱点か。俺は現実で恵まれていない。だから世界をいいように改変する」
高橋は天地創造でもするように人差指を天に立てた。空が割れ、ビルが逆さまに生え、地獄門に呑まれて桃色門が増えた。桃色の肉体たちは悪魔の断末魔の代わりに喘ぎ声をあげた。
「おそらくそれは違うわ」
千波が冷水を浴びせるように否定する。
「何？」
「それが轡の出現させた『魔境』？　それは多分違う。あなたにとって本当の悪夢じゃないみたい。轡が出した魔境は何？　あなたはまだ仮面を被ってる」
轡の魔境？　轡が出現させたもの？　心にかけた鍵が開くように、高橋の中に谷が現れる。
そこに何があった。闇だ。そう、後ろを振り向いたら、そこは東京タワーではなく、闇であった。
悪夢が始まっていることに高橋は気づいていない。悪夢がどのように発生するか、その機構はあきらかではない。いつ人が死ぬのか、いつ人が足が竦むのか予想できないようにだ。人は恐怖するとき、恐怖する。
闇の中に目が現れた。四方から無数の目が、高橋の本質を覗こうとする。やめろ。俺を見るな。俺を覗きこむな。俺を査定して見積もるな！
「いかん！」
ドクターが叫ぶ。
「それが魔境！　無視して！　無視するの！」
千波が叫ぶ。
小山が槍を構え、闇に放った。だが光の槍は、虚空に消える。恐怖の「力」の方が強いからだ。
闇は無限に広がる。目たちは渦を巻き、銀河になった。銀河は増え、銀河と銀河は重力で引かれ、融合して反発する。その全てが他人の目であることに、高橋は吐き気を覚え、

うずくまる。
「高橋君！　飛んで！　飛ぶの！」
千波の声が聞こえた。飛ぶ？　どうやって？　人が飛べる訳ないだろ。手を広げて？　羽ばたいて？　昔の珍発明みたいに翼を装着して？　エンジンを発明するまで飛べなかった人間が、どうやって身ひとつで飛ぶんだよ。
高橋の身体は落下をはじめた。下にも闇が広がり、真下にも銀河たちが衝突している。
手をかざす。世界は改変され、目はビルたちで遮られた。だがそのビルの窓からすべて目が覗いた。目は窓たちからにゅるりと飛び出て、高橋を見続ける。ビルを飛ばす。家を飛ばす。無数の目たちは窓を抜け、障子の升目を抜けてくる。
「高橋君！」
「高橋！」
「飛べ高橋！」
闇の中に、ぼう、と光の天使が現れた。翼の生えた轡だ。笑っている。目に囲まれて背中を向けている高橋を笑っている。涼子が笑う。澤田さんも笑う。どうせこんなもんだろ。笑え。笑うな。
無視する――さっき言われた対処法なんて効く訳がない。俺は自分の弱点を正視しないことが弱点なんだぞ。それをのほほんと無視できるとでもいうのかよ？　高橋は目から逃れようと体をよじった。轡の笑う顔から逃げようとした。下に落ち、上に飛び、左に回転し、右に振り向く。まるで目のベッドから逃れるように。
その時突然、高橋には「視線が見えた」。つまり、化物のような目たちから、ゆっくり光線が放たれ、自分に向かってゆっくりと進んできている様が見えた。脳が恐怖で高速回転を始めたのだろうか。走馬灯とはこれか。人は死ぬ時走馬灯を見るという。死に際して脳の回転数が上がり、過去の記憶から生きる手段を探す為という仮説がある。俺は死ぬのか。何故現実で目覚めない。死ぬのか。一度死ぬのか、夢の中で。
その飛んで来るビームを、順番に躱せばいいのではないかと高橋は思った。上半身を右にひねって、左、下に潜り、上に。頬をビームが掠め、焦がす。まるで何かのゲームだ。赤外線報知器の赤いビームを抜け、宝石を目指す怪盗のようだ。報知器のビーム。視線のビーム。それを避ければ、お前たちには見えない。
視線より速く俺は飛ぶぞ。遠くへ。速くだ。
光より速く俺は飛ぶ。遠くへ。速くだ。
俺は、恐怖の届く速度より速い。
衝撃波が飛んだ。何もかも加速した。高橋は赤方偏移している光景を見た。つまり、光は高橋の後方に遅れてあった。
「ハアッ！」
ドクターは感心する。
「アイツ、『光』を振り切ったぞ！　なんてこった！」
小山は光の槍を投げた。
高橋はその光の槍に追いつかれても、それより速く飛んだ。むしろ速度を落として、その上にサーフィンするように乗っかって見せた。
「ジェット」

ドクターが言った。
「奴の二つ名はジェット！　誰よりも飛ぶのが速いぞ！」
「ジェットじゃ音速だろ。彼は光よりも速いんだぞ」
小山が突っ込むと、千波が言った。
「ハイパー光」
「ダッサ！　千波さんダッサ！」
「じゃあ何が良いのよ？」
千波は少女のようにむくれる。苺が色々考える。
「電光石火。レーザービーム。弾丸（バレット）は錨くんと被るし、どれも光速越えじゃないし……」
「エスケープＥＸ」
「千波さんダサダサですよ！」
ジョーがマシンガンで言葉の弾丸を放った。
「光より速く飛ぶ男（ファスター・ザン・ライト）」
千波がうなづく。
「いいわね」
ドクターが言う。
「うん。……しっくり来る」
苺もうなづき、小山も納得した。

「彼の名は、ファスター」

ベランダで朝の空気を吸いながら、高橋は煙草に火をつけた。物理法則通りに、紫煙がゆっくりと立ち上る。勿論これは光の速さを超えることはない。ここは現実の世界で、俺は物理法則を超えられない。今日も物理の速度で灰色の街が目覚め、物理の法則で動き始めている。
誰よりも速く、妄想世界に飛ぶように逃げる男。それが俺の二つ名「ファスター」。紹介しよう。光より速く現実から逃げるヒーロー。それが俺だ。
「……ふん」
空の王は、逃避の王であった。武器は弱点の裏返し。それってつまり皮肉ではないか。高橋は一人で笑う。こんな奴に、一体何が出来るというのだろう。
煙草の火は、ゆっくりと灰を生んでゆく。救急車のサイレンが遠くで響いている。それまでだったら気に留めることもなかったと思う。ただ煩く思い、サイレンが収まるまで待っているだけだった。だが今は、その救急車にテロで巻き込まれた人が乗ることや、その命を助けようとする救急隊員が乗っていることが想像できた。
誰かが危機にいて、誰かが救おうとしている。そんな世界を、高橋は生まれて初めて美しいと思った。

RustとPythonとGolangを組み合わせてつくった奇怪なコードが、沢山の画像を抽出している。画像から正確に身長を測ることは出来ないが、通り過ぎる人々の身長を平均すれば、日本人の平均身長におおむね収束する筈で、その差分から推定するスクリプトだ。一週間で、沢山の大男が引っかかった。おそらくは東京中の大男たち。だが六本木で会った衛本なる人物はいなかった。

顔を整形したのか？　東京にいない可能性を考え、地方にカメラの範囲を広げた。マシンパワーが必要だ。使っていない（アイドル）ＣＰＵをネットワークから探すコードを組み、ハックして演算タスクを肩代わりさせる。たとえば漫画喫茶のＰＣは使っていないときは殆ど動いていない。単純演算だけ肩代わりさせて並行ネットを組む。流石に外国まで監視網を広げるべきかと次の手を考えていた頃、沖縄に引っ掛かる画像があった。

沖縄基地移転反対を訴える市民集団を、金網の前で制する自衛隊員たち。その中の一人——画像は不鮮明でも、一度会った高橋には判別できる。ボディビルダーかプロレスラーかと第一印象で感じていた。衛本笑（しょう）と、フルネームを思い出した。

「軍人か」

一行は、沖縄へ飛んだ。

太陽の光は真白く、日陰と風は涼しい。

影が青い。影すらも空を反射する。

「南国って感じやなァ！」

錨がはしゃぐ。

「本場の豚足（テビチー）食べたい！」

苺が鼻を鳴らす。

「車椅子で旅行なんて、不思議な気分」

静尾に車椅子を押された千波が、海を見ながら言う。彼女の茶色の瞳が、強い太陽の光を透かしている。

小山はオリオンビールを片手にするめを食べていて、高橋はそれにつきあっていた。

「慰安旅行じゃないんだから」

苺のツッコミに、小山は缶を天に掲げて笑う。はしゃいだのは、これから待っている恐怖を想像できたから。

「基地移設反対！」

シュプレヒコールに混ざり、一行はデモ市民の中に紛れ込む。顔が割れないよう変装したが、少々やりすぎだったかも知れない。だがこの顔から元の人間を想像することは不可能だろう。基地の金網の向こうに、透明の盾を持った自衛隊員が警護している。

「いた」

高橋はプラカードの後ろから、五人に衛本を指して示した。カツラは被らず、スキンヘッドのまま仕事をしている。高橋を除く五人は、彼の目の前まで行き、金網越しに会話を試みた。

「あんちゃんたちも大変やねえ！　暴れへんから安心してな！」

錨がマシンガントークの口火を切った。
「……仕事ですから」
衛本は事務的に答える。
「ご苦労さんやな！　あんちゃんどっから来はったん！」
「基地名は機密です」
「ワシ大阪や！　言葉聞いたら東京の人みたいやけど？」
「出身は横須賀です」
「沖縄までわざわざ！　お疲れさんや！」
関西弁の図々しさは、懐に入るのには都合がいい。千波も静尾も小山も苺も、「衛本」という人間に「会った」気分になる。
「……これで彼と接触したことになるん？」
錨は小声で千波に呟いた。千波は頷く。
千波は車椅子の上から彼に握手を求め、袖すり合う縁を結ぶ。錨もベタベタ衛本に触り、小山も苺も静尾も、群衆のもみくちゃに紛れて触った。

「夢の時間を合わせましょう」
千波が言った。
同じ時間に眠れば、六人はシンクロしやすい。それはこれまでの訓練から分かっていたことだ。
「その時に奴が寝ている証拠は？」
高橋が疑問を呈する。
「ない。けれど、厳密に同時刻に眠ってなくても、明晰夢は繋がることは分っている。『無意識』と関係があるのかも。ある程度のラグは許容するみたい」
「ほんじゃ、作戦は決まったということで！」
錨が陽気に柏手を打った。
「今夜はとびっきりの沖縄料理やで！」
沖縄専門のロケ班に聞いて、上々の店を調べたという。
「豚足（テビチー）ある？」
苺が真っ先に聞いた。
「勿論や！」
「残波（ざんぱ）飲みてえ」
小山が呟く。
「勿論や！」
「海葡萄と耳ガーは？　あと豚バラ（ラフテー）も食べたい」
千波が思わぬ食欲を見せた。
「千波サンってそんなキャラでしたっけ？」
錨がおどけると、千波も答える。
「だって合宿旅行みたいなんですもの」
いたずらっぽく微笑む顔は、夢の中の少女のようだと高橋は思った。
眠るまでのわずかな時間。これは最後の晩餐かも知れないと千波は言った。

「誰か死ぬかも知れない。なるべく死なないで。またこのメンバーで、どこかに旅行しましょう」

この店は、付け込んだ豚バラ（ラフテー）を少し焼き、焦げ目をつけた状態で出してくれる。千波が箸をするりと入れて肉と脂を裂いた瞬間から、六人の食欲が爆発した。

高橋は沖縄料理がはじめてで、色も香りも鮮やかな異国の食事に見えた。中身（ナカミ）汁はダシが効いてるし、ゴーヤーの苦味はむしろ好みで、海藻サラダからは潮風が吹いた。

「俺、初めてかも知れない」

軽くて深いオリオンビールを含みながら、高橋は呟いた。

「なにがや？」

「こんな楽しい部活みたいなやつ」

「人生の初心者か！」

突っ込んだのは、いつもの錨ではなく、それまで一言も喋っていない静尾だった。皆一様に驚いた。

「静尾クンが喋った！」

静尾は瞬きもせず、再び静かな微笑みの世界に戻った。

「そうか。夢での姿が本性だとすると、今外に出てこれないだけなんだよな？　ドクター」

高橋は静尾を理解する。静尾は静かに笑い、残ったラフテーをナイフで数学的に六等分した。

「おいしい！」「ウマっ！」「太るわよ」「今更増えても変わらんでしょ」「その分運動に使えばいいんです。やらないけど」「いいじゃないの。自分へのご褒美よう！」

桃（ピーチ）と檸檬（レモン）と葡萄（グレープ）と、龍果（ドラゴンフルーツ）と林檎（アップル）が、苺の肉体を借りて苺と会話する。

「人格が交代すると前人格の記憶がなくなるのが普通なんだけど」

千波が解説する。

「彼女は時々、統合と分裂が同時に起こる時があるのよ。大概たくさん食べてる時なんだけど」

「賑やかでええやん！　飯はうるさいほうがウマイわ！」

錨が笑う。

この時間が永遠に続けばいいと、高橋は思った。少しだけ、静かな時間が流れた。

一行は二手に別れ、別々の宿を取った。万が一「本体」を突き止められても、どっちかが生き残るようにだ。時計を合わせる。眠りにつく時間を決め、六人はそれぞれの部屋で、それぞれのやり方で、それぞれの明晰夢へとダイブする。

10

浮いているのか、落ちているのか分からない。

いつも夢に入るときはこういう感覚がある。空を飛ぶときも、実は上を向いているのか、下を向いているのか、どっち方向へ飛んでいるか分からなくなるときがある。周りの風景（地面がどっちにあるか）、頬や腕に当たる風の感覚で、自分の態勢を確認することが多

い。
真っ暗な世界だ。腕を、指を広げる。下から上に当たる感覚。
俺は今落ちている。夢の中へ？　衛本の夢の中へだ。
黒い雲のようなものが現れ、腕を掠めた。空を落下している。スカイダイビングだ。黒い雲がよぎる度に、皆が現れた。サイレント・ドクター、光の巨人、マシンガン・ジョー、四十八人の美食家（グルメ）、水の魔女。
高橋は両手を下に向け、真下の黒雲を観音開きに開いた。
視界が開け、眼下に巨大施設が見えた。急激に色が広がり、その派手な色に痛みすら覚える。
「何？　……遊園地？」
「にしては……色がバッキバキに派手だけど？」
遊園地はもともと派手な色使いであるが、その遊園地は常軌を逸していた。乗り物も地面も建物も蛍光色。オレンジにライム、レモンイエローにマゼンタやパープル。赤が輝き、コバルトブルーが踊り、オリーブが回転してシアンが散る。同じ色は同じ場所に留まらず、色は常に動き、模様を描いている。七色のシャボンのほうがまだ目に優しいくらいだ。時に放射状になり、渦を巻き、水玉模様（ドット）や勾玉（ペイズリー）、フラクタル模様になる。
「ＬＳＤ患者」
千波が冷静に観察した。
「なんだって？」
「サイケデリックって聞いたことあるでしょ？　これはＬＳＤ麻薬特有の、文様と色」
「参ったな。薬物中毒者（ジャンキー）か」
ドクター静尾が毒づいた。
「昔、覚醒剤中毒者の夢とシンクロしたことがある。おぞましい悪夢だった。皮膚の下に虫がいたぜ」
「ＬＳＤはどっちかというと、色や音のディテールがおかしくなるのよね」
低音ブーストされた赤いスピーカーが、ゴアテクノを流している。巨大な黄色い恐竜やピンクの赤いイルカが、群れになって飛んでいる。
六人はその大地に降り立った。
「極彩色の遊園地（サイケデリック・プレイランド）」
試しに高橋はこの遊園地を「普通の遊園地」のように改変してみた。だがただちに水色とオレンジとグリーンが襲い掛かり、それは空をも同じ色に染めた。
「目痛ェ」
ドクターは手の中からサングラスを出し、かけた。
「いたわよ」
苺が指さした先に、裸の筋肉が動いていた。
「うえええ」
ドクターが吐き気を催す。
全裸の衛本は、子供たちを犯していた。
少年も少女もなかった。子供たちは衛本の股間に貫かれ、衛本が果てるとゴミのように捨てられた。手から指から男根を生やし、同時に何人も犯し、同時に果てている。どろり

とした精液は、乳白ではなく、極彩色（サイケデリック）だった。
「人の性癖に文句は言えんが……」
高橋は呟く。
「現実に犯したら犯罪だけれど、夢の中で代償しているとも言える。むしろ健康的かと」
千波が冷静に分析（プロファイリング）する。
「それが奴の弱点？」
「分らないわ。性癖が弱点とは限らない。手掛かりになればと思って」
捨てられた紫や黄や黒やピンクの少年少女たちは、うず高く積まれ、極彩色の模様に同化してゆく。
「とんだ遊園地（プレイランド）だ」
高橋は両手を振り上げ、地面を改変して衝撃波を送り出す。挨拶代わりの先制攻撃。
衛本は気配に振り返る。筋肉質の左脚を上げて落とし、丸い衝撃波で地面の波を止めた。
「むう？」
全裸のまま、ゆらりと立ち上がる。屹立したモノはグロテスクにひん曲がっていており、蛍光ピンクやイエローが飴細工のように混ざった液体で濡れていた。
「なんだお前ら？　ここの住人ではないな？」
とろんとしていた衛本の目は、軍人の色を取り戻す。
「他人か」
光の巨人が槍を投げた。
「イージスの盾」
衛本が左手を構えると、手相を境にばかりと割れ、ミサイルが何発も発射された。質量保存を無視したべらぼうに巨大なミサイルが、槍を空中で迎撃する。富嶽を砕く最強の槍は、空中で四散した。
「ミサイル防衛網とは、流石自衛隊だの」
小山は舌打ちする。光の槍の次弾をチャージするが、衛本の動きは速かった。
「針鼠（ヘッジホッグ）」
衛本の立体的な筋肉の間から、無数のミサイルが生えてきた。ＡＩＭ―７空対空スパロウ、ＡＧＭ―１１４空対地ヘルファイア、８８式地対艦誘導弾、ブリムストーン、Ｒ―２７Ｋペルシアン・ガルフ、ＫＴ―１開拓者一号、ＡＳ３７マーテル。あらゆる国家の、あらゆる距離とシチュエーションに対応したミサイルだった。
「誰だお前ら！　人の夢の中に侵入してくるとは……！」
「一応止めるけど、自己責任で逃げて！」
千波は洪水を掌から起こし、流れる水による防御壁をつくった。弾たちは水の壁で爆発する。開いた穴は流れる水が埋めてゆき、水の盾は破れない。
「スゲエ」
高橋は流水の壁越しに溜息を漏らした。戦闘のビジュアルに圧倒されているのではない。人が、ここまで想像力を駆使出来ることにだ。
高橋は爆音を立てて宙に飛んだ。空からの攻撃を試みる。
観覧車まで飛ぶと、全てのネジを同時に急回転させて外した。紫色の観覧車はゆっくりと衛本めがけて倒れてゆく。

「ハッハー！　面白いやつがいるな！」
地上のドクター、小山、千波、錨、苺は宙に飛び、その場から散った。
轟音と共に観覧車は地上を直撃する。だが鉄骨と鉄骨の間に、衛本は笑みを浮かべて立っていた。
「見てから避けたのか」
高橋は全身に嫌な感覚が走る。あいつ、慣れている。
「じゃあこっちも飛ぶぞ！」
衛本の両脚のスタビライザが開き、ジェットを噴いた。十二Gの加速で垂直に飛び出し、空中で急停止すると、背中から金色のミサイルが二十四発出た。噴煙の軌跡を、両脚からのジェット気流が巻く。左右対称に巻く煙、天使の羽のように見える現象、エンジェルズフレアだ。
「ラ・ラ・ラン、ランドセルーはー」
衛本は狂気の笑みで歌う。
「その二十四発をひと筆書きしてやる」
夢の中では、想像力の勝る者が現実化できる。高橋は順番にミサイルの頭を叩き、次のミサイルに飛ぶ。爆炎より速く二十四回やれば天使の羽は大炎上である。
「ほほう」
全身から飛び出した火器を収め、衛本は笑った。
「東京タワーに来てくれた、西尾（ニーシオ）さんじゃないですか。遊びに来たので？」
「それは偽名だ。俺の名は高橋。いや、ファスターだ。〈空飛ぶサークル〉と敵対することにした」
「おやおやおや。いかがしました？　こっちのほうが面白いのに？」
「面白い？　何がだ」
「薬を無限に買えるほど金があるので」
衛本は空の色をピンクに染め、雲を緑に染め上げた。
「現実でも明晰夢みたいに、感度が百倍上がる。『使徒』を味見するのは私めの役目でして」
「使徒」が誰を意味するのか想像はつく。衛本の真下から光の槍が飛んできた。衛本はからくも避けた。
「会話をさせて途中に真下から。いい視線誘導ですぞ！」
真下から光の巨人が巨大化する。両肩には苺と錨が乗っている。二人は飛び上る。錨が銃弾をまき散らし、四十八人に分裂した苺たちは腕や足に喰らいつこうとする。
衛本の右手からガトリング砲が出た。錨の銃弾を全て空中で相打ちさせ、三十六人の苺に命中させた。
「苺さん！」
高橋が叫ぶ。残り十二人の苺は衛本に抱き着いた。
「まだ死んでないわよう！」
苺たちは笑って衛本の筋肉を喰い千切った。
「いでででで！」
衛本は身をよじり、空中で回転した。油のようなぬるりとした液体を出し、苺たちを振

りほどく。
「何よ！　私ともう少し抱擁プレイをしなさいよ！」
十二人の苺たちは臍を噛む。果物ナイフを十二人分出した。
「大丈夫、本体の苺がやられなきゃ、『死』じゃない」
苺は高橋にウィンクするが、どれが本体か、もはや高橋も分らない。
衛本を死の恐怖に陥れることが我々の作戦だった筈だ。だが衛本は戦闘慣れしている。恐怖どころか、むしろ楽しんでいる。
「落として！」
下から千波の声がした。極彩色の遊園地は、殆ど洪水に呑み込まれて沼となっていた。
「息が止まれば誰でも死ぬ！」
高橋は衛本めがけて体当たりする。衛本は避ける。しかし高橋はドクターを背中に乗せ、空中で離していた。宙に躍り出たドクターは、衛本のアキレス腱を切った。
「よし！」
切り裂かれたスラスターから鮮血が散った。駆動力を失った衛本は、沼へと落ちた。

水の中は静かである。ターコイズブルーの中は無音だ。そこへ衛本の巨躯が轟音と共に落ちてきた。千波が続き、衛本の首を絞め、文字通り息の根を止めようとする。
「死んで！　死んで！　死にたくないなら、轡の居場所を教えて！」
千波はそう叫んでいるのだが、水中ではそのように聞こえない。だがその表情と手の力から、本気だと衛本は理解する。
呼吸できなければ人は死ぬ。だが夢の中で呼吸しているだろうか？　今息を吸っているか？　吐いているか？　普段無意識で考えないことを意識させられ、衛本は急に息が苦しくなってきた。体中からミサイルを出す。水中用は持っていない。自分、海自じゃないので、誠に残念。苦し紛れに極彩色の血を口から吐いた。ターコイズの湖は七色の混ざる沼へと変わる。しかし首を絞める千波の手は緩まない。
死ぬかも知れない。その恐怖が衛本の喉元まで来た時、七色の沼が割れた。
「誰？」
この闘いを第三者が見ているとは、千波も高橋も考えていなかった。
極彩色とターコイズブルーが、ある所を中心に真っ二つに割れてゆく。その中心に、雷が落ちた。蛍光色だった空の色は、いつの間にか渦巻く黒雲でわだかまっていた。天使の梯子（エンジェルス・ラダー）が彼を光に包む。
「轡！」
〈空飛ぶサークル〉の神は微笑んだ。
「困るなあ。ウチのナンバー2を苦しめないでくれるかい？」
轡の掌から衝撃波が走り、衛本の首を絞める千波の両腕が飛んだ。
千波は悲鳴を上げる。両肩から鮮血が飛ぶ。死程のショックだろうか。おそらくそうではない。轡は知っているのだ。「ルールN」を。ギリギリに死の恐怖を与えるチキンレースを仕掛けているのだ。サイレント・ドクターが飛んだ。懐に入りさえすればメスで切り裂ける。マシンガンジョーが弾をばらまき援護する。
轡の左手、四指が飛んだ。

「惜しいッ」
鮮血のついたメスを静尾は舐める。
「一体ぼくらをどうしたいんだよ？」
轡は指の失われた左手を舐めながら訊く。
「色々計画してたんだけどね。シチュエーションが変わった」
水の中から千波が飛び立つ。腕の先を失った肩の血は、濡れたワンピースに広がっていく。ターコイズの瞳に殺意が燃えている。
「刺し違えてでも、あなたの息の根を止める。二回連続」
巨人が槍を投げた。轡は掌を向け、槍を頭から八つに裂いた。
その後ろに、高橋が隠れていた。
「！」
高橋はファスターとしての自分の使い方を、ずっと考えていた。ただ飛ぶだけなら、明晰夢に慣れていれば誰でも出来る。世界の改変だって、皆やっていることだ。自分の強味とは何か？　光より速い（ファスター）ことだ。回避には使えるだろう。攻撃に気づくことさえ出来れば、当たらない男になることが出来る。だがそれでは逃げるだけだ。有効な攻撃法をずっと考えていた。光より速い弾丸になる。それしかないと思った。
飛んでいる槍の後ろに隠れられるものかは、誰も知らない。だがここは明晰夢の中だ。思うことは実現する。飛ぶ槍の後ろから現れ、弾丸となったファスターは、轡の腹をぶち抜いた。
「やったか！」
だがそれは、轡をかばった衛本の腹であった。
内臓が噴き出る。黒い血がどろりと出て、極彩色の七色に変化してゆく。
「衛本、一回死んだな。もういいよ、起きな」
轡は微笑みを崩さず衛本の肩を抱いた。
「まだやれますよ！　死ななきゃいいんでしょ！」
衛本は腹を撫で血を止めると、もう一方の手で遊園地を改変してゆく。
下から鉄骨が生え、それらが有機的に組み合わさった。それらは物凄い勢いで流れ出し、上へ、下へと波のように揺れた。巨大ジェットコースターだ。一行は長い車両の上に立たされる。鉄骨の先は見えない。一行は急降下し、きりもみし、左右に急激に曲がる。
高橋は再び飛ぼうにも、コースが右へ左へ曲がる為、飛び出すタイミングを掴めない。細くて長い車両の為、横へ広がることも出来ない。巨人の小山は身を伏せるので精一杯だ。最前列にいたのは静尾。
衛本は笑い、右腕から出したガトリング砲で静尾を蜂の巣にした。
「静尾くん！」
全身から噴き出す鮮血は、静尾が一度死んだ証拠。
物言わぬ錨がマシンガンを乱射する。衛本はガトリングで全弾相撃ち。苺が静尾を抱き寄せる。
「痛え。死んだ。あと頼むぜ」
二対六。死者は一対一。数的有利は形勢有利ではない。
「アンタを食い千切る！　二回じゃすまないわよ！　何万回と咀嚼してやる！」

果物ナイフを向け苺は叫ぶ。轡は笑った。
「そろそろ背中を見せてよ？」
轡は額の中央を開き、禍々しい色をした第三の目で一行を見た。全員が一斉に白い仮面を被る。
「あっ」
両腕のない千波は、仮面を被る動作が出来なかった。実際のところ、思念で仮面を被ることは出来たのだろうが、「仮面を被る」という手の動作に紐づいて概念操作が行われる。その隙を突かれた。
千波の背後に「雪山」が見えた。ヒマラヤか、キリマンジャロか、誰も登山には詳しくない為、その山が何かは分からない。白い尖った山に、雪嵐がただ荒れている。頂上は白くかき消され、見る事は叶わない。
「ははははは！　それがお前の弱点とは！　『オリンポス』か！」
高橋は世界を改変した。
巨大なコンクリート壁を、線路の先に生やした。
一か八かの賭けだった。ジェットコースターは衝突し、凄まじい衝撃が全員をバラバラにする。静尾を二度殺す訳にいかないから、彼の体に覆い被さり、死ぬなら自分が、と賭けた。皆、一回は死んでもOKだろ。
遊園地はまだサイケデリックだ。衛本は死んでないらしい。
小山は首が飛んでいたが、体が首を拾い、取り付けた。
静尾は死ななかったが、高橋は激痛を感じた。脚がなかった。死んだのだろうか。いや、そうではない。まだ一回は死ねる。高橋はそう確信すると、轡めがけて矢のように飛んだ。
巨大な目が現れ、高橋を睨む。百の目が高橋を囲み、観察する。東京タワーから落ちた時と同じ状況だった。ない筈の足が竦んだ。
「ビビってんじゃねえよ！　『盾』の形に惑わされんな！」
ドクターが叫び、メスを飛ばす。巨大な目玉たちは切り裂かれ、血管は切れ、網膜は剥離した。「仲間」と呼ぶには浅い関係だったかも知れないが、一人では死んでいた場面をドクターに救われることになった。高橋はこれまで他人を信用してこなかったし、これからもすると考えていない。だがドクターのメスは信頼出来ると感じた。
ファスターの体は光の速度で轡の体を貫通し、真っ二つにした。
「一回殺したぞ！」
轡の上半身は、指が残った方の右手を空に伸ばした。
光が天から走った。遅れて轟音が響く。その音の意味が、最初は分からなかった。
静尾の体が黒焦げになり、手に握られた銀のメスを落としたとき、それが雷だと理解できた。
「静尾くん！」
千波が叫ぶ。高橋も叫び、静尾の倒れる肉体を支えに行った。
静尾は物言わぬまま、柱のように倒れるだけだった。抱き締めた高橋の腕の中で、炭のようになった静尾の体は、音を立てずに粉々になった。
夢の中で二度死ねば死ぬ。それがルールだ。
「何故俺を助けた！　何故！」

俺は光より速い男ではなかったか。何故雷が見えなかった。くそう！　くそう！
衛本が轡の前に出る。胸部を開き、ウィンチェスター・ウィリアムを次々とぶっ放す。
小山の光の槍がひとつひとつ落とす。
「衛本の弱点は、武器の反対」
千波は冷静に診断する。
「さっきからずっと彼は飛び道具しか使っていない。懐が弱いのでは」
「苺！　囲め！」
光の巨人は拳で地面を叩き、白煙を立たせた。その煙幕の中から、十二人の苺が四方から現れ衛本に抱きついた。
「つーかーまーえーたー！」
衛本は左手からククリナイフを出し、苺の背中を刺したが、それは本体ではなかった。
同時に、苺が心臓を喰った。
「は！」
その漏れた息とともに、衛本は動きを止めた。
「生ハツ、オイシイ！」
極彩色の遊園地は崩れてゆく。急激に色褪せ、閉園した廃墟のように崩れてゆく。
轡はその隙に、瓦礫の彼方へ跳んだ。
高橋の夢は、そこで途切れた。

ベッドの上にいることを理解するのに、しばらく時間がかかった。空中を飛んでいた感覚が、まず寝ている自分の肉体と一致しない。平衡感覚をどう理解していいのか分らない。ここはピンクと緑の遊園地ではなく、沖縄のビジネスホテルである事を理解するには、二度寝返りを打つまでかかった。
「……！」
高橋は跳ね起きる。
静尾の肉体は、どうなったのか？

11

静尾の部屋には、既に全員と、ホテルの従業員と救急隊員が詰めていた。
静尾は眠っているようにしか見えなかった。心臓マッサージやＡＥＤを既に試した状態で、救急隊員たちは、医師の所へ運び確認してもらう、という話をしていた。
目を開けない静尾を見て、高橋は現実の静尾の目を一度も見ていないことに気づいた。
高橋が知っているのは、サイレント・ドクターの生き生きとした目だけだ。
「静尾は二回死んだ」
高橋は呟く。
「一度目はしょうがない。だが二度目は俺をかばったようなもんだ」
夢の中で両脚がなくなり、現実では両脚があることを確認したが、再び夢の中のように脚がない気分だった。立っているのかどうかも分らない。ここがほんとうに現実なんだろ

うか。夢だったらいいのに。むしろそう願った。
「なんでよう。なんで私の周りのイイ男は死んでいくのよう」
苺は泣きじゃくる。
「衛本は死んだのかしら」
千波が低く呟く。小山が答える。
「どこかの病院に、亡骸が搬送されるのでは」
錨が涙目で言う。
「そんなん、確認してどうすんねん」
「静尾くんが無駄死にじゃないと、確認したい」
自衛隊員衛本の死は、訓練中の事故として小さく発表されていた。ネットは、衛本経由でＬＳＤ汚染が自衛隊内に蔓延しているスキャンダルをリークした。
「何の為に、殺し合った？」
高橋は自問自答する。〈空飛ぶサークル〉は何人いるんだ。轡はまた来るのか。俺たちの選択は、正しいのか？

皆ひどく疲れていて、帰路では誰も何も喋らなかった。静尾は荼毘に付され、小さな骨壺を千波が膝の上に載せていた。
千波の車椅子を押す役は、苺が買って出た。つきあいの長い小山がやると言うが、小人症では車椅子に届かない。
帰りの席は一つ空席だ。
千波は、窓の外を眺めたきりである。
「『背中』に見えた雪山、轡は知っていたようだったけど」
高橋は尋ねる。
千波はしばらく黙っていたが、決意したようにその名を言った。
「オリンポス山、と仮の名前がある」
「どこの山？」
「世界中何処を探してもないわ」
「？」
「……明晰夢の、奥の奥を除いてね」
ルールＮ。ルールの全ては分っていない。
かつて明晰夢のルールを突き止めようと世界を探求した男の話を、千波は語り始めた。

第三章　バッド・トリップ

1

『無意識の発見』

チョークの音をカツカツと立て、多摩川均（たまがわひとし）准教授は黒板に大書した。

階段教室の古い木材と木の机が、うららかな春の光を教室中に反射している。

「一八八五年、ジグムント・フロイトが催眠治療から着想した概念です。フロイトは精神分析の祖であり、同時に無意識の発見者でもあります。それまで我々人間は、意識で動いていると考えられていました。私は私の全てを支配し、私は私の全てを理解していると。ところがそうではなかった。人間の心の中には、我々の意識で意識出来ない何かがあることが分かってきました」

多摩川は一本の横線を引き、巨大な氷を描く。

「氷山の譬えがよく用いられます。海面に出ているのが我々が意識であると思う領域。海面の下にある巨大な領域が、隠された、我々が意識できない領域。その下にいる『何か』を、フロイトは無意識と名付けたわけです。数学でいうゼロの発見と等しいと私は考えます。無意識――subconsciousのsubは、地下鉄subwayのsubですね。underです。何故人の心は、おかしくなるのか？　その答えのひとつがこれだとフロイトは考えました。たとえば辛い目に遭った時、その記憶の存在を認めたくなくて、無意識下に、水面下に沈めて、意識側からは見えないようにする。その人は本人の覚えていないことが原因で、心理状態が

おかしくなることがある。この忘却現象と、水面下の何かからの影響を、フロイトは抑圧と呼びました。これを意識上に浮上させ、全ての関係を正しく再認識させることが精神の治療である、というのが彼の考えの骨子であります」

氷山の横に、トラウマ、ＰＴＳＤ、フラッシュバックなどの言葉が添えられる。

「これらの言葉を聞いたことがあるでしょう。これらは無意識が原因であると考えられます。何故なら我々の意識――顕在意識が、意図的に、あるいは自由意志で、心を病むわけではないですからね。犯人は無意識。フロイトはそう考え、実際にそうだと仮定した精神治療に効果があることを確認しました。このときから精神分析学は狐憑きのオカルトから脱し、科学の末席に連なったと言えます」

多摩川は一息つき、学生たちを見渡した。

四月の履修始めだというのに、学生たちは既にまばらだ。ゴールデンウィークを過ぎれば更に半減するだろう。最後までこの講義を聞く者はいるだろうか。この京都の学生街には、学生が目移りするイベントが沢山ある。皆そっちへ行ってしまうだろう。

聴講者に、車椅子の女学生がいることに多摩川は気づいた。バリアフリーになって階段教室にも出入り出来るとは、時代は変わったものだと思った。

その女学生――二階堂千波は、多摩川准教授に薫陶を受けたくてこの吉田大学文学部に入った。教室全体が光り輝いていると、千波は思っていた。

「ところで」

多摩川は本題に切り込む。

「無意識には、共通部分があるということが分ってきました」

『アーキタイプ』と板書する。

「そこで出てくる人間には、おとぎ話の物語に出てくるような共通の特徴があります。権力的な父親、全てを包み込む母親、知識のある老賢者、どこにも所属しない愚者（トリックスター）。強い男の英雄（ヒーロー）。番人（ゲートキーパー）もあれば、使者（メッセンジャー）もいる。私は物語は書きませんが、物語は人類共通の無意識から生まれ、だからこそ名作物語は誰もが理解できるのだ、という仮説があります。アーキタイプは人だけではありません。水、車、靴、高い場所、道、部屋。人は共通のものを無意識に持っています。たとえば人は夢を見ます。夢は意識的に見るものではないので、そこは無意識に近いと考えることが出来ます。その夢に現れたものをアーキタイプの象徴として読み解こうと考えたのがカール・ユング。フロイトの弟子ユングは、フロイトの精神分析学と袂を分かち、分析心理学の祖となりました。銃は男根の象徴、車や電車は人生の象徴、空を飛ぶ夢は挑戦や逃避の象徴。そう聞いたことある人もいるでしょう。無意識を象徴主義で読み解こうとしたのですね。一方現代医学では、夢は記憶の整理であるという仮説があります。一見ランダムで、見たことがないビジョンであっても、どこかで見ていた記憶の断片の再編成、整理中に見るバグのようなものであると。しかしこれだけでは夢を説明しきれません。何故なら、夢には人々の共通のパターンが見られるからです。そして、ここからがこの講義の本題です。宗教にも同様のパターンが見られます。人々のそのような意味の集合体のことを、ユングは集合的無意識と呼びました。宗教にも夢や物語と同様、集合的無意識が反映しています。この講義、比較宗教学では、そのことについて詳しく見ていきます」

『夢には共通の構造がある』

『無意識には共通の構造がある』
『物語には共通の構造がある』
『宗教には共通の構造がある』
と、多摩川は並べて書いた。
「宗教というと、葬式や儀式のように現代ではとらえられがちです。それは宗教の半分しか見ていません。むしろ宗教とは、『世界はどのように出来ているかを、どう考えてきたか』という人類史のことだと考えます。初期の宗教には必ず奇跡が出てきます。『この奇跡が矛盾せず成り立つ世界とはどのようなものか？』に答え、『死んだらどこへ行くのか』『この世界の果ては』『この世界はどうやって出来たか』『この世界は最終的にどうなるのか』に答えること。その世界観が宗教であり、民族の共通の集合的無意識だと言えます。私の研究によれば、世界の宗教にはほぼ『山』が出てきます。仏教の須弥山（しゅみせん）、キリスト教の『山上の教訓』。インド神話では世界の中心にメール山（妙高山（みょうこう））があり、これがバラモン教、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教に伝播したので、これらは全て『世界の中心には山がある』を受け入れています。ギリシャ神話では十二神はオリンポス山に住み、最古の宗教拝火教（ゾロアスター）は、炎の山（ヤナルダー）を聖地としました。その分派マニ教も同様。あるいは、カルメル山の聖母をあがめるブードゥー教、日本の山岳密教で天狗や山体を神とする修験道（しゅげんどう）、道教や神仙思想の蓬莱山（ほうらいさん）、李氏朝鮮来の白頭山（ペクトゥサン）信仰。ケルト神話の地上（トゥアサ・デー・ダナン）を退いた神々の棲家は丘（シー）で、ネイティブアメリカンのナバホ族は、世界は第三の山の上にあると考えました。例外は北欧神話の世界樹（ユグドラシル）でしょうか。しかし世界の中心に『巨大な何か』『人の手の届かない何か』があることは共通です。これは『山のアーキタイプ』ではないか。つまりそれは『共通の山』のことではないか？　私はそう考え、仮にそれを『オリンポス』と呼ぶことにしました」
ノートをとる千波の机の上には、多摩川均著「無意識の構造とオリンポス仮説」が置かれていた。

「当時私は明晰夢を見たこともなければ、夢の中で空を飛んだわけでもない。ただ高校生の頃に心理カウンセラーになりたいと思い、偶然彼の本を見つけ、興味を持ったに過ぎないのね」
東京へ帰還する機内の外は、雲一面に覆われていた。きっと地上では雨が降っている。サイレント・ドクター静尾統を失った我々の涙雨だと、高橋は思った。千波が同じことを考えているかどうかは分らない。だが彼女の背中――雪に覆われたオリンポス山は、多摩川准教授の「仮説」に過ぎなかったのではないか？　千波はその雲を見ながら話を続けた。
「ほどなく私は多摩川准教授の研究室に出入りするようになったの。無意識の話を何度か伺い、あれは夏前だったか、彼は明晰夢について語り始めた」
蝉が鳴き始めた時期で、風鈴が時折鳴った。窓の外は北山杉が直線の影を作っている。出された麦茶のグラスには何かのキャラクターが黄色く印刷されていて、それが汗をかいているように見えたことを覚えている。
「現実以上に感覚が研ぎ澄まされた夢――明晰なる夢の話を、聞いたことはないかね？」
千波が麦茶をごくりと飲み干したとき、多摩川は出し抜けに明晰夢の話をした。そこか

ら夕陽が左大文字山に沈むまで、多摩川は一気に明晰夢と「ルールN」について話した。
「『ルールN』は私たちの発見ではなく、彼が明晰夢を実践してきた中で発見したことなの。つまり『ルールN』の開拓者は多摩川均」
そこから彼は千波に明晰夢の手ほどきをすることになる。
「最初は足が不自由で醜い顔の私を不憫に感じ、『もうひとつの世界がある』ことを教えようとしてくれたのかも知れない。夢の中で空を飛ぶのは、何物にも代えられない、至上の体験だったから。私はこの体になる前に行く筈だった、『あり得た未来』にいると思ったの。毎晩夢の中で彼と私は逢い、色々な所へ飛んだ。そしていつの間にか恋人同士に。彼は私の師であり、伴侶でもあった。……次の年に『彼』が入学してくるまではね」
「……轡了か」
「ええ」
比較宗教学概論Ⅱ（近現代）に出席した轡は、殆ど寝ていた。ただある話題にだけ食いつく。ヘレナ＝P＝ブラヴァツキー夫人の「神智学」の項だった。
神智学はフロイトより遡ること十年、一八七五年にアメリカはカリフォルニアで生まれた学問である。当時まだ分断されていた東洋と西洋の宗教に現れる共通の事項を調べ、人類がまだ知りえていない真実を解き明かそうとしたものである。キリスト教と科学の矛盾、たとえばビッグバンや進化論との矛盾を感じていた西洋の人々が、十字軍に滅ぼされたキリスト教以前の宗教や異世界である東洋の宗教を再発見し、その隠された真実を知ろうとしたものだ。アメリカの新興宗教、カウンターカルチャーの祖といってもよいだろう。神智学はインドの大僧（マハトマ）クートフーミに教えられたもの、とブラヴァツキーは言うが、実在は確認されておらずハッタリの説が強い。しかし西洋の学問、宗教に行き詰まりを感じていた人々にとって「代りの考え方（オルタナティヴ）」に見えたのだろう。それは爆発的に広まり、ムーブメントとなった。ハリウッド女優シャーリー・マクレーンが傾倒し、広告塔となったことも後押しした。それはヒッピー運動の基礎思想となり、「新時代（ニューエイジ）」ブームとなり、今日の「スピリチュアル」に継承された。生まれ変わりという考え方（輪廻転生（リーインカーネーション））、「人は使命を持ちこの世に生まれ、善行を積み神へ近づく」とする考え方、「この世は物理的法則だけでなく業（カルマ）に支配されている」「思いは現実化する」などといった考え方は、この神智学、ニューエイジが源流である。現代においても、引き寄せの法則、ヒーリング、チャネリング、予知夢、前世記憶、シンクロニシティ、デジャヴ、サイコメトリー、アカシックレコード（アガスティヤの葉）、次元上昇（アセンション）などにその末端を見ることが出来る。
神智学で重要視されたのは「体外離脱」体験だ。人間は物理体、アストラル体、エーテル体の三つの重なり合いと説明され、アストラル体はチャクラ（人体の中央線の7つのツボ）と共に、キルリアン写真に写るとされた。「体外離脱とはアストラル体に戻り、アストラル界へアクセスすることである。そこで現実以上に現実味のある世界を探検する」とされた。これはアストラル旅行、アストラル投射（プロジェクション）、あるいは、生命樹（セフィロト）の小径（パス）と呼ばれる「黄金の夜明け団（ゴールデンドーン）」の秘儀であった。
ヒッピーに何故ＬＳＤが使われたのか？　その幻覚作用が明晰夢の状態に似ている為、「あなたは悟りを開いた」と詐欺を働く為であったのだ。古来巫女が神の声を聞く為に、マジックマッシュルームを使ったことと似ていたかも知れない。
轡了はそこの時だけ起きていて、その後多摩川の研究室を訪ね、「僕は明晰夢の中で自

由に飛べるんですよ！」と言い放ち、そこにいたメンバーを驚かせた。
訊けば、彼は子供の頃から明晰夢の中で自在に飛んできたという。明晰夢を見れるようになるまで、多摩川や千波は一年かかったというのに、そこで夢の中を自由にするようにまだ出来ていないというのに、轡は最初から「空を飛べた」というのだ。
「一緒にみんなで空を飛びましょうよ！　面白いですよ！」
と轡は言い、明晰夢のサークルを立ち上げようと言った。
「面白い。〈空飛ぶサークル〉か」
こう返したのは多摩川だ。明晰夢を利用した謎のテロリスト集団の名は、多摩川が命名したこの名から直結している。
そうして多摩川研分科会が〈空飛ぶサークル〉となり、明晰夢研究の場となった。カリスマ性の高い轡は女子たちを集めるのが上手く、彼女たちと夢でも現実でも交わった。轡が中心となり、取り巻きが増え、サークルを回してゆく。
「私と多摩川は、彼らとは距離を置くようになった。多摩川はそれよりも、人の無意識の構造の方に興味があった。オリンポス山仮説を実証してみせると、明晰夢の深層に潜ろうとしていた。――そして三回生の夏合宿。多摩川は夢の中で行方不明になったの」
「行方不明？」
「オリンポス山の、登山中に」

2

奈良吉野山は修験道の聖地である。かつて後醍醐天皇が反旗を翻した南朝本拠地だが、千年あとの今では千本桜で知られる観光地だ。しかし観光客の大挙する春と違い、夏の吉野は誰も訪れぬ緑の秘境で、京都から合宿に向かう地としては穴場である。
山の中は日が沈むのが早い。燃え盛る昼間が終わりを告げ、風と共に蜩の甲高い声が響くと、縁側の蚊取り線香の煙の中で、多摩川は千波に語り始めた。
「魔境は、人の無意識の闇の部分だと私は考えている」
「闇？」
「統合失調症や認知症は、無意識が顕在意識にそのまま昇ってきたものではないか、と私は考えているのだ。無意識は制御できない。色々なものが混じっていて、その負の面を魔境と呼んでいるのではないかと」
「東洋の瞑想は、そのことに気づいていた？」
「うむ。あるいは魔術師アレイスター・クロウリーを生んだ魔術結社『黄金の夜明け団』や『A∴O∴』や『暁の星』の秘儀のひとつに、タットワヴィジョンがある。これは白昼夢、瞑想のままアストラル界へ次元上昇する行為だとされた。だがこれは情緒不安定に陥る危険が常にあったという。私はこれは魔境と同じ現象ではないかと思う」
「東洋でも西洋でも、言葉が違うだけで同じことを体験していた？」
「そうだ。仏教は、単純にそれらを『魔』と呼んだことが多い。座った我の周りを、魔がうろうろする、などと形容され、仏敵の天狗に喩えられた時代もあった。西洋ではそれを悪魔憑きとした例がある。『ルーダンの悪魔憑き事件』（一六三四）で、修道院長ジャン

ヌ＝デ＝ザンジュに取り憑いた悪魔アスモデウスは有名だが、ジャンヌは本当の悪魔ではなく、魔境に入った幻覚をそう思い込んでいた可能性がある」
「つまり……悪魔など本当はいない？」
「分らない――そう考えるのが科学者としての立場だろう。色んな宗教で言う所の天国や地獄や神や悪魔は実在するかも知れないし、それらは全て魔境や明晰夢で見た幻覚かも知れない」
「明晰夢では全てが現実以上に感覚が鋭くなるから、それが『神の声を聞いた』ことと区別が出来ないと？　たとえばジャンヌ・ダルクのような」
「うむ。千波は賢いな」
　多摩川は千波の頭を撫でた。山の端に夕日が落ちた。多摩川は西瓜を一口しゃりと齧った。
「世界の宗教者はなべて神の声を聞いたとされる。それは歴史的に預言者と呼ばれた。予言の予めとは違って、預かるという字を使って。イスラムのムハンマドも、ナザレのイエスも、エジプトのモーセも、ペルシアのザラシュトラ（ツァラトゥストラ）も、マザー・テレサもジャンヌ・ダルクも、近代のルドルフ・シュタイナーもエドガー・ケイシーも、みな神や天使の声を聞いたという。日本においてはここ吉野、……あの大峯山（おおみねさん）で、役行者（えんのぎょうじゃ）が登山中に蔵王権現（ざおうごんげん）という日本オリジナルの仏に出会い、声を聴き、修験道が始まった」
　指さした先には、蒼黒く佇む吉野大峯があった。夜が近づいている。風が出てきた。間もなく夕食だろう。魚を焼く匂いがした。
「オリオン座の宇宙意識バシャールと交信（チャネリング）した、かつて火星に住んだ五次元人アクアッホと話した、など、『神』や『悪魔』の形式は時代に応じてアップデートされる。いずれ『未来から来た十一次元の人工知能』と交信（チャネリング）した、なんて輩が出てくるかも知れん」
　千波は自分の愛する男が熱心に語る姿が好きだ。その潤んだ瞳は自分にだけ向けられている。自分は彼の最大の理解者であり、最大の聴き手でありたいと思う。
「ヘレナ＝P＝ブラヴァツキーは『秘密教義（シークレット・ドクトリン）』の中で、世界は七つの層からなる、と唱えた。十一とする教派もあるし、九とするのもある。だが……」
「普遍なのは、山」
「そうだ」
　千波は今夜の多摩川の目的を知らされた。
「今夜俺は、オリンポスに登る」
「え？」
「一度や二度じゃない。俺は何度も明晰夢で『上の層』へ行ったことがある」
「どうやって？」
「飛ぶんだ」
「飛ぶ？」
「そうだ。出来るだけ遠くへ。地球すら遠くに見える所まで。宇宙や銀河やエーテルやダークマターの満たす所まで。そこに大きな山があった。ヒマラヤやエベレストみたいな、峻厳なる雪山が」
「……本当に？　私はそこまで飛べない。怖い」
「俺だって怖いさ。だが分らないまま死ぬのは嫌だ。今日は吉野大峯のパワーも借りられ

れば、と少し信心深くなってな」
そもそも多摩川の専門は、ペルシアの国教だった拝火教（ゾロアスター）だった。キリスト教以前の最大派閥。「神と悪魔」「天国と地獄」「最後の審判」「世界を救う救世主（メシア）」の考え方は、ユダヤ教、キリスト教オリジナルのアイデアではない。それ以前から拝火教にあった考え方である（それ以前からあったかは不明。文献上では拝火教聖典『アヴェスター』が初出）。多摩川は、若い頃ペルシアに渡り、ゾロアスター僧から深い瞑想を学んだという。
「人類は昔から同じことをしている」
多摩川は笑った。
「それは何？」
「世界がどうなっているか知りたい、さ」
その笑顔は、いまだに千波の脳裏に焼き付いている。年齢に似合わぬ、少年のような笑顔だった。

「それが私と彼の交わした、最後の会話」
千波は窓の外を見た。そこに彼の笑顔が見えているのだろうと高橋は思った。
千波は顔を少し歪ませた。
「いまでも時々思い出す。次の朝、彼は目覚めなかったの」
「……」
高橋は静尾の「目覚めなかった体」を否応なく思い出す。静尾はどこへ行ってしまったのか。多摩川は。死ぬとはどういうことだろう。この疑問が、宗教を作ったのだろうか。
「悲しみに暮れる私を轡が慰めてくれて、一時恋人関係になった。でもその後、『夢の中で死ぬゲーム』で死者が出て、〈空飛ぶサークル〉は自然消滅」
飛行機が高度を落とした。シートベルトサインが点灯し、羽田が近づいてきていることを報せた。飛行機は雲の中へ、涙雨の中へ降りてゆく。
「私は救世主（メシア）なんて信じない」
千波は最後に言った。

葬儀は雨だった。
雨の日は葬儀が増えるという都市伝説を高橋は思い出していた。低気圧が近づく時、その変化に耐えられない人から死んでいくのだという。死者は天候のカナリアである。静尾は、日本を覆う黒雲を警告するカナリアのように死んだのだと高橋は思った。

精進落としのあと、錨が提案した。
「みんなで集まろや。夢の中で、だけちゃうぞ。物理的にや」
「どういうことよ？」
苺が千波の車椅子に頬杖をついた。
「次いつ轡が『来る』か、分らんやろ。いや、轡とも限らん。あいつが手下を連れてきて、俺らの夢の中に暗殺者としてやって来るかも知れん。物騒な軍人もおるかも知れん」
「殺すばかりではないな。あるいは、洗脳者として」

小山が低い場所から呟く。小山の子供並の喪服と、苺の巨漢用の黒いドレスが、対照的だった。
「一人でいたらやられるから、群れようってことだな」
他人と距離を置いて生きてきた高橋も、この気持ちは分る。東京タワー上空で轡に背中を見られたあと、千波たちに会うまで、ずっと不眠症だったことを思い出す。
「どこか宿に泊まるの？」
千波が具体的手段を尋ねる。
「いや、身を隠そうや。都内は人目が多過ぎる。俺らが衛本にこっそり接触したみたいに、逆に、たとえばコンビニの店員が連中かも知れへん」
錨は周りを見渡し、聞かれぬよう小声で言った。
「どっか田舎へ逃げた方がええんちゃうかな」
「あるいは車でも借りて、山中に潜むか」
高橋が言う。
「仕事はどうするのよう？」と苺が心配する。小山が覚悟を決めた。
「貯金で食いつなぐしかあるまい。死ぬか洗脳されるか、あるいは〈空飛ぶサークル〉を潰すか。そういうことか？」
高橋は簡潔に結論を先回りする。
「運転免許を持っているのは？」
錨と苺が手を上げた。免許のない高橋は言った。
「俺は通信兵にでもなる。ネットさえ繋がれば情報を取れる。秋葉のジャンクで、逆探知をされても捨てればいいＰＣやスマホを調達する。奴らの情報を出来るだけ集めたい」
「……」
全員、反対する理由はない。この空白は、覚悟を決めるまでの時間でしかなかった。
「合宿どころじゃなくなったな」
高橋は笑えない冗談を言った。

3

夢の中の小山文具店ではなく、現実の文具店の前に、シルバーの６人乗りバンが停まっている。「朝早く目立たぬうちに出発しよう」と小山は提案し、皆始発で集まった。千波の自宅に迎えに行き、車椅子の彼女を乗せる予定だ。
皆最低限の荷物を持ち、小旅行の恰好でやってきた。服は最悪どこかで買う。普段着ている服だと、目撃されたときに特定が早くなる。
小山は錆びたシャッターを触り、呟いた。
「儂はまたこのシャッターを開けるぞ。そしてボールペンとかノートとか買いに来る小学生やＯＬさんに『１２０円です』とか言って、少しずつの利益を稼いで暮らすんだ。新しいボールペンの芯が出ましたよ、この手帳、書くスペースが１センチ大きくなったんです、便利でしょう。そんな話をしながら、ああ、あの時俺は戦士として闘ったんだ、と時々思い出すのさ」
小山は冷たいシャッターを撫でる。

「このシャッターのペンキも塗らんとなあ」
朝靄の中、メンバーは黙って銀の車に乗り込んだ。

ＰＣとＷｉ―Ｆｉさえあれば、短期のリモートワークなら出来る。資金稼ぎだ。事務員の苺はリモート事務をいくつか申し込んだ。物理的な居場所を特定されないよう、ＩＰも適宜変更する。それで、人としてネットから消えることが出来る。レンタカーでは足が着くと小山は反対したが、それを調べる頃には移動していると苺は言った。かつて千波を乗せていた静尾の愛車は売り払い、その資金とすることにした。とにかく他人のいる所から遠ざかる。

一行は長野の山中で、最初の夜を過ごす。

「ここ雪降んのかな？」
錨はいつでも口を止めなかった。この軽口だけが皆の救いだった。
立小便をしながら、高橋と錨は周囲を見渡す。農作業する時期も終えた寒村である。山に迫られた小さな畑が、樹々の間から見えていた。
「雪の時期まで続けるつもりかよ？」
「それは勘弁や。貯金もないし、ＡＤやってる場合とちゃうねん。はよＤ（監督）に昇格したいしな」
ぶるりと震えたのは小便のせいか、冬を思ったせいか。それとも、轡との殺し合いを想像したせいか。
高橋はずっと足元を見ていた。名も知らぬ木と木が、根を絡ませ合っている。領土の取り合いだ。ひとつの植物が根を広げると、他の植物の根もそこを取ろうとする。二者でなく三者四者の根が絡み合う。岩を避け、泉を取り合う、幾条にも分れた生命線たち。
高橋はそれがひどく醜いように思えた。そんな自己主張のぶつけ合いの場から逃れ、誰も根を張っていない遠いところへ、自分は光より速く行こうとしていたのだと思う。こんな山中ですら、根たちは互いの生命を喰らおうと絡み合っている。俺たちと時間の感覚が違うだけで、彼らにはこれが闘争なのである。時間を早回しすれば、根同士の陣取り合戦を見ることが出来るだろう。一方が他方を滅ぼすか、あるいは拮抗で手を打つのか。生命の本質とはこうした縄張り争いなのだろうか。頭を上げた。空をどう切り取るかでも、枝や葉たちが時間軸の異なる戦争をしていた。

千波はただ逃亡生活を続けるのではなく、こちらから轡を殺しに行こうと主張した。それ自体には全員同意だ。だがいつ？　今夜か？　明日か？　一週間先か？　轡本体の殺害は手がかりが失われた。ならば本人の夢の中で目的を果たすしかない。〈空飛ぶサークル〉の情報を少しでも集めようと千波は言った。メンバーの数、どういう人間がいるのか。もし我々の人数を遥かに超えるならば、全員討ち死にしておしまいかも知れないと。
「勝てる闘いを仕掛けよう」
高橋はそれだけ言い、ＰＣの画面へ戻った。実際の所、このネットの海と夢の中、どっちの世界でより高橋は自由の身になれるのだろう。夢の中ですら「他人」は追いかけ、邪魔をしてくる。だとしたら手足のようにプログラミングし、ネットの海から情報をさらっ

て来れるＰＣの方が、むしろ高橋にとっての自由の庭なのではないのか？
高橋は苦笑いする。ついこないだまで「空の王」などと叫んでいたというのに。無意識の世界は果てまで自分のものだと思い込んでいた。高橋は小さな自分の庭で、広大な無意識世界には出ず、理想の女をひねくり回していただけだ。

「死んだ人はどこへ行くんだろう」
車の中で外を見つめ、考え事をしている千波に、高橋は独り言のように話しかけた。
「俺はまだ『サイレント・ドクター』が夢の中の世界では生きているんじゃないかって思うことがある。魂というか、そういうものがまだ漂っているような」
「それを星体（アストラルボディ）で説明しようとしたのがニューエイジ。人間の魂は星体で出来ていて、物理体と重なり合っているだけだと考えた。肉体は滅んでも星界（アストラル）では生きていると。魔術師アレイスター・クロウリーは今でも星界に留まってて生きているとする一派もある。空海はまだ生きていると真言宗は言うし」
「なら静尾は……」
「死んで、消滅して、二度と会えない」
予想より冷たく千波は断じた。
「そうはっきりと考えないと、思考の甘さを付け込まれる。私みたいに」
「……どういうこと？」
「私はまだ多摩川の死をどこかで認めていない。突然失踪したってだけで、心のどこかで信じている節がある。よく雪山で遭難した人が、氷漬けのまま岸壁に貼りついてて、春まで遺体を回収できない、なんて言うでしょ？　私はそう思いたくなってしまうの。無意識界のオリンポス山で、『多摩川の魂』が氷漬けになったままなんじゃないか、って。それをいつか解凍できるんじゃないかって。それが私の背中の意味なの。『多摩川の死を認めたくない』という、私の背中の意味」
あのとき千波の背中に見えた、吹雪の叩きつける白い山はそういう意味だったのか。ようやく高橋は彼女の「心」を知ることが出来た。
「有難う」
「何が？」
「弱点を、晒してくれて」
「……背中を預けることになるんだから、当然」
千波は感情を隠すように言った。
自分を仲間として認めてくれていることが高橋には少し嬉しく、思わず笑みがこぼれてしまった。
「笑う所？」
「いや。……背中を預け合う資格が俺にはあると分って、ちょっと嬉しくて。……俺、人付き合いとか苦手だから、なんかどうやっていいか分らなくて」
静尾が現実世界で初めて喋った、沖縄料理屋のことを思い出していた。
「人生の初心者かよ」という声を、今でも覚えている。
「俺、人生の初心者だから」
彼の声を、高橋は忘れまいと誓った。

名も知らぬ山中に、長い夜がやって来た。
眠らなくてはならない。眠らないと人は死ぬ。
眠る時は夢で集まろうと約束してある。常に群れで行動すること。轡はいつでも我々の夢に侵入できる。
「夢の中で他人に会ったら、それは轡が化けているかも知れない」
千波は警告した。
「『他人』にうかつに接触しないように」
安眠出来るのだろうか。するしかない。曖昧な夢を見るくらいなら、明晰な夢の中で自我を保ちたい。

眠りから覚めても、十分に寝た感覚はなかった。精神の緊張ゆえか、眠り慣れぬ車中泊だからか。
「これ、いつまで続けなアカンのやろ」
紫の毛布の中で錨が呟く。夜はまだ明けきらず、桃色に地平が染まりはじめた時刻だった。
「けりがつくまで」
高橋は短く言う。
「たまにホテルやネット喫茶に泊まることにしよう。体が持たんよ」
小山が子供用の毛布の中から顔を出す。
「……ファミレスにでも行って、食事を」
苺が縮めた巨体を目一杯伸ばして言った。
ファミレスに入り、黙って食事する。それぞれに配ったPCでネットの海を泳ぐ。集まる情報に網をかける。かかればラッキー、そうでなければ……。いつまで？　そう高橋は自問する。

4

二日目は新潟。安いビジネスホテルとは言え、横になれることを高橋は有難く思う。ガソリンを入れても飯を食っても、横になっても金がかかる。
三日目は雨。石川県に向かう道も、我々の行動も、見通しは利いていない。
どこへ向かうかという目的地はなかった。ただ人のいない所にいて、留まらずに移動しようとしか決まっていない。轡は「目的がないと人は闇に落ちる」と言っていた。そうかも知れない。
「あ」
出発から二時間後、PCを見ていた高橋が小さく呟いた。
「いや」
小さく否定する。だが一瞬のあと、

「そうかも」
と肯定する。
「なんやねん」とハンドルを握りながら錨は訊く。
「赤羽のホームで男を突き落とすＯＬ、東京タワー崩落、渋谷駅陥没。この三つを予言したツイートがある」
「は？」
「超能力者とか、予言者、地震予知系はネットに沢山いるんだ。ほとんどランダムに書いといて、後々偶然でも当たったら、外れたやつ全部消して予言者に成り上がる為だ。でも場所と日時まで正確な人なんていない。この人だけだ」
「事後に、事前を偽装することは？」
「ソースコードまで一応確認した。トリックなしだ」
「じゃあ超能力者？」
千波が尋ねる。
「いや。犯行予告だろう。あるいは、関係者が情報を漏らしているのでは」
小山が推測する。
「何の為に？」
「〈空飛ぶサークル〉といえど、一枚岩じゃないかも、ってこと。誰かが裏切ろうとして、誰かに見つけてくれというメッセージだったらどうする？」
「罠かも」
高橋は慎重論だ。
「その人はどういう人なの？」
苺が聞く。
「他に何も辿れる所がない。アカ名で検索しても出てこない。居場所は……横浜か」
「衛本は横須賀って言うとったな。近いやん」
「じゃあ、衛本本人とか」
「分らない。このアカウントがまだ生きてるかも分らない」
「メッセージは送れる？」
「新アカウントを作って送ると、捨てアカだと警戒される。ずっとツイッターをやっている体で、俺は複数のアカウントを持っている」
「なにそれ」
「担々麺好きのツイッターと、体操競技好き、カフェマニアのみっつ」
「すごいやん。スパイかいな。まず地元に溶け込んで怪しまれん技か！」
「そのひとつからコンタクトを試みる」
高橋は文面を考え、いくつかの文章をエディタに書き出し始めた。
「東十条の『ジャングル』と、黒い部屋に行ったことあります？」
そうダイレクトメッセージを送った。カフェマニアの文章にも思えたし、〈空飛ぶサークル〉に接触したことも匂わせる文章でもある。食いつき方で相手が何者か分る。
即レスなどある筈もなかった——待つしかない。
「なにこれ」

今度は苺が声を上げた。
「今度は何や」
「#夢に出てくるイケメン」
「？」
「夢に共通して出てくるイケメンがいて、その似顔絵を描くのが一部で流行ってたみたい」
苺は画像を皆に見せる。長い髪。彫りの深い顔立ち。月光の中で飛ぶ姿。それを描いたイラストたちだ。
「轡？　轡としか見えないわよねこれ。どういうこと？」
高橋は検索頻度を調べる。
「……少し前のことだな。ある時からぷつりと途切れてる」
「いつ？」
「……東京タワーが倒れた日」
「夢の中に現れて、どうしたかったの？」
六本木で出会った美女軍団を思い出す。
「メンバーを集めてた。実行部隊というべきか」
「俺らもそうやってメンバー集める？」
錨が冗談を言う。
「誰がイケメン役やるのよう」
「俺俺俺！」
「……」
「会ってもいない人の夢に入るなんて、普通に無理よ。私がどれだけみんなに出会うのに苦労したと思ってんのよ」
千波が抗議する。
夢の中で轡に逢った女たちは、ことごとく更新が止まっている。再び沈黙が訪れ、雨の音だけになった。雨の中は密室だ。逃げ回っているのに、同じ所から動いていないように思えた。息が詰まり、湿度が上がってゆく。

海風が強い。
巨体の苺がひいひい言うのを、錨が背中を押してなんとか上らせようとしている。
「靴に砂入った」と、高橋は一端千波を降ろした。
一行は鳥取砂丘の、一番大きな丘の上にいた。
ずっと車の中にいて滅入ったところに、砂丘を見つけたのだ。「誰かに見られたらどうすんねん」と錨は警戒したが、この時期の砂丘に観光客はいなかった。外の空気を、久しぶりに吸った気がする。
車椅子の千波を丘の上に上げたくて、錨と高橋はじゃんけんをして、高橋が負けておぶることになった。「重いわよ」と彼女は言ったが、想像より軽くてびっくりした。こんな小柄な身体で、彼女は沢山のものを抱えていたのかと思う。
「千波サンの世界の砂漠とは、だいぶディテールが違う」と高橋は言った。
「そうね」
千波は砂を両手で掬っている。

「私の『心の砂漠』は、本で読んだ想像上の砂漠だったのね。本当の砂漠は、砂は熱いし、手も乾く」
「ディテールに追加しとけば？」
「ええ。あとこの砂漠には、みんながいる所も違うわね」
苺をようやく錨と小山が引き連れてきた。
「海ー！　ぶっ殺す！」と、苺は攻撃的人格の龍果（ドラゴンフルーツ）になり吠える。
丘のてっぺんから見た日本海は格別だ。高橋は座り込み、尻から熱さを味わった。
「俺、これが全部俺の主観だったらいいのに、って思う」
「どういうこと？」
「夢の中での闘いは、全部俺の夢の中だけでの出来事で、みんな主観でそう思ってるだけで、ここはそういう狂った人の新興宗教サークルなんだ。夢が繋がっているなんてなくて、それぞれ個人で思い込んでいるだけで。現実には恵まれていないから、せめて夢の中で超人になる可哀想な人たちなんだ。静尾はただの心臓病で、テロはテロで巒と関係なく起こってて。このまま家に帰ってぐっすり眠って目覚めたら、何事もなかったように元の人生に戻るんじゃないか、って」
「私の夢に出てくる高橋君は、私が作り上げた幻の主観（クオリア）」
「そう」
「だったらいいわね」
強い北風に吹かれながら千波が呟いた。夢の中の短髪（ショートカット）と違い、現実の千波は髪が長く、くせっ毛を束ねていることに高橋は気づいた。

5

事件は九日目に起きた。
ふらふらと走っても迷うだけなので、目的地を決めていた。九州を目指そうと。そのことに意味はない。ただ静尾の魂のいる、沖縄へ近づきたかったのかもしれない。
本州の端、関門海峡を跨いで川向うの距離に九州がある。人の多い博多は避け、そのまま南下する予定だった。
皆の疲労は限界だった。「横浜の予言者」からの連絡はなく、何の為に移動しているのか分らなくなってきた。昼はコンビニ飯で、もう誰も喋ることなくもそもそと食べる。ビニールの音しかない車内で、苺は弱音を吐く。
「私ウマイもの食べないと弱るのよう。四十八人が、いま十二人くらいなのよう」
誰も何もリアクションを取らない。
「このままじゃ三人になり、二人になり、一人になっちゃう」
「良かったやんか。多重人格治るで」
錨はイライラしながら減らず口を叩き、おにぎりをただ補給した。
「あれ？　私のたらこおにぎりがない！　これ昆布じゃない！　誰よ私のたらこおにぎり食べたの！　ねえ、誰？　誰？　昆布なんかいらない！　ただの草じゃんこれ！」
「一々一々うっさいな！」
錨が切れた。

「もうウンザリや！　帰ろうや！　なんかあったんか？　夢の中で全然襲われへんやんけ！　仕事も放りっぱなしやし、俺らで集まって移動引き籠りしとるだけやんか！　なんなんやこれ！　この旅！　意味あらへん！」
「錨くんが集まろうって言ったんじゃない」
「情報が得られるまで待つ言うから待ったけど、何もないやん！　もうやろうや！　今晩轡の夢の中に入って、ブチ殺そうや！　二回殺せばええんやろ！　マシンガンブッ放して、光の槍で刺したったらええねん！」
「予言者を待ちましょう」
千波が冷静に言う。
「いつまでや！　いつまで俺らはこんなことしてたらええねん！」
錨が激しく車の扉を叩く。苺は桜桃（チェリー）に幼児退行し、泣き出した。
「うるさいな！　泣いてる場合ちゃうやろ！」
高橋は「やめろ、今は喧嘩している場合じゃないだろ」と言おうとした。これまではこうした言葉はすぐ出てきた。コミュ障の高橋にしては不自然過ぎたほど、高橋は普通の会話を皆と重ねてきた。
だがこの凄惨な風景を見て出てきた言葉は、
「あ……う……」
であったのだ。
錨はわめき散らし、桜桃（チェリー）は泣き止まない。
「おにぎり食べたいよう。おにぎり食べたいよう」
「うっさい黙れや！」
「いい加減にしろ！　大人気ない！」
切れる錨に小山が切れた。小人症が下から目線で怒っても、効果はなかった。錨は切れ返す。
俺が止めなきゃ。二人の間に割って入れ。
「あ……う……」
ただの喧嘩だ。ただの喧嘩だろ。何故言葉が出ない。何故。
自分が「あ……う……」となる時はどういう時だったか、高橋は久しぶりに思い出した。

——ああ。この人たちは、他人なんだ。

高橋は他人が苦手だった。そこから逃げてプログラミング空間や明晰夢へ逃避したファスターだ。今目の前で喧嘩をしているメンバーは、所詮自分とは違う、改変できない「他人」なのだ。この他人たちと一瞬でも通じあったのは、錯覚に過ぎなかったのだ。そう、俺の主観（クオリア）。
「なんやねん！　何で分らへんねん！」
錨はドアをばんばん叩く。高橋は光の速度より速くノートPCを開いて、「他人」をシャットアウトしようとした。それは皆と出会う前からの、高橋の癖のようなものだった。
だが現実のほうが、高橋を逃がしてくれなかった。高橋は喉を絞って、変な声を出した。
「なんやねん高橋！」

モニタに映るのは、何気ない火事のニュース。「全焼」と黄色い文字が踊り、炎と消火活動が映っている。ごく普通のニュースで、いつもなら気にも留めないただのニュース映像だろう。だが高橋だけにはその意味が分かる。何だこれは。誰だ。誰かがやったのか。誰だよ！　高橋は必死で声を振り絞った。

「あう……あう……」

「だから何やねん！」

「俺んち……俺んち……」

そりゃ、糞みたいなアパートだったよ。下らない天王洲のオフィスと往復するだけの、下らない六畳間。下らない物が地層になって、センスのない古い服が転がり、全てにうっすら埃が積もっていた。帰るだけでうんざりした。朝目覚めてもうんざりした。

それが、火炎の舌と黒い煙に包まれている。

ホースの放水は止まらない。何もかも消し炭のようになり、何もかもびちゃびちゃになるのだろう。

ＨＤＤやＳＳＤの内容は大体クラウドに逃がしてある。じゃあＯＫか。初めての給料で買った櫛は赤く歪み、蒸発しただろう。ああ、機材。ハッピーハッキングキーボード、シンクパッド初代、自作系MiniAxe、絶版の書籍群。物理でしか存在できないものたち。熱で自然発火するまで想像できた。俺しか知らない、俺の周りにあったものたち。

「……失火？　不審火？」

「ちゃうやろこれ」

錨が警戒した。

「放火ちゃうんか」

「どういうことだ？　高橋君の住所が割れたと？」

小山が下からノートＰＣを覗き込み、炎上を確認する。

自分には辿れないように、巧妙に足跡を消してきたつもりだ。ＩＴは自分がプロフェッショナルだ、そう思った奢りを突かれたか。向こうには、自分以上のエンジニアがいる？　そう思い、高橋は恐怖する。漏れたのは会社か。いや、そのセキュリティは自分でやった。税務署か。どこかの会員証か。

千波は冷静に考察する。怯え切った桜桃（チェリー）を、胸に抱いて頭を撫でていた。

「『背中を見られた』時、家の景色の記憶とかを見られたかも知れない」

「……一瞬で？」

「私ですら天王洲が分ったんですもの。直接家の映像じゃなくても、近くの断片的な景色さえ分れば特定できるかも」

小山が推理する。

「高橋君に六本木や有楽町をウロウロさせたのは、そもそも東京在住を確認する為かも知れないな。だとしたら武蔵小山近辺、くらいまでは風景で絞れるかも知れない。あとは歩いたりグーグルマップで探せば。似たアパートに、順番に火をつけて炙り出す手もある」

錨が叫ぶ。

「そんなことが出来るんやったら、俺んちも狙われるかも知れんやん！」

急に錨はそわそわし始めた。

「ああ、今進行中の台本とか資料とか！　あ、ＶＨＳテープ資料は勿体無さ過ぎる！　九

十年代のオンエアチェックやでアレ！」
「小山文具店が焼かれたら、私はどうすればいいんだ。もう手に入らない『タイガーノート』は？」
「諦めなさいよ」
桜桃（チェリー）だった苺は、ストレスによって別人格に入れ替わった。
「あ、冷静で計算高い林檎（アップル）です。私は食いしん坊で大量の冷凍食品を家に買い溜めてありますが、焼かれれば黒焦げですね」
「あ、蜜柑（オレンジ）です！　ポップコーンがあったから、ポンポン飛び跳ねて綺麗かも！」
「そんなわけねえだろ！　あいつらに先手を打って、こっちから総攻撃しようぜ！」
「龍果（ドラゴンフルーツ）、落ち着いて。あ、統合役の葡萄（グレープ）です。高橋さん、お悔やみ申し上げます」
次々に人格が変わるのは、不安定な心の証拠。千波は苺を抱きしめて、「大丈夫」と伝えようとする。
「……私も、大事にしてた本が一杯あるんだけどなあ……」
千波はもう失われた前提での、未来形で語る。
「闘うとは、こういうことよね」
既にニュース映像は停止していて、炎が止まったままになっている。現実では鎮火して、今頃黒焦げのアパートを前に、解体の算段でも立てられているだろう。
高橋は長野の山中で見た、地面を奪い合う根っこのことを思い出していた。「他人」はどうして俺の領域に根を入れてくるんだ。

「儂は、今夜にでも攻め込むべきだと思う」
小山が作戦会議で提案した。
「小山文具店を焼かれたら儂のダメージは大きいよ。夢の中では何度も文具店を壊して遊んだが、それは『現実にはなくならない』という安心感があったからなんだな」
錨は賛成に手を挙げる。
「いつやっても一緒やろ。周りにどんだけ協力者がいようが、頭潰したら組織なんてバラバラやんけ」
苺は手を挙げた。
「私は今葡萄（グレープ）です。苺はおなかすいたと言って出てきません。梨（ペアー）は絶望しているので、脳内投票では二票棄権でした。二十五対二十一で、『今夜に攻撃』と『私』の中では判断しました。あと」
「あと？」
「桜桃（チェリー）から千波さんにメッセージを。『頭撫でてくれてありがとう。千波も疲れてるのに。車の中じゃ、シャワーも浴びられないしね』って」
「ありがとう、大丈夫。夏場じゃなくて良かった、くらいにしか考えていない」
千波は長い袖で火傷の跡を隠しながら言う。葡萄（グレープ）は続ける。
「私も小山さん、錨くんに賛成です。情報が増えたって迷いが増えるだけ。私は静尾くんの仇討ちが出来たら死んでもいいです」
「あなたが死んだら私は悲しむ」
千波は苺の手を取った。

「じゃあ、千波サンも攻め込むべきに一票かいな」
「私は『横浜の予言者』とコンタクトを取るべきと思った」
「じゃあどっち？」
「待ちたいです」
「高橋（タカハシ）は？」
「……」
高橋は現実にいながら、こここそが夢の中ではないかと思えてくる。違和感が拭えない。思わず千波に助けを求めるように見た。
「高橋君のショックが大きいみたいよ。十分に闘える状態じゃないと私は思う」
千波のフォローを聞いて、錨は溜息をついた。
「三対二やな。今夜襲撃」
錨がまとめる。
「ちょっと待ってよ勝手に」
「じゃあ、夜まで待つ。それでどうや」
「強引に決めないでよ」
「あのな！　俺らの命がかかっとるんやぞ！　いつ殺されるかも分らん！　帰る所が焼かれるかも分らん！　今一気に五人でやってまえばええんや！　高橋が無理なら四人でやるんや！」
小山がふと言った。
「静尾くんなら、どっちって言っただろう」
再び沈黙が訪れる。
「あ。檸檬（レモン）ですが。『さっさとやっちまおうぜ！　チンタラやってんじゃねえよ！』だと思います」
毒舌人格の檸檬（レモン）は、サイレント・ドクターのことをよく理解している。
高橋は「他人たち」へ向けて、ようやく口を開いた。静尾が手を貸してくれたと思った。
「俺は人生の初心者だ」
「……で？」
「今のみんなは、会う前の誰かに見える」
「？　どういうことや」
「つまり……他人にだ」
「は？　他人は他人やろ」
「いや、私は高橋君の言いたいことはなんとなく分るぞ」
小山が感づいた。
「我々は仲間だった筈じゃないのか、そう言いたいんだろ？」
高橋は小さく頷く。錨が苛々しながら言う。
「あのな、子供じゃないんやで。仲間は仲間やけど、他人は他人やんか。それぞれの都合で、それぞれの理由で、今ここにおるだけやろ。毎度毎度一枚岩なわけないやんけ」
「そうね」
千波は冷静だ。
「最初から呉越同舟。それが他人だと思う。でも舟の目的地は同じな筈」

「……」
高橋が沈黙を破った。
「魔境」
「なんや高橋(タカハーン)」
「これは魔境だ。やつらは他人同士の魔境をつくったんだ」
「はあ？　何のことや？　ここは夢ちゃうぞ。現実やぞ？」
「火をつけた目的が、この仲間割れの為だとしたら？」
一同は再び黙る。
「疑心暗鬼。それこそこの世の魔境とな」
小山が呟く。高橋はうなづく。
「個人の魔境が、その個々人の恐怖だとしたら、集団の魔境は何か？　分断(スプリット)、内紛、内乱、疑心暗鬼。それが手っ取り早くないか？」
「互いが互いを信じられる状況を削る。成程ね」
千波は感心する。
「火付け流言は、戦国時代から忍者の仕事か」
小山が忍者のドロンの真似をした。小山の趣味は史跡巡りで、先日小田原城と風魔忍者の里へ行ったばかりであった。
「魔境は、無視」
高橋が言い、千波が続く。
「呉越同舟は最初からよ。私たちは生まれも性格も人生の目的も、障害も弱点も異なる、ごった煮の集まり。喧嘩もすれば、やり方で揉めることもある」
高橋はうなづく。
「だけど、目的はひとつか」
高橋は車のドアを開けた。誰一人、降りなかった。
千波がまとめる。
「今夜まで『横浜の予言者』を待ちましょう。状況に変化がなければ、今夜轡の夢の中へ侵入。素早く二回殺す。ただこれだけを考えます」

6

夜が来た。
関門海峡を渡り、九州へ入った。人の多い福岡を避け大分へ入る。万全を期し、街から離れ山中に車を停めた。そこには名も知らぬ小さな湖が広がり、ただのキャンプ客だと思われるだろう。
月は新月。灯りも反射しない黒い湖面が、人知れずさざ波を立てている。
謎の男――「横浜の予言者」からの通信はなかった。
今夜。皆の心は一致した。
毛布にくるまり、眠りに入るまで、少し話した。
「最後の晩餐食べとけば良かったわよう」
ようやく苺に戻った人格が、小さく呟いた。

「終わったら、明日の朝フグ食べに戻ろうよ。せっかくの下関だったのに」
「朝からやってんのけ？」
「どっかにあるでしょ。本場よ？」
「せやな」
「別府が近いんだから、温泉に入りたい」
と小山が言う。
「いいわね」と千波が乗っかる。
「肩の力、少しくらい抜きたい」
高橋が「ふん」と笑う。
「どうしたの高橋君」
「ここでも仲間割れかよ」
「そうかしら？」
千波は笑う。
「温泉に入ってから、フグ食べに行きましょうよ」
皆、黙った。これで夢に入れる、と思った。
その時、高橋のスマホが震えた。
「何？」
高橋は起き上がる。
「……来た。『予言者』から」
高橋はその短いメッセージを見て、確信を深めた。『有楽町のガード下へは？』とあったからだ。
「完全に、内部の密通者だ」
『勿論だ。会えるか？』
素早く高橋はメッセージを送る。
「ちぇ、今夜まで、いう約束やったな。決行は中止や。せっかく『いてまえ』気分やったのに」
錨が残念そうに言う。
「でも温泉とフグはやろうね」
苺はガハハと笑った。
それぞれの姿勢で毛布にくるまったとき、再びスマホが震え、『横浜で』と返事が来た。
「横浜へ呼び出された」
「よし。明日は飛ばすで。東京へ戻ろう。早めに起きようや」
「そうしましょう。じゃ、いったんおやすみなさいで」
小山が冷静に言った。
「一端家にも寄って、それぞれ惜しい荷物を纏めよう。どっかレンタル倉庫に預けでもいい。新しい車にも乗り換えるべきだ」
「そうね」
「高橋君は小山文具店の余った部屋使っていいぞ。布団で寝たいだろ」
「……有難うございます」
「体勢を立て直しましょう」

千波の言葉を聞きながら、皆眠りについた。

どうやって眠ったか、覚えていない。

意図的に明晰夢に入ろうとしたっけ？

高橋が気が付くと、車の中には誰もいなくて、車内灯がついていた。

「え？」

前の席に、轡が座っていた。

「は？　何？」

反射的に体を起こし、白い仮面を被ろうと手をかざす。轡は長い髪を靡かせ、微笑んで手で制した。

「その必要はないよ。高橋君」

相変わらず、屈託のない顔をしてる。こちらは殺す覚悟だというのに。轡はまるで親友に言うように笑った。

「僕は敵じゃない。何故なら今夜、僕は君を迎えに来たんだから！」

「……は？」

「僕は君を口説きに来たんだ。仲間にならないか？　君には才能がある」

轡はいつも微笑んでいる。それは純粋な子供のようで、悪意のかけらもない。ひょっとするとこの男はただ遊んでいるだけで、恐るべきテロリストは、彼を利用した悪意ある他の者の陰謀なのではないか？　そう思わずにはいられない。それほどまでに、彼の顔に邪気はなかった。

「ぶっちゃけ、〈空飛ぶサークル〉は人手不足でね。力を持つ人が欲しいんだよね。本当のことを言うと、幹部はたった二人しかいなかった」

「……え？」

「僕と衛本さ。そして衛本は死んだ。別に君等を恨んでないよ？　衛本が弱かっただけさ。でも僕は信頼できる仲間が欲しい。だから高橋君をスカウトしたい」

轡は子供のように身を前に乗り出した。甘い香りが漂う。

「君ほど自在に空を飛べる奴はいないぜ？　世界の改変能力も、光より速いスピードも凄いよ！　どれだけ夢の中で時間を使ってきたか僕には分る。僕は今まで色んな明晰夢者に会ってきたけど、インドの行者にもチベットの僧侶にも、ここまでの『力』の人はいなかったさ！　『黄金の夜明け団（ゴールデン・ドーン）』の魔人アレイスター・クロウリー以上の才能、うん、たとえて言うなら、魔術師シモン並みだね！」

「シモン？」

「二世紀に実在した魔術師シモン・マグスさ！　黒衣のマントに身を包み、ヘレンという娼婦を連れ、空中浮揚して奇跡を起こした。その後の全ての『異なる神を信じる者（グノーシス）』教派の祖となった人さ。ねえ。死んだ人はどこへ行くと思う？」

突然轡は無邪気な目で高橋の瞳を覗き込んだ。男でもドキリとする美顔だ。

「どこへって、……どこへも行かない。消えるだけだろ」

サイレント・ドクター静尾も、サイケデリック・プレイヤー衛本も、もうどこにもいないのだ。肉体は焼かれ、自我の中心である脳味噌は、停止し、永遠に消失した。魂なんてない。千波はそう言った。

「それがさ！」

子供のように轡は瞳を大きく見開いた。秘密を教える少年のようだ。

「内緒だよ？　俺、魔術師シモンに会ったのさ」

「は？」

「魔術師シモン（シモン・ザ・メイジ）は肉体を捨てて、アストラル界で永遠の魂体として存在する。そのシモンにようやく会えたんだ！　向こうからこっちの世界は全部見えてるんだって！　まだまだ明晰夢の世界は深すぎて全貌は把握できない。でもぼくはそれを奥深くまで明らかにしたいのさ。『ファスター』ならどこまでも飛べるし、どこまでも到達できると思うのさ！」

こうやって彼は人を口説くのだろうか。こんなに無防備にキラキラした目を見せるとは思っていなかった。自分が女ならぐらりと来たかも知れない。自分を認めてくれた人に、人は何かを返したくなる。

「〈空飛ぶサークル〉の本当の目的を教えて上げる。テロはあくまで資金稼ぎさ。本当は、明晰夢の秘密を解いて、不老不死を得ることなんだよね」

「……は？」

「シモン・マグスになるのさ。僕らも」

「……」

この男は何を話しているのだ？　高橋は訳が分らなくなってきた。轡は混乱に追い打ちをかけてくる。

「実は立花涼子は、次元上昇（アセンション）に成功した」

「？」

「肉体を捨てて、魂体（アストラル）になることに成功したんだ。彼女はオリンポスにいるよ？　会わせてあげようか？」

美しい裸のまま朝焼けの街に飛ぶ、栗色の長い髪。

喉が渇く。汗が出る。頭の中は混濁し、何が真実か分らなくなる。

「正直、千波なんかと組むのは君の能力の無駄遣いさ。みんな君の力を過小評価してるだろ？　君は、もっとやれるのに」

「……煙草を吸っても？　……落ち着きたい」

「どうぞ！」

高橋は車の窓を開け、冷やりとした外気を入れ、右尻のポケットに入っていた煙草に火をつけた。秋の入りとはいえ、夜気はもう冬のようだ。錨と冬は雪が積もるかな、などと話したことを思い出す。

高橋は、煙が煙草から出ているのに気づいた。

「どうかした？」

轡が高橋の心の動きに気づく。高橋はゆっくりと顔を上げた。無表情をつくりながら、ふつうの表情でなければならない。話を繋がなければ。勘付いたことを、勘付かれてはならない。こういう時コミュ障は楽だ。立花涼子に、「君は何を考えているか分らない」と言われた。高橋はその顔のまま、話を繋ぐ。

「いや、ふとうるさい錨のことを思い出してね。みんな、どこへ行ったんだろう？」
「ここは改変された世界の中だよ？　隔離された場所」
「じゃ外へ出ると？」
「普通に湖が広がってる」
「開けて確かめても？」
「なんで？」
「俺だったら、塔の上とかに車を置く、と思って」
「逃げられないように？　でも君飛ぶじゃんどうせ」
「はは。そりゃそうか」
何気なく高橋は車のドアを見た。轡がつられてそこに目をやった瞬間、高橋は右拳で轡の頬を殴った。
べきり、と骨の音がし、高橋の右拳には鋭い痛みが走った。
「はあ？」
驚いた顔の鼻柱に左拳を返す。ばきり、とさらに音がする。アドレナリンが沸騰する。拳は痛い。だがそれどころでない。頬を抓るまでもない。拳の痛みがここが現実であることを伝えてくる。分かってる。痛ェ！　痛ェよ！
高橋は車のドアに体当たりし、全力でスライドした。
漆黒の夜の湖。
その草むらに転がった。夜露で濡れた草は冷たい。肩が痛い。膝も擦りむいたか。
「なんなんだよ、高橋君！」
鼻血を両手で覆いながら轡は叫んだ。高橋は体を起こす。
「嘘つきが！」
「は？」
「なぜ偽者を寄越す！　ここは夢じゃない！」
高橋は闇の中へ走り出した。
「クッソ！　クッソ！」
偽轡は血で染まった手を伸ばし、車内灯を三度つけ消しした。
三発の銃声。すぐそばの地面がえぐれる音がした。さらに三発。銀の車に当り、火花。今夜は新月だ。漆黒の闇。狙撃手（スナイパー）がいるのか。高橋は伏せる。匍匐前進なんてしたことがないが、やるしかない。肘が痛い。膝が痛い。どこへ行くべきだ？　とにかく車から遠くだ。灯りは車からだ。遠ざかれば遠ざかるほど、狙えなくなる。
ここは夢の中じゃない。「他人」で溢れ返る、現実だ。
偽轡は車のエンジンをかけ、ヘッドライトをつけた。車を転回させ、高橋が逃げた方向へ向ける。ビームを避けるように高橋は身を低くし、音を立てないように匍匐する。
車の場所が漏れたのか？　頭を回転させろ。回転させるんだ！　ここは現実だ。皆はどこだ？　何故彼らの「現実の侵入」を許した？　考える暇はない。ライターに火をつけ、自分の走る方向と逆へ投げた。銃弾がライターを撃ち抜くのを背中で感じた。
暗視スコープみたいなのを彼らは持っているのだろう。一か八か、スマホのライトを最大にして、再び逆方向に投げ、暗視スコープを焼きつかせられないか試す。偽轡は自分の逃げる方向を見たか。とにかく全力で走る。ジグザグに走ると結局おおむね真っすぐ走っ

てしまうらしい。それじゃ意味がない。ジグザグ五分、左へ五分。
草むらの感触が砂利に変った。音で知らせることになる。靴を脱ぐ。それでましになるか。とにかく走り、立木で身を隠せる所へ。前は見えない。何も見えない。

どこへ走っているのかも分からない。高橋は何かにつまづいて転んだ。
最初はマネキンの頭部かと思った。いや、何故マネキンの頭がこんな草むらに転がっている？　見慣れた形をしていた。少し小さな、禿げ上がった頭。
小山の頭だった。
「うわあああ！」
叫び声を上げた。銃弾が二発。外れる。さっきとは違う方向からだ。移動している。彼らも。
高橋は身を低くし、ぎゅっと目を瞑り、小山さんの冥福を祈る。これが夢の中なら、かっ飛んでいって「敵」の首を狩れるのに。対抗する手段は何もない。まず自分の命を守らなければ。みんなどこへ行ったんだ！
近くで水の音がする。激しい水の音。争っているのか。音の方へ。それもトラップかも知れない。だが車椅子が投げ出されている。千波の毛布も。
「千波！」
心の声を張り上げる。ここは夢の中じゃない。高橋は飛べやしないし、世界を改変できない。千波は歩けず飛べず、全身の火傷で満足に手足をばたつかせることすら出来ない。水で津波をつくることも出来ず、黒づくめの男に組み敷かれ、頭を掴まれて何度も湖の中に顔面をつっこまれるがままだ。
水の中の折檻。最も千波が恐怖する手段を知っている。高橋は全身の血が沸騰し、男に体当たりした。光の速度ではない。だが大人の質量が当たったのだ。不意をつかれた男は、湖の中へ落ちた。
赤い信号弾が森から上がった。狙撃手の方向から逃れるように、高橋は千波の手をひったくり、地に伏せさせ、転がった車椅子の背後へと引っ張った。
もう一発信号弾。狙撃が車椅子を狙う。俺達は向こうから見えているのか。それともやけくそか。
水に落ちた男が這い上がって来た。彼から俺達は見えているのか？　いや、信号弾の明るさに目が慣れたら、車椅子の裏までは見通せまい。黒い車椅子。千波の黒い服。見えていない。
高橋は賭けた。大きな石がある。男が車椅子の脇を通り過ぎた瞬間、背後から後頭部にその石を打ちおろした。何度も何度も、硬い、柔らかい手ごたえを感じた。
草むらを走る。千波は走れない。おぶった。二人分の体で走る。
どこへ？　とにかく遠くへだ！
「降ろして」
千波は背中で言う。湖の藻の匂いがする。暗闇で見えないが、彼女の先程の苦しみが感じられた。
「足手まといになる」
高橋は答えなかった。声を出したらくじけそうだった。

車をどこからこの湖に入れたかを思い出す。入口は固められているかも知れない。山に入り、森に入り、人里に出るしかないのか。裸足が痛かったが、もう感覚がなくなりつつある。

林だ。枝が顔に当たる。根が足を絡め取ろうと待っている。千波を落とす訳にはいかない。手探りで幹を掴み、一端千波を降ろして座りこんだ。

「木を背にして。一回休む」

それだけ言うと、必死に呼吸をする。心臓が爆発しそうだ。エンジニアが運動得意なわけないだろ。畜生。

「ありがとう」

呼吸が落ち着いてくると、千波は小さく呟いた。普段強気な彼女とは違っていた。

「小山さんの生首を見た」

高橋も短く小さな声で言った。

小山さんは惨殺された。名も知らぬ湖のほとりで。何の為に。俺達に声を上げさせる為か。小山文具店のシャッターを開けるのは誰なんだ。ペンキを塗り直すんだろ？　あの番台には誰が座る？　沢山の文房具は？　小学生飛び出し注意の看板は何の為に残るんだ？

無限の時間が過ぎた気がする。下手に動かず、夜明けを待ったほうがいいのかも知れない。しかし包囲網は今にでも縮まっているかも知れない。黒い森。黒い湖。この場に一体何人投入されているのか。千波を背負い、走る。どこへ？　俺は今狙撃手へまっすぐ向かっているとしたら？

闇を突如、赤いランプが切り裂いた。救急車だった。ハイビームが林を切り裂き、少しだけこの辺の地形が分る。

「通報された方ー！　どこですかー！」

救急隊員が懐中電灯で辺りを探った。

「警察も間もなく来ます！　通報された方！」

警察という言葉が効いたのか、襲撃者たちの気配が消えたような感覚があった。救急隊員ごと狙撃することは出来ただろうからだ。

千波の車椅子とは逆の方向に、スマホのライトを振る手が見えた。救急隊員が走る。彼らは撃たれない。やはり襲撃者は去ったのか。

「オイ！　ストレッチャー！　血まみれだ！」

背筋が寒くなる。撃たれたのか？

懐中電灯が照らした、血まみれの巨魁を見て、千波は口を覆う。

「苺」

高橋は最後の力を振り絞り、千波を背負って走った。

「救急車に乗せてもらえば、街に出られる」

「あああ。千波ィィィ。高橋くううううん」

苺は血まみれで涙まみれだった。千波は血のつくのも厭わず、苺を抱きしめる。

「黙って。傷が開くから！」

「何が何だか、わかんないようううう」

「俺だってそうだ。起きたら誰もいなくて」

高橋が叫ぶ。走る救急車の中、何が一体起こったのか、三人は確認しあった。
「私も起きたら車椅子から投げ出されていた。しかも眠った記憶もない。最初は夢の中かと思った位」
「俺もそうだ」
「ちくしょう。ちくしょう。何なのようこれ。あいつらの仕業なんでしょう？　痛いわようう。血が止まんないわようううう」
病院まで何時間かかったろう。
苺は手術室に運ばれ、遺体となって出てきた。
警察が来る前に、高橋と千波は闇の中へ姿を消していた。

7

コンビニでシャツを買い、前の服は捨てた。目撃されないように夜行を乗り継ぎ、二人は早朝東京に戻ってきた。
「……あ、家焼かれたんだった俺」
「私の部屋へ」
約束通り、小山文具店の部屋を借りる、と高橋は言おうと思ったが、今また襲われるかも知れないし、千波が何もできないかも知れない。別行動は危険だ。
二人は部屋に入ると、泥のように眠った。夢を見る余裕すらなかった。
目を覚ました時、高橋は自分が何処にいるのか全く分らなかった。コンビニで買ったグレーのシャツを来た千波が傍に寝ていて、高橋は昨夜の悪夢を思い出す。
「……夢じゃないよな」
光の中、千波はゆっくりと目を開けた。
「多分今が現実で、ここは私の部屋で、……合ってる？」
高橋は念の為煙草に火をつけ、流れる煙を見てから消した。
「御免。これ俺の『夢の中かどうか判定する方法』」
千波はトルコ石のネックレスの銀の部品を弾き、くるくると回す。ほどなくそれは摩擦で止まる。
「夢の中じゃないようね」
高橋は周囲を見渡す。頭が痛い。体中に擦過傷や打撲がある。手足も痛いが、動かすしかない。千波の部屋はシンプルで、大きな本棚とサボテンしかなかった。たくさんの本が、そこに収まりきらず溢れ出している。それが彼女の内宇宙。それは孤独な時間と引き換えだったろうと、高橋は理解する。
「小山さんは死んだ。苺サンも。錨は？」
「見てない。殺された？　拉致されたかも」
「何が起こったか、詳しく思い出そう」
〈空飛ぶサークル〉のテロを予告するツイッター。一度のメッセージのやり取り。横浜へ向かう筈だった予定。
「そうだ。横浜へ行かないと」
「私たちの居場所がやり取りで漏れたってことは？」

「権限は切ってある。仮にbotがハッキングしてきても、偽の居場所――北海道の座標をGPS情報として渡すようにしてあった」
「じゃあ何故」
「分らない。尾けられていた？」
「あるいは、誰かの夢の中から情報が漏れて？」
「移動しつづける車の景色から、場所が特定できるものだろうか？」
「……」
分らない。何もかも不可能だ。高橋はふと気づく。
「この部屋に盗聴器は？」
「……確かに。仕掛けられていない保証はない。これ以上の会話は夢の中にしましょう」
「……とはいえ、そう眠れないな」
「私も」
ようやく二人は体を起こした。シャツの長袖から彼女の白い腕がむき出しになり、反射的に火傷痕を彼女はシーツで隠した。

飯を食わなければ。失われた車椅子を買おうと高橋は言った。
「安いものなら一万円台で買えるけど、通販よ」
「そうか。……面倒だな。ネットに繋がっていないリアル店は？」
「身障者センターに出願すれば」
「足がつく。通販で待つしかないか」
その為にPCを買わなければ。車ごとあの湖に何もかも置いてきてしまった。データは暗号化していたし、メモリ消失のトラップも仕掛けてある。情報が取られることはないだろう。
「……横浜へ行くべきか、千波サンを置いて」
「『達磨』は邪魔になるからね」
自分のことを皮肉って言う彼女に、ずっとそう悪口を言われてきたであろう彼女の半生を想った。
「俺だって『石』だったよ。喋らないって意味でね」
「……」
「でも、千波サンたちに会えて、俺は変わったと思う。これでも感謝してる。伝わらないかも知れないけど」
「……大丈夫。多分伝わってる」
買い出しは、食材と中古のノートPC。車椅子は足のつかない受け取り場所指定方式で。
コンビニ飯でいいという高橋に、千波はちゃんとしたご飯で回復すべきと主張する。自炊の出来ない高橋に代わるという。自炊出来ないと一人で暮らしていけなかったので、と千波は笑う。オリーブオイルとニンニクを炒める匂いで、高橋は急に胃袋が鳴き出した。
二人前の、ベーコンと牛肉とキャベツのパスタ卵かけ。
「うめえ」
「お粗末様です」
手早く作った簡易版。しかし一口食べた瞬間、高橋は泣いてしまった。

あの夜のことを整理した。
小山さん、苺が殺されたこと。目撃はしなかったが錨も。いや、生きてるとして、人質になっているかも知れない。足のつかないスマホから連絡するも返事はない。今晩明晰夢で探せるか？
「何故俺の所に偽轡を寄越したんだろう？」
「分断作戦？　しかし魔術師シモン（シモン・ザ・メイジ）まで持ち出すとは……」
「不老不死の話って本当なのか？」
「魂体（アストラル）になって次元上昇（アセンション）するという話はよく聞く。それを『解脱』と言い張る宗派もある。でも成功した人っていないと思うのよね。だからむしろ詐欺に使う。『出来ないのは、あなたの努力が足りないから』ってのは、信者をカモる古典的手段」
「……立花涼子は、アストラル界にいるってさ」
「それも動揺させる為の釣り玉でしょうね」
「……」
偽轡を思い出す。自分が他人の顔を殴る勇気を持っていたことに、自分で驚いている。
「あれは役者か何かを整形して、偽物に仕立てたんだろうか？」
「多分ね。ネットで噂になったのなら、同じ顔が現実にいたら誰かが先に見つけてしまう筈だし」
「本人が整形してきた可能性は？」
「なくもない。でも現実でもそんなリスクを背負うかな」
アラームが鳴った。横浜へ向かう時間だ。
高橋は立ち上がった。
「多分、例の予言者は現れないんじゃないかと思っている」
「どうして？」
「奴らの陽動だったんじゃないかって。忍者の攪乱戦術と同じ」
高橋の予想通り、誰も現れなかった。待ち合わせの喫茶店のカメラをハッキングして、待つ高橋を遠くから見守る者がいるかどうかも確かめた。
「リアルで会うのが怖いんだな？」
高橋もずっとそうだった。今はどうだろう。

8

再び夜がやって来た。錨の生死確認をするべきか、轡の夢への侵入を優先するべきか迷う。
「生きているうちに闘いたい」と千波は主張した。
「闘うなら……」
高橋はある決意を秘めている。
「闘うなら、何？」
万が一の盗聴を考え、「続きは夢の中で」と高橋は言う。

夢の中でターコイズブルーの瞳、ショートカットの黒髪に会う。最初に会った時から、随分と時が経ったことを思う。
「納得行かなかったら、やるわよ」
「ああ」
「何？」
「俺、オリンポスに登ってみたいんだよね」
「どういうこと？」
「君の背中には、オリンポスで消息を絶った多摩川准教授の残影がいる。それが君の弱点だ。その棘を抜きたいと考えた」
人の弱点に土足であがる。もう少し柔らかい言い方があったかも知れない。だがそんなことをは考えている暇はない。それは千波も理解する。
「……具体的にどうするつもり？」
「分らない。だから登ってみたいんだ。オリンポス山が実在し、登ることが出来るなら、そこに何があるか見たい。多摩川准教授が知ろうとしていたことを見て来たい。……それで、千波さんの弱点が晴れるのかは分らない。でも」
「でも？」
「何もかも分らないまま死ぬのは嫌だ」
小山、苺は何も分らないまま死んだ。静尾だって雷と分る前に死んだ。「分って死ぬこと」とはどういうことだろうかと高橋は思う。それが分らないから、分りたいのか。トートロジーだな。
「……気持は分ったわ」
そうだ。明晰夢は無意識の世界だ。考えたことは、繋がって伝わる。千波が最初に言っていたこと、「味方の味方になること」とは、こうした無意識の理解が前提かも知れない。
千波はふと変な笑いを漏らした。
「？」
「多摩川は世界がどうなってるか知りたいと言った。少しだぶるなと思って」
「……朝俺が死んでたら、ごめん」
千波は一緒に行きたいと言うかと、高橋は思った。だがファスターの能力がないと飛べないだろうとも思う。互いの理解は伝わりあい、千波はうなづいた。
「限界まで飛びたいのね？　ファスター」
高橋はうなづき、体を空に投げた。

雲を超える。濃紺の空が暗くなってゆく。足元は世界のディテールを失い、地球になってゆく。
成層圏を超えれば、空気抵抗は小さくなる。ごく薄い大気があることは、知識としては知っている。人工衛星が見えた。ここまでは誰でも来れる。轡は最初、気象衛星ひまわりまで行ってきたし。
鼻を焼くような匂いがした。真空中は無臭ではなく、金属の焼けたような匂いがすると聞いたことがある。無音。低い耳鳴りと、心臓の音がする。
世界は七層で出来ている。神智学の祖、ヘレナ＝ブラヴァツキー夫人はそのように言い、

「秘密教義（シークレット・ドクトリン）」を著した。インドの僧クートフーミ導師たちから授かった教えで、偉大なる魂（マハトマ）たちはヒマラヤ山中の大白色同胞団（グレートブラザーフッド）を組織しているという。その本拠地はゴビ砂漠の中心の仏教王国（シャンバラ）。そこは物理世界ではなく、何層にも重なった宇宙の、上の層に位置するという。彼女は世界の真理は「七」であると説いた。宇宙は七層ある。すなわち物質界、アストラル界、メンタル界、ブッディ界、霊的界、モナド界、神的界。すべての太陽は六つの惑星を持つ。地球にも六つの相棒がいる（そのひとつが惑星ニビル）。宇宙は七つの時代を転生（いま第四期）、人類は七つの種へ進化する（第一は肉体を持たぬアストラル体。第二はエーテル体で北極のハイパーボリア大陸に生息、グリーンランドに痕跡がある。第三は両性具有で卵生、四つの手を持ち頭の後ろに目がひとつある猿型で、レムリア大陸にいた。第四は巨人で知識が高く、アトランティス大陸に。第五が現人類で大僧達（マハトマ）が進化させたアーリア人だという。第六が現在北米で誕生しつつあり、次に浮上した大陸で進化する予定。第七が究極形）。

この聖典は一八八八年に書かれ、ニューエイジのバイブルとなった。しかしアポロ十一号が月面着陸する一九六九年より八十年も前だ。フロイトの無意識の発見と同時期である。しかしキリスト教の宗教観に限界を感じていたアメリカの人々が、「もうひとつの原理」としての東洋や古代に縋ったのは確かだ。オリンポスは、第何層にあるんだ？　高橋は地球を眺め、暗く、静かな宇宙を眺めた。世界は波動（バイブレーション）で出来ているという。それらの重なり合わせが現在の世界であり、特定の波長にチューニングすることで「世界の別次元（アセンション）へ行ける」とも。高橋はここに何層もの宇宙が重なり合っている様子を想像（イメージ）する。

漆黒の宇宙が突如シャボン玉の表面のように、七色渦巻く海へ変化した。まるで衛本のインナーワールド、極彩色遊園地（サイケデリック・プレイランド）に似ていると高橋は感じた。人間の深層意識には、こうした模様が実在するのだろうか。ここは高橋の脳内なのだろうか。それとも人々の繋がった無意識の中なのだろうか？　人間個別個別に、脳内に共通世界があるのだろうか？　分らない。行ってみるしかない。

上昇するのか、下降すればいいのか、高橋には分らなかった。七色の流れは止み、深海のようなブルー一色の層となった。耳鳴りが聞こえるほど静かだ。次に痛みの襲うはげしい突起物が体中に当るのを感じ、金色に光り輝く世界となった。これが切り替わる度に一層ずつ抜けているのかは分らない。ラジオのチューニングで言えば、間に入る雑音（ノイズ）の部分かも知れない。前に進んでいるのか、後ずさっているのか、方向感覚も分らない。空を飛んでいる時のように。

体外離脱――解脱とは、高次元への意識の転送と考える者たちがいる。肉体や欲望に囚われない、高次進化こそが人類の目的なのだと。何故人は殺し合うのだろう。進化してない愚かな人だからか？　進化した人類は、テロを起こしたり、偽者に化けたり、暗い所で人を殺さなくなるのだろうか？　進化した人類は、他人とどう付き合うのだろう？

猛烈な風があり、高橋の体は巨大な白い空に投げ出された。

ファスターだったから、対応出来たのかも知れない。普段夢の中で飛んでいたから、戦闘機乗りやアクロバット飛行機乗りのような空間把握能力があったから、岩肌に叩きつけられず回避できたのかも知れない。高橋の半生をかけてきた妄想は無駄ではなく、高橋の命を救った。

空中で態勢を立て直す。風に体が負ける。流されて、固いアイスバーンの雪面に貼りついた。滑る。冷たい。指が痛い。重力に負けているのか、風に負けているのか。飛べ。あそこの岩陰で風を躱せ。氷粒が頬を掠める。身を斬られる。

見渡す限り白、と言いたい所だが、見渡す余裕すらなかった。足元しか見えない。強風に立てば体ごと持っていかれるだろう。岩陰の雪はパウダースノーで、手足はずぶずぶと埋もれてゆく。風はそのパウダーを引き剥がし、白い嵐へと循環させていく。

俺はファスター。光より速い男。だとすると風より速いだろ。高橋は自我を取り戻す。

風が見える。風の間を縫って行けば、流されることはない。静尾の「認識」には劣るが、空気の粒を見ていけばよいのだ。

ここは、オリンポスだろうか？

あの日からグーグルマップで、色々な実在の雪山の形を高橋は調べた。しかしそのどれとも千波の背中に見えた山とは違っていた。

「世界がどのようになっているか」「それらがどのようにして出来たか」「それらはどのように最終的になるのか」に、人類は納得いく答えを持っていない。そして人類の目的も、人が何故殺し合うかも、人が何を目的として生きるべきかも、解はない。神話や哲学がまず答え、宗教が取って代わり、科学が覆した。しかし未だにビッグバンは仮説に過ぎず、宇宙の外に何があるのか、宇宙が光速より速く膨張している理由、宇宙以前には何があったのかについて、科学は答えを持たない。そしておそらくその解明を待つ時間は、人類にはあっても個人にはない。

仏教によれば世界の中心は須弥山（しゅみせん）であり、この上空十二由旬（ゆじゅん）の距離に兜率天（とそってん）があり、五十六億七千万年後に地上を救う予定の弥勒菩薩（みろくぼさつ）が修行中らしい。インドにおいては世界の中心はマハ・メル山であり、七つの金山と八つの海がこれを囲むという。あるいは更に昔、シュメールやメソポタミアの民は、七層から成る人工山ジッグラトをピラミッドのように建て、神の住まいと位置付けた。バビロン王国のジッグラトが、その四百年あとに書かれた旧約聖書「創世記」の「バベルの塔」のモデルと言われている。

高橋は上空を見たが、白しか見えず、兜率天は見えなかった。周囲を囲む金の山も、七つの海も、ただの白に遮られ、神も雷も見えなかった。ただ固い氷の粒が高橋の頬を、手を、全身を、叩き、切り刻むのみである。

「地獄かよ」

高橋は呟いた。天国のような山、仙人の住む深山ではなく、雪嵐が吹きすさぶ、命のない孤島。雪山で亡くなる登山家は、こういう気持ちなのだろうか。

――帰れるのか？

高橋はふと恐怖に囚われた。どうやってここに来たか分らない。念じて来ただけだ。念じて帰れるだろうか？　元の場所に。

白い煙の中に崖が見えた。反対側は絶壁で、遠くには尾根が見える。左右に嵐を分ける分水嶺のようだ。左右ともに死の谷底へ続くのだろう。

多摩川准教授は、何処へ行って死んだのだろうか。高橋はここへ来た目的を思い出す。クレバスに落ちて死んだのか、兜率天を目指して飛び、風にあおられて落ちたか。

地図を作ろうとしたのではないか？　俺ならそうするから、と高橋は思う。見晴らしの良い場所からスケッチでもするか？　歩測による測量の知識は高橋にはない。とりあえず、

峰に立って「そこに何があるか」を確かめようとしたのではないか？
何の確信もなく、高橋は嶮しい峰を見た。視界はやはり白一色で、たとえそこに立っても周囲を見渡すことは不可能だ。
その峰の向こうに光が見えた。
そこだけ空が割れて、一筋の光が漏れている。その光はいくつかの峰の先、反対側の崖下を照らしている。割れた空の向こうは、ターコイズブルー。千波だと高橋は直感する。千波の無意識。無意識に繋がっている紐帯。高橋はカウンセラーでも精神治療者でもない。千波のトラウマを取り除く方法を知っている訳でもない。だが、自分が楽になり、肩の荷が下りた方法は、すでに体験していた。弱点を誰かと共有することだ。弱点は一人で抱え込むから闇なのではないか？　千波は、背中を誰にも見せてこなかった。本当に彼女が怖がるものを、今度は俺が共有するべきではないか？
飛ぶ。
嵐を突っ切る。光よりも速く。視線よりも速く。そう彼女は教えてくれた。高橋は、この世の誰よりも速く飛べる。突き刺さる氷たちが壁のように思えた。高橋はこれまで人生で壁に当ったとき、いつも諦めて逃げようとしたと思う。人とコミュニケーションを取るのが苦手なのは、他人という壁から逃げた方が楽だったからだ。高橋は他人の「目」を避けてきた。自分が潰れてぺしゃんこになってしまうからだろうか？　高橋は目の前を掻き分ける。氷の壁、風の壁を掻き分け、前に進む。一回までは死ねる。死んでから考えろ。壁を破らねば前に進めないのなら、破ればいい。掻き分けた壁が退くなら、それ以上に掻き分けろ。俺の名はファスター。それは逃げる速度のことではない。何かを超えることに、使える筈だ。
崖の下に、氷柱に包まれた人影を高橋は見た。

9

明晰夢の中では、時間の経過は現実と同様ではない。二時間たったと思って目覚めても、現実では五分しか経っていなかったり、一瞬のことと思っても、現実では一晩が明けていたりする。
千波は明晰夢の中で「少しの間」待ったと思っただけだ。高橋にとっては、数日か、数週間の冒険に感じていた。
氷の嵐に長時間晒された高橋は、無数の凍傷を負った姿で帰還した。
「千波サンの『光』がこれに繋がっていた。だから辿り着けたし、帰ることも出来た」
まだ冷気が彼の周囲を覆っており、彼の一言が吐き出される度に、巨大な白い塊となった。
高橋は巨大な氷塊を抱えていた。
その中に、時を止めた多摩川准教授の姿があった。
千波は大声を上げた。感情が爆発し、周囲の空間が歪み、水が空間から溢れ出た。
高橋はごとりと氷塊を置く。彼女はその表面に縋った。氷で皮膚がくっつくかと思われたが、彼女の体温か、それとも涙の熱か、氷は融解を始め、水煙となって蒸発しはじめた。目を瞑ってはいるものの、多摩川の顔はまだ生きているように見えた。この氷を溶かせば、

生き返るのかと思える程に。
蒸気の中から多摩川の肉体が顕れる。千波は力いっぱい抱き締めた。多摩川は目を開けない。これは多摩川の生きた肉体ではなく、魂のようなものでもない。恐らくは、千波の心が作った幻だ。彼が死んだと認めたくない彼女の作り出した、彼女自身の心のしこりだ。何故なら、高橋自身も、まだ静尾や小山さんや苺や錨や涼子が、すぐそこに居るような気分になるからである。もっと強い思念ならば、そこにその姿を造り出すことは出来るだろう。何故ならここは、どうとでもなり、どうにもならない無意識——明晰夢の世界だからだ。

何度強く抱きしめても、どんなに泣き叫んでも、多摩川の肉体は目を開けることはなかった。
泣き疲れて、千波は座り込む。
「一生私は高橋くんのことを許さない」
千波は呪詛を吐く。
「何てことをしてくれたの。私の心の一番奥底に、土足で入るような真似をして」
「……御免。このトラウマに、向き合う必要があると思って……」
どう謝っていいのかも高橋には分らない。正直に話すしかなかった。
「でも一生高橋くんには感謝しなければならないと、私は思う」
多摩川を強く抱きしめている手の所から、多摩川の肉体が融解し、蒸発してゆく。
これは「成仏」なのだろうか。仮面演劇で見た、言葉を闇に飛ばすことで彼らのトラウマを成仏させる方法。俺は彼女のトラウマを、成仏させたかったのか？　千波は目を開けない多摩川の顔をしばらく眺め、世界で最も優しいキスをした。
上半身から順に彼の肉体は薄くなり、ゆっくり存在を消失していく。
その時、高橋は彼の右足首後ろ、アキレス腱の部分に「手形」がついていることに気付いた。思わず指差し、叫ぶ。
「手形が！」
初めて彼に会った時のことを思い出す。東京タワーの前で。彼は飛び。気象衛星ひまわりに手形を残してきたと言った。
「轡が……あそこまで来たという証拠？」
哀しみや喪失感や成仏とは、別の感情が湧いてきた。
人の気持ちを土足で踏みにじる冒涜。ついさっき、千波が高橋に感じた強い感情。それは彼女の事を思うが故だと彼女は理解できた。だがこれは誰の為でもない冒涜だ。
俺はここまで来れるぞという、自慢の為の、脅しの為の、冒涜だ。

怒りで目が覚めた。そんなこともあるのかと、高橋は不思議に思った。
気づくとここは千波の部屋のベッドで、隣に彼女が寝ていた。彼女は涙を流していて、子供のように丸まり、高橋の腕にしがみつくように眠っていた。酷い事をしたのかも知れない。後悔の気持ちが湧く。しかしそれ以上の酷い事を、轡はしたのだと思う。
千波が目を開けた。
「ありがとう」

一言いい、千波は高橋をじっと見た。茶色く色素の抜けた瞳が彼女の肉体の瞳で、光の加減か、緑がかった茶色に見えた。

「私の闘うべき相手を、思い出させてくれて」

第四章　夢を見る都市

1

朝から身を清めたくなった。

日本人特有の感覚だろうか、と高橋は思う。いや、死出の旅を覚悟したら、人は皆身を清めるだろうと想像する。

どうせなら五人残っているうちに、総攻撃を掛ければ良かった――その言葉を高橋は飲み込む。それで誰かが死んだら、もう少し慎重にすべきだったと、静尾の死を何故生かさなかったかと別の後悔をしただろう。それは結果論だ。皆納得してこうなった。誰かが悪い訳じゃない。

そもそもあの惨劇の夜、何故車が襲撃されたのか不明だ。何故居場所がばれたのか、何故目を覚ました時誰もいなかったのか。分らないことだらけだ。分らないことだらけのまま死ぬのが人生なのだろうか。立花涼子がビルから飛んだ理由。俺の人生の目的。

小山さんや苺サンは、訳も分らぬまま命を落とした。錨は湖に沈められたのか？　あらゆる物理連絡手段でも繋がらない。オリンポスに飛んでいる間、千波は明晰夢の中で錨の夢と繋がろうとしたが、駄目だったという。

死んだらいなくなる。ごくシンプルな真理が目の前にある。

千波が身を清めるには、介護の力を借りなければならない。彼女の背中を流しながら、高橋は作戦を語る。

「どんな相手でも、二度殺そう」

「そうね」
彼女は背中越しに頷く。火傷の痕は全身に広がっていて、錆びついた鉄扉を想像させる。しかしこれでもしなやかに動くのが、生命の不思議さを感じる。千波は続けた。
「轡の夢の中にガーディアンがいるのか、いたとして何人かも分らない。私たちのうちどっちかが誰かを殺したら、残りがもう一度殺しましょう」
「簡単なルールだな」
「シンプルに行きましょう。どっちかが轡に辿り着いたら……」
「どっちかが素早く殺し、もう一方がもう一度殺す」
「シンプルね」
「シンプルだ。どうせ夢の中では複雑なことは考えられない」
高橋は煙草を吸おうとしたが、千波に遠慮してやめた。
「どっちかが先に殺されたら？」
「二度殺されるまいと庇う――それは止めましょう」
「何故？」
「轡への最短距離が削がれる」
「……シンプルだな」
千波が死んだら。俺が死んだら。考えなくていい。轡に辿り着け。ただそれだけだ。
千波は煙草を吸ってどうぞ、というゼスチャーをした。帰ってこれない部屋かも知れないし、と呟く。
「最初からそうしておけば、こんな事態にならなかったかも知れない。でもそんな作戦を強要するほど、私は覚悟が出来てなかった」
「そんな無茶言ったら、誰もが反発していたろうさ。『もうちょっとましなやり方はないのか？』って」
高橋は千波の背中を流しながら、煙草の味を噛みしめる。お風呂の暖かな湯を触りながら、「みんなで温泉いってフグ食いたかったな」と呟いた。
朝食を作るのを手伝おうと思ったが、千波は一人の方が段取りが楽だからと止めた。千波の手元を見ながら、高橋は訊く。
「ずっと一人で？」
「一人で出来ないと、死ぬからね」
彼女のどこか冷めた世の中への見方は、そうした生活を続けてきたことと、関係あるのかも知れない。
簡単なピザトースト。小麦粉とチーズの程よく焦げた匂いが充満する。
「コーヒーくらい俺が」と高橋は言い、インスタントに湯を注ぐ。
こんな不思議な朝食を摂ったのは初めてだ。女と朝を迎えたことのない高橋は、妙な居心地の悪さを感じる。目の前にいるのが千波だというのも相まり、気恥ずかしささえある。
「そうだ」
ピザトーストを少しずつ千切り、四枚小皿を持ってきてそれぞれに置く。
「……」
黙って高橋は手を合わせた。千波も従う。
「静尾くん、そっちはどうかしら？　苺。量が少なくてごめんね。小山さん。洋風もたま

にはいいでしょ？　錨くんは食えたら何でもええわ、って言ってくれそう」
　しばしの黙祷ののち、「遠慮なく食うぞ」と言い、高橋はトーストを齧った。

「苺サンを収容した病院は、警察に通報していると思う。いずれ警察がここを知ってもおかしくない」
「決戦は今夜。時間はないわね」
　高橋は念の為情報を得ようと、ＰＣを開いた。表情が途端に険しくなる。
「何？」
『汐留地区、爆発倒壊。三度目のテロか』
　汐留の高層ビル群が、ゆっくりと倒れてゆく。丸いビルが四角いビルに寄りかかり、四角いビルは隣に寄りかかり、ドミノ倒しになってゆく。壁面のガラスが粉々になる。投げ出されるオフィス机や椅子、人の姿が見えた。ネットには「これで新橋が２℃暑くなったのが元に戻る」「ざまあ上級」と、悪意ある書き込みが増えてゆく。
　千波がテレビをつけた。緊急ニュースとテロップがある。ニュースキャスターは何度も練習したであろう調子で言った。
「皆さん、落ち着いて下さい。汐留地区は現在封鎖されています。テロを警戒してください。荷物検査を各駅で実施します。これまでのテロで使われたものは、大きめのトランクに積まれた爆薬でした。旅行者を装えば、いくらでもトランク姿になることが可能です。しかしトランクを持った人を偏見の目で見ないで下さい。通報も遠慮して下さい。混乱を避ける為です。荷物検査済みはこのシールを貼ります」
　キャスターはピンクのシールを見せる。
「それ偽造されたら終わりじゃねえか」と高橋は冷静に言う。一体この東京に、何人トランク持って移動してる奴がいるというのだ。地方から出張してきた人。観光の人。外国人。
「汐留テロ、続報です。……えっ、あ？　マジで？」
　慌てたキャスターは、渡された原稿をＡＤらしき人に確認する。
「発表してもいいんですね？」と上に視線を上げ、了解を得たようだ。
「失礼しました。取り乱した事をお詫びします。私自身も信じ難いですが、落ち着いて聞いて下さい。もうひとつ爆発です。繰り返します、二つ目の爆発。品川港南地区のビジネスビル街が、爆発、倒壊しました。監視カメラ、出る？」
　品川駅と高輪ゲートウェイ駅の間、港南重要開発区域。重要な企業の本社ビル、そのいくつかの塔が赤い炎を上げて倒れてゆく。黒煙は周囲を覆い、渦を巻き、上空を黒く染めている。
「ハア？　ちょっと待ってよ！」
　ニュースキャスターは更なる情報をもたらした。
「えー、第三報です。代々木の新国立競技場が爆発、炎上中です。木造建築で知られる新国立は万全の火事対策をしていましたが、想定外の複数の爆発があった模様です。これも、映像がある模様」
　天まで届かんとする炎の柱と火の粉。まるで巨大なキャンプファイヤーだ。火は何かを浄化する。「火祭り」とネットに書き込まれてゆく。暗い赤さが何かの恨み節に見えた。Ｏ字型の屋根が、端からがらがらと崩れた。

「風下で火の粉が延焼を起こしています。付近の方は指定された避難所へ避難してください。今後風向きも変わります。繰り返します。汐留、品川、代々木の爆発現場の近隣の方は、避難して政府の指示を待ってください。現場付近に近づかないで下さい。『渋谷の穴』に近づいて、落下して亡くなった方を思い出して下さい。首都機能の混乱が予測されます。皆さん落ち着いて行動して下さい。政府が会見をします。指示を待って下さい。我々は事実として、この映像を流しています」

高橋と千波は顔を見合わせる。

「……轡だよな？」

「それ以外のテロ組織にも襲われていたとしたら、悪い冗談」

「確かに」

〈空飛ぶサークル〉は、一体何がしたいのか？　ただの金稼ぎだとると、彼らに依頼する何者かの目的は。

高橋は、ひとつの可能性に突然気付いた。

「今『轡は寝ている』ってことはない？」

「？　どういうこと？」

「今までのテロって大体朝じゃない？　『人は夜に寝る』の裏をかけば、侵入を防ぎやすくないか？」

「……その可能性は考えていなかった」

「今寝て、侵入を試みるという手は？」

「ある。ていうか、それこそが轡が私たちから隠れる唯一の方法だったのかも」

二人は狭いベッドに並び、カーテンを閉めて暗くし、眠りにつこうと試みた。

つけっぱなしのテレビからは、何度も同じ炎上の映像が流されている。酒で酩酊しては明晰夢にならないから、酒の力を借りる訳にもいかない。睡眠薬も論外だ。

「……もう寝た？」

「……全然」

高橋はしばらくの間のあと、ふんと笑う。

「どうしたの」

「修学旅行みたいだな。『もう寝た？』って聞きながら、いつの間にか寝てた」

「ごめん。私行ってないの。施設にいたので」

「あ。ごめん」

「いいのよ。そういう『普通の人生』を聞くのは、大人になってからは楽しいわよ」

「さっき作ってくれたピザトースト、とても美味しかった。最後の晩餐として、俺の人生を締めくくるのに相応しい」

「フグと温泉がまだ残ってる」

「それも、一回手放すさ」

「？」

「帰って来れると思ったら、思い切りが出ない」

「……そうか。そうよね」

「……」

どちらからともなく、手を握りあった。
千波の手は小さく、指が長かった。火傷の痕が凸凹を作り、彼女の手なのだと触覚で分る。暖かさが通じてくる。二人の体温が通じあう。
「……」
「……」
無言の間が流れる。眠るどころか、高ぶりの方が大きい。
「こういうとき男は、一発ヌイて寝るんだが」
「……」
冗談が滑った。高橋は変なことを言ってしまったと後悔した。
「女もそうよ」
思わず彼女の目を見た。彼女は高橋を見ていた。
ターコイズブルーの瞳ではなく、茶色の透けた瞳であった。カーテンで暗くしていても、それははっきりと高橋を見ている。
どちらがどちらの唇を奪ったのか、高橋は覚えていない。顔を触ったのは高橋だった。どちらがどちらの服を先にめくろうとしたか、千波は覚えていない。ぎゅっと抱き締めたのは千波だった。
火傷の痕だらけの彼女の肌は、触るだけで痛みを与えるかもしれないと高橋は思った。しかし彼女は痛がるのではなく、心地良いという。千波は高橋の腕に、胸に、唇で触れた。高橋は千波の胸に、腕に、唇で触れた。
「あの、……初めてだから、やさしくして下さい」
と、彼女は突然少女のように言った。
「え？　多摩川とか轡とかと……」
「夢の中では何度もしたわよ。体は自由に動くので。でもこの動かない足じゃあなんにも出来ない。幻滅されるのも嫌だし」
「……俺はいいのかよ」
「幻滅とか、もうそういう関係じゃないと思って。……気持ち悪くて、ごめんなさい」
高橋は優しく首を振り、彼女の筋張った傷、裂傷のような傷、引き攣って皺になった傷、すべてにゆっくりと触れ、口づけをした。それは彼女が生きてきた人生の軌跡であると高橋は思った。そう思うほど、それらが愛しくなってきた。痛くないだろうか。彼女の反応を見ながら、高橋は全身のそれをゆっくりと一筆書きにした。
千波は目を瞑り、時に反応し、涙を流した。彼女は器用に半身を起こし、同じことを高橋にもした。まるで明晰夢の中にいるように、お互いの気持ちが理解できた。それは明晰夢でも超能力でもない、人間に本来備わった普通の力だと高橋は思った。それはただ、相手を理解する力だ。
彼女の中は、海のように暖かかった。
彼の熱を、包み込んで幸せであった。
すべてがターコイズブルーになり、海の中で二人は溶け合った。
「空飛ぶ悪夢で会いましょう」
千波が耳元で囁いた。

2

ヘリの音が聞こえる。つけっ放しのテレビからだろうか。煩いラジオのノイズにも聞こえる。これは明晰夢の入口の合図だと高橋は知っている。これが大きくなれば金縛りが来る。今日ばかりは、それが打ち寄せるさざ波に聞こえる。ターコイズブルーの海のさざ波だ。

高橋は身を翻し、身体の拘束から逃れた。テーブルの上の煙草に火をつけ、煙が吸い込まれていくことを確認した。

「ここは、夢の中だ」

高橋は夢の王である。全てを制御し、全てを思い通りに出来る。これまで好きなことをし、冒険も欲望も成した世界に、今還ってきた。自分の意志はすべて通る。世界は指先まで俺のものだ。

ベッドの隣には、千波が横たわっていた。夢の中の美少女の姿――短髪（ショートカット）で、白いワンピースで、透き通った白い肌で。全身が白く輝いているように見えた。彼女はこれは「理想の姿」だと言った。身体の自由を奪われ、醜い怪物のようになった女の子が、こうなりたかった姿。夢の中で、人は理想の姿を纏うことが出来る。こっちが「本当の」姿で、現実の姿はたかが仮面。

彼女がゆっくりと目を開いた。ターコイズブルーの瞳。最初はこの目が異様で、恐ろしかった。だが今なら分る。これは彼女の憧れの色――海の色である。その瞳には、高橋を見る愛情の色があった。

「それが、ほんとうの姿なんだな」

彼女は小さく首を振った。

「夢の中では、おしゃれしてるの」

少女のように彼女は笑う。

空へ飛んだ二人は、あまりの世界の変貌に言葉を失った。

街が、自ら分解を始めていた。

眼下の千波のアパートの外壁タイルはひとつずつ剥がれ、窓枠が緩んで外れ、ガラス、鋼線、留め具に分解された。ねじはくるくると勝手に回り出し、釘はするりと抜け、接着剤は液体に戻った。

土台から宙に浮いた民家は、柱と壁と天井に分離し、板一枚へと還元する。家具も電化製品もひとつひとつの部品にばらけ、人も部品になった。手、指、爪、脳、目、血管、神経。木は葉と根と枝に分けられ、葉脈が抽出された。電柱の電線が、蛸の脚のように跳ね回りながら飛んで行く。道路のペンキは剥がれ、宙に横断歩道だけが波打ったかと思うとアスファルトも波打ち、蛇のように宙に浮いた。折れ曲がった所から亀裂が走り、黒い石に粉砕された。

高度を上げる。東京が自壊している。スローモーションで崩れる汐留、品川のビル、炎の新国立。遠くの高層ビルは砂のように崩れてゆき、電車は線路ごと浮き、空中で部品化してゆく。

西の空に、巨大な紅い光。
肉眼で見るよりも何倍も大きな、夕陽だった。夢の中では現実より月が大きいことがあるが、この夕陽もそうだった。巨大恒星が近づき、その重力に呑み込まれる直前の景色のようだった。空気は揺らめき、赤ともオレンジともピンクともとれぬ複雑な光が、東京を斜めから照らしている。
自壊を繰り返す部品たちは、ある一定方向に流されていた。津波に流されるかのように、一方向に。更に上空へ、状況を確かめる。流れはまっすぐかと思われたが、ゆるりとしたカーブを描いている。いや、渦だ。上から見ると、このカーブは渦の一部だった。この無限の流木は、ある一点に吸い込まれているのではないか。さらに上空へ。
東京の中心――おそらく皇居だった場所。そこへ全てが集約していく。黒いスーパーセル台風が出来上りつつあった。とぐろだ。とてつもなく大きな黒い龍が、とぐろを巻いているように思える。紅い夕陽越しの、黒いとぐろ。
「これが轡の心の中……？」
「轡がいるとしたら……」
高橋は巨大な嵐を指さす。
「あの中心だよな？」
二人は、部品の嵐を突っ切った。

かつて調布だった所から、皇居上空を目指す。新宿副都心の高層ビル群は既に大崩壊し、地下街もあらかた暴かれ、空中迷路のように露出していた。右からコンクリ塊が飛んできた。高橋は側転（バレルロール）で躱す。高速で進み、かつ回転する様は、螺旋の軌道を描いた。千波も同じ軌道で続く。
黒い人影がビルの陰から現れる。十、二十、三十。
都市迷彩服に重装備だ。黒いマスクを被り、素顔は見えない。
「自衛隊の連中か」
高橋は手頃な大きさのコンクリや鉄を改変し、引き付け、盾をつくった。
千波は自分の周囲に水を張り巡らせ、球をつくった。
重火器が火を放つ。高橋はその弾より速く飛ぶ。鉄の盾が、体を抉ろうとした弾を火花と共に跳ねる。千波の水の球体は、全ての銃弾に抵抗を与え、水中で仕留める。
高橋は光より速く兵士たちの腹を貫き、首をもいだ。
打合せ通り、千波がその死体に津波を被せ、二度殺す。
遠慮はしない。殺らなければ殺られる。二人の覚悟はミリ秒の遅れもなかった。
崩壊する建物の陰から、更なる兵士が現れた。今度は青いマスク。選抜された特殊部隊だろうか。
「後ろも！」
千波が叫ぶ。空中に巻き上げていく森の中から、別の迷彩柄部隊が顔を出す。囲まれたことを理解する。高橋と千波は背中合わせになった。千波の呼吸が後ろで聞こえる。二人の呼吸が一致していることに、高橋は気づいた。
「合図をしたら同時に俺の右へ跳ぼう」
「えっと……私から見て左ね？」

「そう」
1、2、3。
死の弾丸が二人を追いかける。十字砲火を千波の球が止め、高橋は上へ展開して囲みに穴をあけた。間髪入れず千波は津波でさらう。高橋は円の形に飛び、津波もぐるりと輪を描いた。
「あと何人いるんだろ」
「来たら来たまで！　中心へ！」
瓦礫と部品の雨を、高橋は両手を広げて盾へと改変する。だがそれもすぐに自壊する。生やすより、のけた方が早いか。
「運命よ、道をあけよ」
二人のゆく道だけが、雲間から差す光のように明るくなった。

その先に人影があり、こちらを向いた。

この世界の神。〈空飛ぶサークル〉主催者。テロリスト。夢の中に顕れる男。
轡了は紅い太陽を背に微笑んだ。
「やあ」
元東京だった空中津波が、轡を中心にぐるぐると回っていた。
「まさかこのタイミングで侵入されるとはね。バレちゃったか」
「轡！」
高橋は光速より速く、彼めがけて飛んだ。

3

轡は高橋の体をいなした。再び突撃するも軌道を曲げられ、躱される。
「折角仲間になろうってお誘いしたのに、断るなんて非道いよ、高橋君」
「何故偽者を寄越した！　来るなら本人が来いよ！」
「リアルの僕じゃ分らないかなと思って、折角そっくりさん作ったのに」
千波が水を槍にして飛ばす。轡はそれも避けた。
「今高橋君と喋ってるんだ。千波は黙ってて！」
時折轡は子供のような所を見せる。いや、本当に子供のような気持ちで東京を分解し、虫の肢を千切るように人を殺しているかも知れないと高橋は思う。
「東京を破壊して、一体どうしたいんだ」
「そうか。君たちは知らないんだね。ひとつ教えてあげるよ。ここは僕個人の夢の中じゃない」
「？」
「東京に住む、人々全体の夢の中さ」
「は？」
「といっても今皆寝てないから、夢というより無意識の中といっていいかな。『東京の無意識』といっていいね」

轡は両手を広げ、この崩壊する街を紹介した。
「人には望みがある。無意識の願望だ。それを『夢』と言ってもいい。プラス方向の夢もあれば、マイナス方向の夢もあるよね？　全部を足すとどうなると思う？　プラス方向の夢ってバラバラじゃない？　金持ちになりたいとか、アレが欲しいコレが欲しいとか。七色全部足したら灰色みたいな。ところがマイナスは大体同じだから、全部を重ね合わせるとマイナス方向の黒だけになる。それがここ」
轡は笑った。宝物を発見した子供のように。
「『なくなっちまえ』。――これが皆の集合的無意識。僕はテロリストなんかじゃない。みんなの合成された無意識の願望の、大きな流れを実現しているだけ」
天に手を伸ばした塔たちは空中で崩れてゆく。入り組んだ薄汚い居住区は解体されてゆく。
これが東京に住む人間たち共通の願い。解体。爆破。砂になること。
「それが楽しいの？」
千波が訊く。
「最高だよ！　僕は人の心の奥底の奥底まで知りたいんだ。仮面を被って生きてる上っ面の、その下の下の下に、本当は何があるのかを。そして人類の無意識の下の下の下に、本当は何があるのかを。地獄でも天国でもいいさ。そこに何があるかを知りたい。多摩川と同じさ！」
「同じじゃないわよ！」
千波は津波を浴びせ、轡は躱す。
「多摩川は欲望の為に、人を殺したりしない」
「別に死んだっていいじゃん。それはそれまでってことなんだから」
何かこの男は根本的にずれている。轡と会話すればするほど、高橋は別の生き物と話している感覚になる。「他人」だからだろうか。轡という「他人」を自分は理解できないのか？　いや、轡にはひどく子供のような面が強い。この男は子供のままずっと生きてきて、これからもそうしようとしているだけではないか？
「そうだよ？」
轡は急に高橋の顔へ振り向いた。
「ぼくはこの遊び場で、永遠に遊びたい。その為に永遠の命が欲しいの」
「高橋君！　無意識が漏れてる！」
仮面だ。仮面を被れ。自分の考えと、轡の考えが混ざる。俺は俺で、轡ではない。
強く仮面を意識したその瞬間、背中に熱い感覚が走った。
銃弾が貫通するときは痛みではなく熱さを感じるという。
なんだ？　背中を触るとぬるりとする。赤い血だ。
腹部まで貫通した。死んだ？　死んだのか俺？
背中が熱い。腹が熱い。伏兵がいたのか？　気が付かなかった。俺、死ぬのか？　いや、現実に起きてなるものか。留まれ、夢に留まれ！　血で染まった俺の体！　まだ闘う！
俺を背中から撃った奴は誰だ！
銃口の白い煙。中から現れたのは、見慣れた赤いジャンパー。
「錨くん！」

マシンガン・ジョー、錨錠は生きていた。

4

「なんで！　なんでだよ！」
高橋は叫んだ。何故錨が轡の側につくのか？　頭が回らない。どういうことだ。あの湖、惨劇の夜。錨だけが見つからなかった。みんな死んだ。みんな死んだ。
「お前があの日やったのか！」
錨は無言でマシンガンをぶっ放した。
高橋は瓦礫を集めて盾を作り、千波は水の壁で弾を止める。
「せや」「せやで」と、言葉の弾丸が弾けた。
「ワシが」「君らを」「売った」「しょうもない」「喧嘩ばっかりしとるし」「大阪人は」「速く結論をつけたいイラチや」「どうせワシ途中で起きるから」「ちょこっと自衛隊に連絡して」「睡眠ガス入れたらお仕舞い」「お仕舞」「仕舞」
「睡眠ガス……いつ寝たのか、記憶にない筈」
「じゃあ横浜の予言者も」
「ワシ」「ワシ」「ワシの」「しょうもない」「成り済まし」
錨は笑って銃弾を放つ。
「ワシは」「勝てる方につく」「寄らば」「大樹やん？」
俺達が見ていた、陽気で苺と丁々発止の錨は、全部「仮面」だったのか？　錨は、現実の方で仮面を被っていたのか？
再びマシンガンが唸る。
「どっちが正義の味方か」「考えたら分るやろ」「正義ってのは、沢山の人を『せやな』って集めるための理屈やで？」「仲間を増やしやすい正義のほうが、より強い正義や」「だから」「こっちが」「天下取る」
轡は新宿都庁を指さした。ツインタワーが崩れる。南棟が北棟に倒れ込み、二つの塔ごと新宿公園に倒れた。
「これで都知事死んだかな？　今現実でもあそこはテロで大爆発」
倒壊の恐ろしい音が、鼓膜や腹にびりびりと響く。
錨が銃弾を飛ばす。
「人はいつか死ぬ。それまで楽しいかどうかやんか」「明日はフグ食って温泉、で終わる人生、結構幸せやと思うけどね」「苺はあそこで死んで幸せや。あんなデブやったら高血圧とか成人病まっしぐら。このまま女の幸せもなく病院通いの人生しか待ってへん」「小山さんもや。小人症なんて寿命短いし、売れへん文房具に埋もれて突然死するよりマシやで」「ワシはみんなを心底理解してた」「だからあそこで終わるのが最善や」「千波ハンもせやと思ってたけどな」「けど高橋君は」「説得出来ると思ってたで」「理系やし」「損得勘定出来やろってな」
「……馬鹿にするなよ」
怒りが言葉になって湧いてきた。現実の高橋ならば、こんな流暢に言葉にすることが出来ず、ただ下を向いて脳内で嵐が渦巻くだけだったろう。かつて立花涼子を前に、俯いて

いただけのように。しかしここは明晰夢の世界だ。思いは実現する。
「馬鹿にするな！　損得勘定に従うかどうかは俺の心が決める！　俺は、理系である前に人間だ！」
高橋は飛ぶ。
「はは」
錨はマシンガンを放つ。
「はは」「はは」「はは」「はは」「はは」「はは」「はは」「はは」
嘲笑は、雨のように盾に弾けた。
「さむい」「さむい」「さむい」「さむい」「さむい」「さむい」「さむい」
その言葉は高橋の盾に氷を付着させ、千波の水の球を凍らせてゆく。
「割れろ」「割れろ」「割れろ」「割れろ」
言葉の弾丸は、千波の氷を砕き、高橋の盾を割った。
千波は高橋をかばうように前に出た。
「高橋くんは一回死んだ。もう死ねないでしょ」
高橋は背中から腹に貫通した熱さを思い出した。鮮血はまだ止まっていない。
「援護して」
水の魔女は高橋の手を握り、飛んだ。
「無駄」「無駄」「無駄」
千波の水球が弾けた。千波の水を言葉で無効化する。思うことは夢の中で実現する。
千波は水を逆らせ、錨の頭部を捉えた。頭部を水の球でくるむ。深海の圧力の金魚鉢が、錨の呼吸を縛った。
「なんやこれ！」「なんやこれ！」
ごぼごぼと空気の泡だけが水の球から出てゆく。吐けるが吸えない。吐けるが吸えない。
球体に錨の顔が屈折し、膨らみ、歪む。
「……！」「……！」
喋れなくなった錨は、焦りで言葉が出なくなった。
「苦しい！」「苦しい！」
錨は顔の周りの水球を言葉の弾丸で払おうとしたが、「苦しい」の意味が、錨に地獄の苦しみを与えた。
「……」
顔がチアノーゼを起こした錨はマシンガンを周囲に乱射する。高橋は懐に飛び込み、体を貫く。
だがそれより一瞬早く、錨の体が消失した。
「短時間睡眠男（ショートスリーパー）の早漏がッ」
高橋はサイレント・ドクターの言葉を借りて舌打ちする。
次会うならば、錨に言わねばならない。どこで死ぬかは自分で決めると。
轡は笑った。
「やるじゃん！」
天候を改変する。黒雲が水墨画のように湧く。夕陽を受けて燃える鉄のように染まる。
雷。

静尾を殺した雷だ。
雷の発生を肉眼で見れる者などこの世にいない。だが高橋には見える。高圧の大電流が、空気の裂け目に沿って伝導するさまが。
光より速い男よ。スローモーションで雷が出来上がる、それを避けながら進め。上から、前から、右から左から下から、迷路のように発生する無数の雷を抜け、躱し、伏せ、ジグザクに進め。その軌跡こそが雷。電光石火は俺の方だ。
「轡！」
胴体を真っ二つに貫くつもりだった。だが急激に時間の進行速度が鈍く感じた。周囲の空間に重さを感じる。視覚的にも歪んで見えた。轡の周囲の空間を、ぬるりと抜けてしまう。最初に突撃したとき、闘牛士（マタドール）のように躱された。この力か。
「人間の想像力は無限だ。僕は負のエーテルを纏う」
真空中の光の速度はこの世で最速である。物質中の速度はそれより遅く、屈折率1以上で定義される。だが1以下の「想像上の物質」を負のエーテルと呼ぶ。そこでは、光速より速い速度が存在し得る。
轡は指先を突き出す。光速より速く空間（エーテル）内に雷が走る。高橋は世界を改変した。周囲に飛び交う部品から尖った金属を選び、組み合わせ、地上まで繋ぐ。
「VCCからGND。エンジニアの基本だろ」
雷は地上（アース）へ散った。
「へえ。じゃそれ以上は？」
轡はより大きな雷を高橋に落とす。高橋は更に世界を改変し、鉄線で網を作り周囲に巻いた。雷はその表面を通り、高橋に触れることなく地上（アース）へ逃げる。
「なにそれ！」
「静電遮蔽。シールド線の原理くらい知っとけ」
とはいえ、これだけの大電流にありあわせのシールド線で持つかは保証の限りではない。轡を取り巻く媒質（エーテル）を突っ切ることは困難であり、かつ雷の速度は光速を超える。ファスターですら飛べない空間が盾か。
千波が水球を作り、いくつもぶつけた。
「水なら感電するんじゃないの！」
「たしかに！」
轡は、空中で巧みに水球を避けた。同時に水球は爆発し、そのいくつかは水しぶきを轡に浴びせた。これなら雷は轡の体を走る。雷は落とせまい。
高橋は突っ込む。轡は避ける。
「鬼ごっこかい？　どっちが速い（ファスター）かな！」
光の速さで突っ込む高橋。負のエーテルでその速度は相対的に落とせる。千波が水の球をぶつけて援護する。二対一でも轡は捕まらない。
高橋はふと思った。
轡の背中には何がある？
東京タワーの上空で見た十二枚の翼は、背中を隠す為の道具ではないか？　轡は何に恐怖し、何を恐れるのか？　あいつは見てばっかりで、俺たちに背中を見せていない。
「千波、援護を頼む」

千波は無言で大波をぶつける。それをモーゼのように割る隙を突いて、高橋は空間を突っ切り、轡の背後を取った。
「何だこれは！」
轡の後頭部には、轡の顔がついていた。
轡の後ろの顔と、高橋の目が合う。
「ぼくに恐怖はない。恐怖がないのがぼくの弱点さ。んー、弱点？　そうじゃないかも」
「……だから、人の心を覗いて楽しいのか」
「面白いことに気づくね！　だからぼくは人を理解したいのかもね！」
たまたま、高橋と千波が轡を挟む位置関係だったから、高橋は気づくことが出来た。――千波の背後に、再び現れた錨に。
錨は背後から「死ね」「死ね」「死ね」「死ね」と、言葉の弾丸を撃った。全弾当たれば、何度千波を殺せるだろう。
「二度寝したな早漏野郎」
高橋は光より速く錨の肉体を貫通した。
「なんでや」
全ての言葉を言う前に、千波がターコイズの津波を浴びせた。錨は素早く二度死に、肉体に意識が戻ることは二度となかった。
錨にかける言葉を、高橋は永遠に飲み込むことになった。高橋は無意識に千波に寄り添い、千波も無意識に高橋に寄り添っていた。二人は無意識に手を繋ぐ。
「ありがとう。助かった」
「他にも伏兵がいるかも知れん。さっさと片付けよう」
轡は、二人を見て驚いた。
「あれ？」
「……何だよ」
「君たち、ヤッたの？」
明晰夢の中では、無意識を隠すことが出来ない。
「そうよ。問題でも？」
轡は額から第三の目を出し、二人の「背中」を改めた。
「しかもオリンポスも、他人の目も、背中から無くなっちゃってるじゃん。詰まんねえの」
轡は腕を発光させ、次元の切れ目をつくった。
「じゃあ、立花涼子にでも会う？」
次元の切断面から、光輝く立花涼子が現れた。
まるでビルから飛んだときのような、美しい全裸のままの恰好で。

5

光り輝く裸の立花涼子。だが彼女は決して目を開けなかった。多摩川准教授のような――「死体」に見えた。
「これが立花涼子のアストラル体。良く出来てるだろ？　まるで本人みたいだろ？　これはアストラル界に散った涼子の原子を再び集めて結合させたんだ。原子結合的には死ぬ前

の彼女と同一だ。でも「魂」が入らないと動かないんだよね。なんでだろう。惜しいんだよ。何回も何回も夢の中で死ねたら、自我と肉体が切り離せる筈なのに」
「何を言ってるんだ？」
「彼女はね、他の女と違って才能があった。何せ、夢の中で四回死ねたんだ」
「は？」
「でも五回目で、現実と夢の区別がつかなくなってしまったんだよね。ほんと使えない」
彼女は殺されたのではなかった。自殺でもなかった。彼女は進んで死に、限界を迎えただけだった。それは洗脳なのだろうか。実験の失敗なのだろうか。彼女は轡に会わなければ、ビルから飛び降りなかっただろうか。それとも、自分の役割を、ただダイブすることに見つけたというのか。
秋葉原で爆発があった。新しく出来た金色のビルが崩れ、電気パーツ街と客引きのメイドたちめがけて倒れてゆく。現実でもこれは起こっている風景だろうか。
高橋は、賭けるべき可能性があることに気づいた。
「千波。一人で闘えるか？」
「どういうこと？」
「賭けだ。外れるかも知れない。俺、起きるわ。轡の本体の位置、分ったかも知れない」
「え？　そんなことある？　第一日本にいるかすら、分ったものじゃなくて？」
「だから賭けなんだ。千波はあと一回は死ねる。俺は一回死んだし、足を引っ張るだけだ。俺は起きて、眠った轡を確保する。それまで一人にすることになるけど」
「うん。分った。……信じる」
千波は即答した。そうして少女のようにいたずらっぽく笑う。
「？」
「私一人で倒しちゃうかも知れないわよ。どっちが先に轡を殺せるかゲーム。夢の中でか、現実でか」
遠ざかるヘリの音。これは夢から覚める合図だ。考えろ。考えるんだ。高橋は考えた。考えれば考える程脳は目覚め、夢から体は消えてゆく。
奴は子供だ。子供の心理を考えるんだ。東京をぶっ壊しているとき、どうしたい？　全てを見渡せる展望台から眺めるだろうか？　いや。眠りながら見ることは出来ない。うたた寝のときにテレビの音だけは聞こえていることがある。音は聞ける。子供なら砂被り席、一番前の席に行きたがるだろ。それはどこだ。俺は多分、あそこだと思う。

寝返りを打ち、現実で高橋は目覚めた。
煙草に火をつけ、紫煙がただ流れるのを見て、ここが現実であることを確認する。
つけっ放したテレビからは、新宿都庁と秋葉原の爆破テロについてリアルタイム中継をしていた。夢の中で見た爆発は、現実でも起きているのだ。
白いシーツにくるまれ、裸で千波が寝ていた。こちらの光景の方が夢みたいだった。
煙草を消し、机の上にあったカッターナイフを手に取る。そして世界一美しい寝顔に、世界一静かなキスをした。

これは賭けだ。
高橋は轡の真の顔を知らない。学生時の写真とも、偽轡とも違うだろう。だが顔を整形していても、身体までは出来まい。似た背格好を、片っ端から探してやる。
走るしかない。砂被りの席へ。
汐留、品川、代々木、新宿、秋葉原。東京の代表的な場所が爆発した。だがこれらを結ぶ線は、「東京の代表的な所」ではない。

――山手線。

そう高橋は直感したのだ。
環状にぐるぐる回る電車の中で寝ていれば、どこの現場も砂被り席だ。環状線爆発テロツアー、外回り六十分コース。今、秋葉原を過ぎた。全てを聞きながら寝ている男。それが轡なのではないか？

手ぶらで走れば、対テロの荷物検査はどんどん突破出来る。ポケットのカッターナイフは鉛筆削り用だと強弁する。爆破テロとカッターは関係ないだろと主張して突破する。とにかく山手線に辿り着き、飛び乗る。
外回り線、全車両の寝ている奴を全員叩き起こす。
それが高橋の賭けだった。
先頭車両に乗り込み、寝ている男を全員揺すって起こし、次々に起こして最後尾まで走る。次の駅で降り、来た電車の最後尾から先頭まで走る。いずれ駅員に見つかるか、通報されるだろう。「スリに合いそうでしたよ」と親切なふりをしたり、「スマホを落としそうでしたよ」などと最初は言い訳したが、次第にそんなことはどうでも良くなってきた。運転手と車掌に目を付けられなければ、止められることもない。走れば乗客に不審者扱いされる。次の駅までに、全員起こせばいいのだ。なるべく自然に、目立たないように歩く。
この賭けは分がいいのか、悪いのか。まるで見当違いのことをしているとしたら？　皆スマホを見ている。テロのことで一杯か、それとも今日の仕事のことか。誰も高橋には興味がない。
外回り線は、一周何台走っているのだろう。轡がいたとして、内回り線だったら。女装や整形の可能性も含めて外人も女も起こした。その中に、果たして轡はいただろうか？

次の車両の先頭。
腕を組んで眠る老人を見て、高橋は声を上げた。
東十条の喫茶店、「ジャングル」のマスター。
もう遥か昔の出来事のような気がする。昭和から時の止まった、赤い別珍椅子の喫茶店。あれは誰か役者でも雇っていたのでは、などと考えた。少なくとも、この老人は何かを知っている。
高橋は老人の前に立った。白髪で、皺が深く刻まれている。だが肌が若い。不思議だ。少し前まで若者だったような気がする。
高橋は老人の肩を揺すり、叫んだ。

「起きろ！　轡！」
彼こそが轡了。触れた途端高橋には分った。夢の中で体当たりした記憶が蘇る。同じ身長、体格、手触りが同じだ。
「起きろ！　轡了！」
高橋は老人の頬を、思い切り張った。

6

「一人になっちゃったね」
落日の都で、轡は長い髪を靡かせて笑う。
「私は彼を信じてるから」
千波は周囲にターコイズ色の津波を発生させる。透き通った美しい色で、それは彼女の心の落ち着きを示している。
「アイツに捨てられたんじゃないの？」
恥ずかしげもなく千波は答えた。
「最高の男よ」
嫉妬でもして心が乱れればいいと千波は思ったが、轡はもう自分に興味がないようだった。轡は夕陽を背にしていて、長い髪が透過し、金色の後光に見えた。渦を巻く都市の部品たちも夕陽に反射して、きらきらと動いている。
千波の体をとりまく波も、斜めの光を滑らせて煌めく。サーフィン映画のようだ、と千波は思う。

時は満ちた。
二人とも無言で殺し合った。

轡は部品たちを集めて槍に変え、槍ごと千波に向かう。
奇しくも、千波も水を槍に変じて突っ込んだ。
小山さんの無念を轡にぶつけたかった。だから千波は槍を選んだ。両者がぶつかる寸前、千波はいくつもの体に分身した。苺の思いをぶつけたかったからだ。水の槍が部品の槍に弾かれる。いくつもの千波は、水で出来たナイフで静尾のように切りつける。
二人は静止した。千波の分身は水となって落ちてゆく。
千波の腹に銀の槍が刺さっている。轡の頸動脈が水のナイフで裂かれている。
「相討ちか」
「これで双方残機ゼロ」
千波は水の球を構える。轡は声を立てて笑う。
「何が面白いの」
「面白いものを見せるよ」
轡は掌を黒い渦に向け、部品を取り出して掌の中で握りつぶした。開くと、銀色の銃があった。コルト平和（ピースメーカー）をもたらす銃。
「ぱんっ」

轡はそう言いながら、額をその銃で撃った。脳漿が後頭部より飛び出し、ガクンと頭が落ちる。しかしすぐに生き返った。
「は？」
「〈空飛ぶサークル〉のチキンレース。僕が優勝者だ。めっちゃストレスに耐えるんだぜ？　最高記録は百。僕は、百回まで死ねる」
こんな絶望的な状況でも、千波は焦らなかった。
「どうして笑う？」
「私は、高橋君を信じてるので」
「一々癇に障るなあ。残り一と九十八だぞ？　この銀の弾丸で死ねよ魔女」
魔女を封じるという銀の弾丸を、轡は生成して銀の銃に込めた。
「絶望の弾丸」
「世界から拒絶されて」
轡は銀の弾丸を放った。
千波は大津波を放った。
波の音が轟く。吐いても吸えない水の音。物心ついた時から、この苦しみを千波は背負ってきた。何を言っても「世界」には通じず、「世界」は応えてくれず、ただ首を締めてくるだけだった。千波の苦しみの原点こそが、彼女の武器だ。
その波を貫いて、銀の弾丸が飛んで来た。
千波は鳥取の砂丘を思い出していた。誰もいない砂漠のイメージを、更新しなければならない。みんながいると高橋は言った。みんな死んでいなくなった。でもただ一人、残った人がいる。私はあの砂漠に還り、彼を抱き締めたい。高橋くん。まだ私は、あなたを「巧」と、下の名前で呼んでいない。
轡の肉体を、津波がめちゃめちゃに回した。
流線形の弾丸はこめかみに触れ、きりもみし、彼女と世界の境界線から彼女の側へと侵入する。
刹那、轡の顔がはじけ飛び、明晰夢の世界から消えた。

「は？」
頬に痛みがじんじんと残っていた。夢の残像？　いや、これは現実の傷みだ。
目の前の男が両肩を掴み、叫んでいた。
「お前が轡了だな！　起きろ！」
揺すられた肉体は、目の前のぼんやりした像を捉え、次第に鮮明なものへ結び直された。
山手線。先頭車両。ファスター、高橋巧。
――そうか。俺の本体を見つけたのか。
「……良く分ったね」
轡了は微笑んだ。夢の中の絶世の美少年ではなく、しわがれた老人として。
「明晰夢は異常に体力を使う。そこまで脳に負担をかけ続けたのか」
「あはは。……気づいたらこんな体になってたよ。何度も何度も、夢の中で死に過ぎたね」
高橋はカッターナイフを老人の喉元に当てた。このまま掻き切れば、全ては終わる。

老人はぶるぶると震え出した。
「死ぬのが怖いか？」
「そりゃそうさ……。ぼくは無限に遊んでいたいのに、何でこの肉体が邪魔をするのさ。向こうの世界でずっと遊んでいたいのに、アストラル界には魔術師シモン（シモン・ザ・メイジ）もアレイスター・クロウリーもいなかった時の絶望！　永遠の命なんて、ホントはないんじゃない？　だってオリンポスには誰もいなかったし、兜率天にも何もなかったよ？　次元上昇（アセンション）なんて実は嘘なんじゃないの……？」
このままカッターを横に滑らせれば全て終わる。だがこの「他人」を排除するのは、〈空飛ぶサークル〉と同じになってしまうと、高橋は思った。こいつらを否定すればするほど、こいつらと同じになってはいけないと思った。
高橋は老人の胸倉を掴み、激しく揺さぶった。
「二度と明晰夢に入るな！　お前たちはこちらに根を伸ばしてくるな！　勝手に根を伸ばすのはいい。だがこっちの領域にまで根を伸ばしてみろ。その根を引っこ抜いて、本体まで枯れさせてやる！　俺はお前の顔を覚えた。警察に引き渡して身柄を拘束させて、二度と外に出れないようにしてやる！」
長野の山中で、錨と立小便した時の光景を高橋は思い出していた。他人同士を喰らいあう、それこそが醜い魔境であると高橋は思った。だがそれこそがこの世の本質なのだ。喰らい、喰らわれ、根を伸ばし続ける。それがこの世に生まれ落ちた者が「生きる」ということだ。これまで高橋はこの魔境から光の速度で逃げていた。だが〈空飛ぶサークル〉という他人に、高橋は根を絡めた。
「衛本の件も証言してやる。ずっと牢獄に入ってろ。明晰夢に入るかどうかずっと監視する。一回でも入ったら、物理的にお前を背中から刺しに行く。つまり俺がお前の『背中』だ」
根の話など轡には分らないだろう。だが高橋の形相が本気で何かを言っていることくらい、動物なら分る。獣と獣が相対して、一方が一方を恐れさせた形になった。
轡は恐怖のあまり目を逸らした。
高橋は、彼の目を見ていたから分った。
高橋はカッターを轡の手に握らせ、躊躇なく自分の左手を貫通させた。
鮮血はどくどくと噴き出し、現実の痛みが高橋を襲う。
「傷害罪だな。現行犯で警察へ行こう」
老人轡はぶるぶると震えたままだった。

警察が信じるか分らない。しかし高橋は証言する。自衛隊にいた衛本のこと。ＬＳＤを調達して自衛隊内を汚染していたこと。この男と衛本が関係あること。明晰夢の話は一切しない。事実だけを話した。別件逮捕でも何でもいい。轡が拘束されればいい。
高橋も拘束される。あまりの高橋の剣幕に、自衛隊に連絡を入れざるを得なくなった担当は、そこで薬物汚染のことを知り、入手先の情報を知ることになる。

ようやく外部との連絡が許され、高橋は千波に電話をかけた。出ない。あれから夢の中での闘いはどうなったのか、高橋には知る由もない。

「千波！」

部屋に戻れたのは夜遅くだった。

「千波！」

部屋を出た時と同じ格好で眠ったまま。揺すっても叩いても、彼女の眼は閉じていた。

心臓の音はする。呼吸もある。死んでいる訳ではない。何故だ！

高橋は明晰夢に入り、彼女との再会を試みた。

「千波！」

彼女は、落日の東京で時を止めていた。津波は時を止めた形で、紅い夕陽を反射し続けている。

「千波！」

こめかみに銀の弾丸がめりこむ、まさにその瞬間で時を止めている。彼女は生と死の中間にいたのだ。

「千波！」

銀の弾丸を抜こうと試みた。世界の改変の力を使う。だがこの弾丸は「他人」の弾丸だ。猛烈な意思を持ち、彼の力では抜けない。ミリかミクロンか、動かせたと思えても、元の位置に戻る強い力が働く。殺意による弾丸か？　いや、「心の中では、信じたら実現する」——彼女が熱湯だと思い込んだことで全身に火傷を負ったことと同様に、「死ぬ」と思ったことで、死と生の狭間に落ち込んでしまったのではないか？

医師の診断は昏睡状態、すなわち植物人間状態であった。千波は眠ったまま入院となった。

毎晩明晰夢に入った。彼女の絶望を引き抜こうとした。爪が剥がれようが指が折れようが構わない。たとえ一ミクロンでも動くなら、百日かけても動かしてやる。だが、どれだけ力を込めても弾丸は動かない。

毎晩高橋は明晰夢の中を飛び回った。轡は二度と現れなかった。

「たとえ少しずつでも弾丸を動かしてやる！　運命は俺の手で変える。味方の味方をする、君はそう言ったんだ！」

毎晩毎晩、彼女の夢の中に入った。

二週間が経ち、一ヵ月が経ち。

五十年が経った。

7

あれから。

〈空飛ぶサークル〉に関係した者は、夢の中に共通して現れる、「謎の男（This Man）」に脅迫され、二度と明晰夢に入れぬ程の恐怖を体験させられた。新しいメンバーを募ることも出来ず、明晰夢へも入らず、彼らは飛ぶことをしなくなった。

東京は、スクラップアンドビルドを繰り返している。どこかが更地になり、どこかに何かが建つ。誰かが木の根を伸ばし、別の誰かがそれを奪い、根を伸ばす。五十年を早回ししたとしても、人間のやっていることと木がやっていることに、大して違いはないだろう。

都内の小さな病院に、ずっと入院している患者がいる。

もう随分と歳の女性患者で、他の病院から転院してきたという。彼女が言葉を聞き、目を開けた姿を見た者はいない。いわゆる植物人間――長い間の昏睡状態だからだ。

全身に火傷の痕があり、下半身は不随である。仮に目が覚めても、十分な人生を送れるのだろうかと、他人事ながら担当看護師は心配する。

毎週水曜日になると、彼女の元に通ってくる老人がいる。聞くと古い友人だからと言い、平日に来るのは店が休みだからと言う。お店をやってらっしゃるんですかと聞くと、「ぼろぼろの文具店ですけどね」と笑う。

その老人は、古めかしいデザインのノートをいつも持ってきている。びっしり文字が埋まっていて、ラブレターですかと聞くと、夢日記ですと答えた。彼女を夢に見るたびに、夢日記を付けているんですと、恥ずかしそうに老人は答えた。素敵な恋なんですねと言うと、やはり俯いて恥ずかしがった。

「小山さんの大事にしてた文筆堂のタイガーノート。ついに最後の一冊まで来ちゃったよ」

彼は、目覚めぬ彼女に話しかけた。人工呼吸器の規則正しい音が、病室にこだましている。

「でもノート切れるまでには、間に合ったよな？」

彼は彼女の手を優しく握った。

深呼吸する。ゆっくり吐き、ゆっくり吸う。

「今日はいい天気で、目覚めるにはいい日だぜ？　あれから世界はだいぶん変わった。ちょっとびっくりするだろうな。こっちは相変わらず他人が好きなことをやってる世界で、でもその中でなんとか泳いで来たつもりさ」

窓の外の光は眩しく、彼は少し目を細める。次第に彼女の呼吸は整い、彼の深い息に同調してゆく。

彼は小さな何かを力一杯つまむ真似をし、腕をぶるぶる震わせ、床に捨てる仕草をした。

銀の弾丸が床に落ちる、その冷たい音が、二人にははっきりと聞こえた。

「俺は、諦めなかったよ」

薬で暴れないよう、緩い手錠で固定された彼女の手が、小さく震えはじめた。心音が乱れ、機器が彼女の異常を示した。先生を呼んできますと看護師は叫び、廊下を走っていった。

「空飛ぶ悪夢はおしまいだ。地に足を付けた、現実で会いましょう」

どれだけこの瞬間を待っただろう。

どれだけこの再会を願っただろう。
彼女の皺だらけの瞼は、ついにゆっくりと開かれた。その瞳はターコイズではない。透き通った茶色である。
それがほんとうの彼女の瞳である。
焦点が合った。暖かい顔を、彼は撫でた。

「おはよう」
「おはよう」